

剣戟魔界都市—ソードマンズ・サンクチュアリー—

ひん(再就職)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

尋常ならざる刃が飛び交い血潮舞う街、ソードマンス・サンクチュアリ死合う剣士の楽園、東京。
剣と鞘。

男と女。

剣に愛され剣に魅入られた剣客達の狂騒劇。

演者総死狂いのハードコアチャンバラ破戒武侠伝。

剣と情欲が織りなす妄執愛憎ボーイミーツガールの幕が開く。

日本刀が再興した治安が世紀末な現代世界で剣術馬鹿のカツ飛び男が斬りまくる話。

ジャンルはコメディ、バトル、猟奇、ロマンス、ピカレスク、エログロのごった煮。

常識を投げ捨てながらファンタジー無しのガチバトルを書いたらこうなった。

※人を斬るのは犯罪です！

絶対に真似してはいけません！

目次

PART 1	ソードマンズ・サンクチュアリ	1
PART 2		6
PART 3		12
PART 4		18
PART 5		23
PART 6	フェイトフル・エンカウンター	27
PART 7		35
PART 8		43
PART 9		55
PART 10	インヴィジブル・ソード	63
PART 11		70
PART 12		79
PART 13	デディケイト・トウ・ユー	87
PART 14		95
PART 15		103
PART 16	ブラッディ・レイン	110
PART 17		118
PART 18		125
PART 19	クリミナル・ウイズ・クリアマインド	130
PART 20		141
PART 21	デイ・バイ・デイ	150
PART 22	フィーリング・フォー・ザ・ファースト・タイム	156
PART 23		165

P
A
R
T

2
3

172

PART 1 ソードマンズ・サンクチュアリ

東京。

丑三つ。

虫の声。

街頭がポツリと照らす辻。

住宅街の片隅で二人の男が出会った。

「やあこんばんは。良い夜だね」

「……ああ」

互いに暗く嗤う。

男達は初対面で恋をしていた。

年嵩の男は黒袴の上にロングコート。

若い方はTシャツとデニムに赤染めの派手な羽織。

「武蔵一刀流兵法、さかしま ゆきね逆島雪音」

赤い羽織、背の高い方が中性的な声で平坦に名乗る。

左の腰に差した刀は刃渡り三尺。

平均より長く、反りは深い。

無駄な装飾を一切省いた無骨な薩摩拵。さつまこしらえ

鮫皮の替わりに厚手の牛革を用いる物、目貫を使用しない物が多

い。

柄が柄頭に向かって太くなっている。

剣はまだ抜かれない。

鞘に左手を添えて右手の指は鏢に掛ける居合の構え。

腰を落とし、つるりとした女っぽい顔に涼し気な微笑みを浮かべ

る。

青年は真剣勝負の野試合で流派を明かす不利を敢えて冒した。

蛮勇か。

自信の顕あらわれか。

「ふ、豪気だな。長尾鉄山、推して参る」

酔狂をにたりと嗤う男は問いに応えず名を告げる。

相対する男はコートの内で既に抜いていた剣を構えに転じる。

得物は標準的で二尺八寸。

構えは上段。

別名火の構え。

一見する通り体重を乗せ易く、如何にも破壊力に長ける。

幕末に猛威を振るった薩摩示現流が得意とした蜻蛉の構えに類似し、上段から叩き付ける一撃は強力無比。

全体重を使い受け太刀ごと押し斬る剛剣。

殺意を持った数十キロの肉塊が剣の速度で直上から降って来るのだ。

受けてはならない。

理^{りあい}合は明快。

受ければ死ぬ。

歳は五十は下らず背も低い、爪先を浮かせ拇指球にて行う運足や腰の立ち方からして、相当に鍛えられた使い手だ。

今宵は楽しめそうだ。

確信を懐き、草履とスニーカーがアスファルトを同時に蹴る。

円熟した手練れの長尾鉄山は既に相手の間合いを読み終わった。

その若さ故か、非凡ながら浅慮が勝る。

今更居合の構えで剣を隠そうとも遅い。

青年の腰で無警戒に晒されていた刀は鞘の長さからして約三尺。

体格を加味してほぼ完全な精度で把握する。

刀身の三尺と腕の長さ、足腰の駆動を見て当たりを付ける。

間合いを掴めぬ未熟な剣士は死ぬしかない。

今の世の剣士に於いて弱さは罪であり、強さこそが正義なのだ。

脳が灼けるような真剣勝負で勝利を重ねて来た。

得物と腕の長さで不利は有るが、取り回しと経験値は鉄山に大きな分が有る。

居合を誘い出して紙一重で躲し、叩き斬る。

鉄山の作戦はこれに尽きる。

左右に揺さぶりをかけ、静かに間合いを詰めた。

一足一刀の間より更に半歩空けて止まる。

此処より先は危険だ。

緊張と初夏の湿度が張り付く。

均衡を破ったのは青年の妙な歩法だった。

ゆらゆらと揺蕩い、不規則に動く。

歩幅・速度・拍子を自在に操り幻惑して間合いを狂わせる独特な運

足に鉄山は一瞬だけ戸惑った。

武蔵一刀流兵法の秘伝に指定される高等歩法、よがすみ夜霞。

羽織の裾が程良く運足を隠す丈にされているのも嫌らしさが見える。

不規則に揺動する間合いと居合の組み合わせは凶悪だ。

しかし、長尾鉄山もさるもの。

初めて見る歩法に経験と直感で対応し、どうにか間合いを外して居合を誘う。

逸った方が負ける。

それを熟知した鉄山は堅実に付かず離れずを保った。

地味だが巧い。

否、巧い故に手札が見えないので地味になるのだ。

「へえ、やるじゃんー！」

青年はにたりと嗤う。

夜霞を見切る上澄み。

極上の獲物に鼓動が高鳴り唾液が溜まる。

「じゃあ……これはどうかな」

そして恐るべき《魔剣》が真夜中を奔った。

前のめりに倒れたのは長尾鉄山。

奇々怪々。

なぜ。

「……馬鹿な……」

どうして間合いの外から。

遠間で居合を腹に浴びた怪異を解明する猶予は無かった。

「今のは……」

「礼代わりの冥土の土産だ。楽しかったよ」

雪音は油断せず残心を取る。

楽しませてくれて有難う。

胸骨を叩き割り臓腑を引き裂いた手応え。

致命傷だ。

長尾鉄山が血の溟海に沈む。

「そうか、お前が……………見事」

合点が行ったように一言だけ称え、長尾鉄山は息を引き取った。

「ちやお〜」

今夜もまた生き延びた雪音は血振りでべっとり残る血脂を飛ばす。

懐紙で拭いっつ街灯の光で一応見るが刀身に歪み無し。

毀れも無し。

納刀も滑らか。

「調子良いし、もう一人ぐらい探すかな」

同格の剣客と立ち合えた雪音は天真爛漫な笑顔で、顔に付いた返り血を羽織の袖に吸わせる。

赤地に椿や梅の花の刺繍が入った派手な生地は血の赤も誤魔化し易い。

夜な夜な街へ繰り出し、腕に覚えがある者に目星を付けては粉をかけるのだ。

遠目には長身の女にも見える奇抜な装いに騙された者は早々に冥土へ渡る。

暴れ過ぎて警戒されたのか最近強敵に恵まれる事は少ないが、雪音は立ち塞がる全てを斬った。

老若男女を等しく斬った。

唯一の肉親だった実父ですら斬った。

剣を極める為なら死すら厭わない兇暴なる剣客。

それが、逆島雪音だった。

時は世紀末、世界恐慌と過激なポピュリズム、薬物汚染が吹き荒び激動の時代に治安は乱れていた。

比較的穏当にして平和な日本ですら犯罪件数は鰻登りに天を衝いた。

都内の住宅地ですら銃撃戦が起きたのを重く見た日本政府は銃器の摘発に力を注ぎ、その代償に銃器以外―特に刀剣類―による犯罪が増加する。

剣術が護身用として爆発的人気を博してから約四半世紀。

警察力を全力で行使して銃器犯罪は東京から駆逐したが、代わりにそれ以外で最も強力がかつ日本人に親しい武装『刀』が再び台頭していった。

斯くして混沌の坩堝は開かれた。

真剣勝負の野試合に辻斬り、果ては妨げとなる官憲の殺しすら横行する。

東京は平易に生きられぬ多数の剣客を擁し世界有数の血霧煙る魔都と化した。

そんな修羅道で並み居る人斬りを討ち深淵まで至った剣士が居た。

人呼んで剣兇^{けんきょう}。

無邪気な抜き身のそれと遭ってしまったら命は無いと云う。

PART 2

今夜も小粒な相手を飽きるまであしらい現住居であるタワーマンシヨンへ帰宅。

手洗いを済ませたら愛刀を持ってリビングへ。

この時間だといつもは寝ている家主がベッドに居ないという事は今日はまだ起きているようだ。

「おかえり」

「ただいま、姉さん。まだ起きてたんだ」

雪音が姉さんと呼んだ女性は、張りも有りつつ熟れた肢体にガウンを着て、ソファでノートパソコンをタイプしている。

彼女は^{かけい}寛^{よし}夜^{しか}鹿。

夜鹿は大学卒業まで隣に住んでいた、雪音の年上の幼馴染である。ウルフカットにしたクールな美人で、スタイルも良い。

そしてキャリア組警官。

普段はコンタクトにしている彼女が如何にもオフ用なノンフレームの眼鏡をしているのが新鮮で良い。

「今日中に終わらせないといけない仕事があって、それがやっと終わったところ。お腹空いてるなら何か作ろうか？ 何が良い？」

「姉さんの手料理なら全部好きだよ」

「つまり何でも良いのね。同じ事を未来のお嫁さんに言ったら泣いちやうわよ？」

「俺が他所で女囲うと思う？ 姉さんだけだよ」

気のおけない姉弟のように接し合い、実際血縁もある雪音が定職に就けないので彼女が養っている。

それも雪音の性格を知った上での事。

「今日は何人？」

何人斬った？

そういう意味の問い。

彼女は雪音が刀剣を扱う術に長け、これまでに何十人、下手をすれば三桁の命を散らしていると知っている。

「三。多分みんな悪党だよ。向こうが先に抜いた」

毎日毎日発見される斬殺死体の中で捜査情報を見聞きした限り、雪音と思われる刀傷を残す大量殺人者は一般人を無差別に斬りはしていない。

前科持ちの重犯罪者や剣に魅入られた人斬りを殺しているだけ。

だからまだ最悪ではない、そう自分を納得させている。

この際、雪音が二十回は死刑を科せられる殺人罪を犯している事は目を瞑る。

剣士殺しの剣士の名は警察関係者の中で日に日に知られ、今日に至っては魔剣士、剣鬼、剣兇けんきょうという二つ名を冠する。

雪音は殺人に何の忌避感も無い。

その事実には溜息を堪えた。

「……………そう」

夜鹿は眉間を揉む。

職務への誇りに掛けて、内部情報を教えたりはしていない。

しかし、殺人犯と同棲なんて前代未聞の醜聞だ。

だが此処で雪音を突き放せばどこまで修羅に堕ちていくか想像すると空恐ろしくなる。

手綱を離したが最後、本当の意味で制御不可能な邪悪が生まれてしまうのだ。

夜鹿はパソコンを閉じて立ち上がった。

家系の遺伝か背は高い。

高身長たかみながの雪音と並んでも頭半分しか差がない。

「物騒な世の中だね。姉さんも美人だからそんな際どい格好してたら襲われるよ?」

「その時は雪音が助けてくれるでしょ?」

職場で鉄の女と揶揄されるクールな仮面を外し、愛想と色気を良く混ぜ合わせた流し目で聞き返した。

愛嬌と称するには過剰に妖艶な魅力が高密度で押し寄せ、肝の据わった雪音すら心が揺れる。

意識してやっているなら憎いほど素敵な女だ。

「勿論。でももしかしたら……」

キツチンで冷蔵庫の残りを温め直している夜鹿を後ろから抱き締め、胸へ、腹へ、臍へ指を這わせる。

「俺が先に襲っちゃうかも」

「もう、邪魔しないの」

夜鹿のうなじの匂いを嗅ぐと安心を感じるのには不思議だ。

音を立てて嗅ぎ、もっと全身を絡ませ腰を夜鹿の尻に強く擦り付ける。

「あっ♡……………ばか」

不意打ち気味な愛撫に湿った吐息で喘がされた口を抑え、事実を誤魔化すように怒って見せる。

懲りない雪音は赤らむ首筋に顔を埋めて啄むように優しくキスを降らせた。

本気になってしまわない程度の軽さで降り注ぐそれに負けじと夜鹿が迎え撃つ。

この家では良くある円満な一幕。

雪音と夜鹿は現在愛人関係にあった。

事の始まりは半年前に遡る。

夜鹿の笥家と雪音の逆島家は本家と分家の関係であり、嫁入り婿入りが当たり前で先々代辺りまでは血縁も濃かった。

母親がおらず歳が近い雪音に何かと世話を焼いていた。

夜鹿も一人っ子であったので気丈で純粹で良く懐く少年を弟のように可愛がった。

しかし成長するほど剣術に没頭するようになった雪音について行けず、すれ違ったまま大学卒業と共に実家を離れ疎遠になっていた。

その雪音が父を真夜中の真剣勝負にて殺め、すぐさま姿を消した報告を聞いて職場で仰天した。

そして事件から数日後、深夜に帰宅した夜鹿を気配を殺して待ち伏せていた雪音が居た。

「こんばんは」

「っ!？」

すわ強盗か暴漢かと振り向き様に肘を顔に叩き込むが、雪音はそれを悠々と避けて抱き着いた。

「俺だよ夜鹿さん。久しぶり。最後に会った時よりもっと綺麗になつてて驚いたよ」

「あつ、えっ?。あなた……まさか雪音?」

雪音が記憶より研ぎ澄まされた顔立ちになっていて、すぐには判別出来なかった。

「あーあ、俺は姉さんのことすぐ判つたのに」

あどけない表情で、夜鹿の胸元でぼやく。

引越し先は両親から聞いた事が有った。

元から家族ぐるみの付き合いも有り、雪音の外面が良いのですぐに教えてくれたのだ。

対して、夜鹿の動揺も当然。

無名と言えど流派の師範を正面から斬り殺した使い手が、得物を佩いて目の前にいるのだから。

警官として努めて冷静に動揺を鎮め、状況を確かめようとする。

手に負えないまでに狂っているなら、それなりの対応も已む無し。

だがまずは家族として事情が知りたかった。

「上がって。寒かったでしょう?。何か淹れるわ。話はそれからしましょう」

真冬の夜中に薄着で待っていて手も白く冷え切っていた雪音を招き入れた。

「ねえ雪音……どうしておじさまを?」

「親父は剣が好きだった。好きなものに命をかけるのは当たり前前だよ」

実父の命を奪ったばかりと言うのに剣呑とは真逆の安らいだ眼差しで口を開いた。

「親父も俺も本気だった。普通に考えりゃ俺を鍛えた男を相手にして手を抜く余裕が有る訳無いし、俺が全力であったように、親父が全力

をぶつけてくれた事を誇りに思ってる」

命を落としてでも剣術を崇拜する狂気の沙汰を記憶を辿るように淡々と言う姿に衝撃を受けた。

「そう……なのね……」

もう理屈もへったくれもない。

価値観が根底から違う。

雪音は母親は産後に病没し、厳格な父親と暮らした。

確かに父は雪音を愛していた。

しかしその愛は狂っていた。

愛した妻を失い、残ったのは雪音と剣の道。

より強く、より高く。

命の価値などちり紙一枚にも値しない。

剣の為に生きて死ぬ。

それしか世界を教えられずに大人になった可哀想な子なのだ。

そして生き残り、最愛の父親すら失った雪音は捕まるリスクも承知で最後の砦を求めてここに来た。

「ごめんなさい。私酷い事言わせたわ」

「全然。気にしてないよ?」

スーツの胸元に頬擦りして無邪気にコロコロと笑う青年は不思議にも逞しくも可愛く思える。

昔のままの笑顔を向けられる資格があるだろうか。

就職を建前にして自分は逃げたのだ。

修羅道に染まりゆく雪音を置いて。

それをもう一度裏切り、囚人として刑を受けさせる?

出来ない。

出来よう筈が無い。

夜鹿の母性はそれを拒んだ。

それではこの子は永遠に救われない。

夜鹿は共に地獄に堕ちると決めた。

軽い食事や入浴を済ませ、一台のみのセミダブルのベッドに二人で横になった。

脚が触れ合う距離で向かい合う。

「温かいね」

「そうね……！」

添い寝などいつぶりか。

過酷な英才教育で満身創痍の雪音を看病しながらの時が最後で数年は経っている。

一張羅が洗濯中なので裸で寝たが、スラリとした猫科の大型肉食獣のように引き締まった肉体で密着された時には、夜鹿は気が気でなかった。

一人の男として意識してしまっている。

あどけない表情とは裏腹に主張する男の固い体に、夜鹿の女の部分に久しぶりに熱が灯った。

それを理性で誤魔化する。

「明日は服も買いに行かなきゃ。これからここで暮らすんだもの」

「俺、居て良いの？」

「ずっとね。家族でしよう？」

愛とは呪いだ。

「やっぱり姉さんが好き。来てよかった」

純粹さは何年経っても色褪せない。

言葉足らずに夜鹿の胸に飛び付いて目を閉じる弟分の頭を撫でて寝かし付けたのだった。

初日は理性が勝ったが、互いに憎からず想い合う男女が一線を越えるまでに時間は掛からなかった。

立ち合い直後の興奮状態で帰宅した雪音をリードしながら受け入れてみたら、呆れるほど下手糞な初セックスだったが、それはそれで雰囲気が出て良かったと後に回顧する。

PART 3

遅くまで夜更かししても雪音の朝は早い。

古くからの早朝稽古の習慣が染み付いて勝手に目が覚め出してしまう。隣で寝ていた夜鹿はもつと早くに起きていた。

鼻を使って探すと朝食の匂いがした。

乱雑に脱ぎ捨てていた甚平が綺麗に畳まれていたので着る。

サイドテーブルに立て掛けた剣を肩に乗せて隣接するリビングに行くのと、ナチュラルメイクの夜鹿が食後のコーヒーを飲んでいた。

今日は非番なので緩めの部屋着のままだ。

「おはよう姉さん」

「おはよう。目玉焼きは何個食べる？」

「六個でお願い」

顔を洗っている間に卵がフライパンで爆ぜる。

雪音はよく食べる。

米も汁物もおかずもみるみる消えていく。

トツプアスリート並みの筋肉量を維持する栄養を体が勝手に求めて朝から米二合は軽い。

「いつも美味しそうに食べてくれるんだから、女冥利に尽きるわね」

「姉さんの料理は本当に美味しいから」

「いつの間にか口まで達者になったのね」

雪音は昔から嘘が言えない。

再会から三年が経った今も変わらず、思った事を言わずに隠す事はあれど話す言葉には一欠片の嘘も混ぜた事は無かった。

冗談や巫山戯ふざけも分かりやすい。

頬に米粒を付けた少々間拔けな顔も愛らしくて寝癖の付いた頭を撫でる。

何でも食べると意中の相手に言われているのに食事を作ってやるのが嫌いな人間などいるものか。

「ご馳走様」

「お皿は流しに置いてくれればいいわ。昼に纏めて片すから」

ソファで眼鏡のレンズ越しにニュースを覗いている夜鹿は普段より尚もメイクが薄く、ショートパンツとTシャツだけ。

鉄仮面の女が歳下の男にこんなにも自身を曝け出していると知ったら同僚は腰を抜かすだろう。

「今日はどこか行く予定ある?」

「二度寝した後、屋上で稽古するだけ。夜の散歩はしばらく良いや」

「ならこつちに来て隣に座りなさい」

「ええ? 横になって寝たいって……」

「良いからいらつしやい」

スポーツニュースが終わり、占いコーナーが始まる。

気が向かないと渋々の承諾になるが、夜鹿からの頼み事は余程の事でない限りは断らない。

唇を尖らせて座った雪音の右手に指を絡め、俗に言う恋人繋ぎで抱き寄せた。

「眠りたいなら私に寄り掛かって寝ればいいわ」

「えつと……今日はそういうプレイがしたいの?」

マンネリを防ぐ過去の努力は認めよう。

明晰な頭脳が時に吐き出す突拍子も無い発想とユーモラスな性的嗜好には困惑することも多々あるが。

今日もその奇天烈な好奇心の一角とばかり思った。

「ち、ちがつ、違いますうっ!! ………………違わないけど」

からか 誂われた鉄の女は赤面して語尾を濁した。

赤らめた顔を背け、膨れつ面を作りながらも手だけは離さない。

「……何処かに行かないように捕まえとくの。具体的にはあと一時間くらい」

剣術家の大事な利き腕を掴まえて好き放題が許されるのは夜鹿だけの特権なのだ。

相手が子供でも、もし他人であれば敵意ありと見て問答無用で斬りそうな男に特別視されていると思えば、独占欲も満たされよう。

それを確かめたくて家ではいつも左側に座らせる。

「ええ……、ああ……、ふん……そういう感じね」

数秒思案し、ある答えに終着する。

決めた雪音は行動が早い。

左手の刀をローテーブルに置いた。

「じゃあ姉さんと繋がるのは手だけじゃなくても良いんだよね？」

悪戯小僧の笑みで右手を引き込んでソファに優しく押し倒す。

「あんっ……♡こんな……朝からなんてっ……」

逃れようと身をくねらすけどどう見ても姿勢だけの拒絶だ。

こんな緩い拘束は夜鹿が本気なら振り解ける。

休日とはいえ、朝から盛るのが憚はばられるだけか。

空いていた左手がするりと下着に滑り込む。

妙に水気を含む部分に指の腹で円を描くと腰が跳ねた。

鼻と鼻が触れ合う距離で嗜虐的な微笑みで体を重ね、耳元に囁く。

「嘘。体が期待してる。それともこれは昨日の残り？」

「やだ……言わないで……♡」

一瞬の読み違いが生死を分ける環境で培った洞察力を最大限発揮し、真面目振る夜鹿が本心で望んでいると推測した行為を選んだ。

何度も睦み合って悟ったが、夜鹿は外での厳格な人柄の反動なのか被虐嗜好の気がある。

故に、丁寧に、優しく、じつとり責めるのが効く。

羞恥心を剥がされたら後は脆い。

「俺がしたいんだ。それじゃ、駄目？」

雪音は悪役を演じた。

並の男なら言いづらい台詞を目を合わせて堂々と吐くが、欲情しているのは事実なのでその声色は真に迫る。

「……………おいで。でも、お手柔らかにお願いね」

不意に姉の顔に戻った夜鹿に頬を撫でられた雪音は目を見開き一瞬だけ硬直した。

出来レースであつても心から嬉しかったからだ。

雪音は夜鹿が好きだ。

美人で優しく、小遣いもくれる。

空気の読めなさでムードを壊してたまに叱られるのも含めて好き

だ。

なにより、自分の全てを受け入れてくれる。

正直、振るなら腰より剣の方が楽しいが、夜鹿の機嫌が良くなり雪音自身も気持ち良くなれる素敵な行為だ。

夜鹿に喜んで貰えるなら幾らでも抱く。

感謝を示すには過ぎたる程に、改めて下半身に血が集まった。

「ごめん、無理かも」

ショートパンツと下着を纏めて剥ぎ取り床に投げ捨てる。

露わになった部位はしつとりと湿っていて、雪音を難無く受け入れた。

大きくはなくとも形の良い胸を潰して正常位で絡み合う。

夜鹿も指と脚を雪音の背に巻き付けて一つになりたがっていた。

穏やかに揺らし転がして、そして緩やかに絶頂へと至らしめる。

無理とは言いつつも散々に抱いた昨日の今日であるので激しくならぬよう細心の注意を以て。

乱れ狂う様を観るのも良いが、昨夜の激しさを繰り返して疲労で貴重な休日を潰してしまうのは忍びない。

時折腰を停めて愛撫だけの時間を設け、所望した時間にも色を付けて体力の消耗を抑えた。

その甲斐も有ってか意識はしつかりと残っていた。

締め括りに、額と唇にキスを落とす。

「ありがとう。気持ち良かったよ」

「んむっ♡!？」

性欲が再燃しないように程々に舌を絡めた唇へのキスは、ぬるま湯の如き快樂に蕩けた眼差しを震わせる。

「ぶはっ…………… 私の口、今あなたのを飲んだのに……………」

「ん、まあ……………少し苦いね。だけど姉さんの口だから平気だよ?」

夜鹿とて、行為の最中自身が漏らした愛液や尿に塗れた逸物を躊躇わず口にする。

それで揺らぐような想いでは愛とはとても言えないというのが雪音らの秘めたる持論だ。

「姉さんはまだしたい?」

「今はもういいわ。ご馳走様でした」

「お粗末様です」

顎に垂れた白濁の体液を掬い、艶やかな舌遣いで指から舐め取る。
狙ってやっていけないにしても淫靡が過ぎる。

股間に悪い。

「力入らないでしょ? 目も冴えてきたし、俺が洗ってあげる」

「きゃっ!?!」

もう一度覆い被さりたい衝動に駆られるもぐつと堪え、お姫様抱っこで持ち上げた。

「嫌だった?」

「びつくりしただけよ。ねえ、私重くない?」

「軽過ぎて片手でも持てるよ」

全体的に肉付きが薄く、身長割に軽いので鍛えられた雪音には容易い。

ドアを開ける瞬間などは実際片腕で維持出来ていた。

家族用マンションなのでそこそこ広い浴室は二人でも余裕で入れる。

最初から全裸なのでそのまま椅子に座らせるとシャワーの温度を調整し、ボディソープをネットて泡立てる。

これは飽くまでも、動物同士が親愛を表す毛づくろいの延長。^{グルーミング}

よつていやらしさの欠片も無い真剣な手つきで、目の細かい泡で背中や足をせっせと擦って磨く。

それは体の前側を洗う際も同じく、使用後の刀身に歪みが無いか調べるような真面目な眼差しであった。

掌に並ぶ剣ダコの刺激が良いアクセントになって心地良い。

「痒いところはごいませんか?」

「プツ……」

美容師の真似事に夜鹿が一瞬吹き出す。

口を抑えて俯いた事で、正面で跪く雪音の全身に目が行った。

かなり筋肉質ながらも女顔の雪音に不釣り合いにならず、絶妙なバ

ランスを保つ体は不思議な魅力があった。

当てられた夜鹿は生唾を飲む。

「ね、ねえ雪音……」

「駄目だよ姉さん。そっちの続きは夜までお預け。お楽しみは最後まで残しておかないきゃ」

器量良しの夜鹿に潤んだ瞳で誘われて断れる男がどれだけ居るだろうか。

しかし生憎と雪音の精神力の頑強さは並の男の比ではない。

夜鹿が少しだけアンコールを期待して上から下へ視線を泳がせ、胸板を触ろうと伸ばした手を雪音が抑えた。

誘いに乗りたいのは山々なのだが日課の稽古の時間が無くなってしまふのは避けたかった。

今日は昼にずらしたが、普段は朝食を摂るとマンションの屋上や河川敷で稽古に励む。

強敵との死合を反芻して楽しみつつ、感心した技を鍛錬の資とする時間だ。

幾夜もの鉄火場にて砥がれた腕に敵う者はそうそう居ない。

近辺の好戦的な猛者は大半斬ってしまった。

それでも雪音は鍛錬を重ねる。

何故かと問われたら、ここに剣が有り自分が居たからと、伝説の登

山家ジョージ・マロリーのように言うだろう。

剣という概念を崇拜し、愛しているのだ。

PART 4

暗闇に点々と灯る街灯の下を剣を佩いた雪音は彷徨っていた。

現代日本は日中すら包みに入れておくだけで街中でも刀を持ち歩ける。

廃刀令何するものぞと時代錯誤も甚だしい。

先日も狂を発した暴漢が段平を担いで交番に押し入った末に増援部隊に蜂の巣にされたニユースを見た。

防弾車両と自動小銃が必須の欧米諸国よりは遥かに安全ながら、余程血腥い。

斬って良し、斬られて良しの愉快痛快な時代に生まれたとほくそ笑まずには居られない。

いつもの赤い羽織の長い裾を鞘に被せ、強敵探しに邁進するものの結果は芳しく無い。

この近辺では雪音の悪評が立ちすぎたのか避けられてしまう。

目撃者は居ずともさもありません。

名の知られた剣士を片端から血祭りに上げる凶人が出没する地域に居たいとは、正気ならまず思うまい。

気が触れた一部の者共か自信家だけが居残り、雪音と立ち合いの末に死んでいく。

手付かずの未熟者を斬っても面白味に欠ける。

素人ばかり襲い実力を勘違いした塵芥とやり合うのも御免だ。

雪音は剣狂いであって殺人狂ではないのだ。

「はあ……」

朗らかな雪音らしからぬ溜息。

人口減少によって生じた、闇市と称される廃棄区画の廃ビル群の中を歩いて、それらしい者は間合いから逃げてしまう。

官憲すら迂闊な手出しを躊躇う破落戸の根城だというのに情けない。

違法増築を繰り返し迷宮にも等しい闇市は盗品から薬物、特に深い所では人間も売られている非合法百貨店だ。

ところが、目ぼしい腕利きは闇市でそれぞれ用心棒として備われている事も多く、女顔の剣士は関わるなという悪名も相俟ってなかなか挑発に乗って来ない。

それも当然。

立ち合った腕利きの剣士が何人も還らず雪音はけろりと翌日も現れる。

そんな事態が何度も起きれば警戒もされよう。

剣兇は女顔で、背が高く、居合の使い手。

この辺りを縄張りとする裏社会の剣士で雪音と剣兇が結び付かないなら、それはモグリだ。

退屈の余り斯くなる上は表の道場でも破りに……という自棄糞気味な案を頭に浮かべる。

相手の必死さが薄い寸止めの試合など趣味ではないが、こうなつてはやむを得まいか。

「……いや、無いな」

煮え滾る欲望に焼かれた脳に残った理性が、馬鹿げた真似は避けろと云う。

第一に夜鹿を困らせたくない。

七月も中旬に入り蒸し暑くなつた中、夜鹿から貰つた小遣いで適当に買い食いしながらぶらつく。

坊主で帰るのも癪で、いよいよ質に拘らず誰かしらを捕まえてみようかと入った人気が少ない路地で二人の男が居た。

姿勢からして三流の二人は昼間から酒盛りをしながら何かを話している。

雪音は身を隠したまま聞き耳を立てた。

「あの麒麟児の藤間が出るんだろ？ やめとけて、俺等じゃ勝てっこねえ」

「でもよう、なんかの間違いでも優勝したらガツポリだぜ？」

「俺は藤間に財布ごと賭けるね」

なんでも闇市最強を決めるトーナメント戦を行い、優勝者にはかなりの賞金が出ると。

スポンサーは犯罪シンジケートの首領らしいがそれはどうでも良い。

組織からしたら、用心棒を雇うにあたり誰がどれだけ腕が立つのかわかり易い指標が欲しかったのだろう。

雪音が耳を大きくしたのは前二つの部分だ。

先日誕生日を迎えて二十三歳になり、男として小遣いを貰うばかりでは情け無くもあつた。

賞金の多寡はさておき、これは恩返しが出来そうだと期待してしまふ。

そしてなにより強い剣士が集まるのだ。

これに行かない手はない。

詳しい場所や日時も知りたい。

「やあ、こんにちは」

「げっ、剣兇!」

隠れていた角から身を出してにこやかに話し掛けたが逆に警戒された。

静かに素早く歩きながら柄に掛けた手から、微笑みの裏に片方を斬り倒してでも聞き出す意図が透けていた。

「じよ、冗談じゃねえぞ! 勘弁してくれ!」

「どこへ行くんだ?」

腐つても剣客の端くれか危険を感じて逃げようとした片割れの頭を鞘で横薙ぎに思い切り殴り付ける。

「ギツ!」

鉄と木の塊に殴られた男は白目を?いて倒れた。

倒れ様、派手に頭を打ったが見向きもしない。

見ず知らずの男が一人死のうが雪音の知った事ではないのだから。

「うわああつ!」

「挨拶されてるのに逃げるなんて失礼だよ? おい、何とか言えよ」

「ぎゃあ!」

返す刀で座り込んだ方の男の左肩をへし折る。

腑抜けた姿に呆れ、斬る価値も感じなかった。

斯様な雑魚の命を愛刀 凧丸こがらしに食わせるなどと想像するだけで虫酸が走る。

「ひ……ひい……」

「俺はただ、きっきの話の続きが知りたいんだ。素直に質問に答えてくれたら何もしない」

「話って、トーナメントの事か……?」

啜り泣く男を間合いに捉えたまま、穏やかに微笑む。

今しがた肩を砕かれた身にしてみれば理解不能な怪物の威嚇にか見えなかるうが、雪音の胸中は凧いでいる。

母親が早逝し父親に男手一つで育てられた雪音は共感能力が著しく未熟だった。

精神面そのものが幼稚と言っても良いだろう。

夜鹿が危惧した、異様な暴力のハードルの低さもその一部。

剣術への礼賛と夜鹿への情が何とか人の形に留めているようなもの。

沈黙を貫いても下手に喚いても殺されると観念したのか、男は唇を震わせながらも口を開いた。

お陰で会場やルールも把握出来たので嬉しくなった雪音は男を放置して帰っていった。

故意の殺害こそ禁じられるそうだが武器は双方の合意で決め、飛び入り参加も大歓迎なのが特に気に入り、顔にこそ出さなかったがマンションまでかなりの早足で帰る程だった。

まだ夜になったばかりで、いつもよりずっと早い帰りに夜鹿はやや驚いた。

二十時前。

帰宅直後で、着替えて夕食の用意も始めたばかり。

「おかえり。今日はやけにご機嫌ね。良い事でも有った?」
「ただいま。へへ、分かる?」

生まれた頃から見ていて、ここしばらくは寝食も共にしている夜鹿は微かな変化を察した。

シャツにもジーンズにも返り血を浴びてない雪音がここまで上機

嫌なのは珍しかった。

頭为天辺から靴まで血に染まった姿に満面の笑みを貼り付けて帰宅した日など、上げかけた悲鳴を殺すのにどれだけ苦心したか。

強く叱責してしまったがしかし、悄然とした雪音が抱き着いて上目遣いで謝罪の言葉を一生懸命並べるのだからもう可愛らしくて堪らない。

夜鹿は見てくれは立派な雪音の内面のちぐはぐな純粹さに弱かった。

「まだ秘密だよ。ふふ、ビックリさせるから待っててね」

「それは楽しみね。手は洗った？」

「洗ったよ」

「ご飯の支度が出るまで少しあるわ。先にお風呂に入る？」

「一緒に入らない？ 今日姉さんと一緒が良いな」

後ろから寄り添い囁く。

「おほおっ!？」

仄かに香る汗の匂いと甘え声に夜鹿は奇声を漏らし、心臓を押さえて悶えた。

これは雪音がかなり上機嫌な時限定で現れる超サービスモードの兆しだ。

かつての濃厚さを思い出すと体の奥が一気に熱を帯びる。

「そそそそうねっ！ 後で一緒に入りましょうっ！」

溜まった生唾を飲み下し急ぎ表情を取り繕っても今夜の営みを妄想して鼻の下が伸びている。

笈夜鹿は結構なムツツリ助平だ。

親戚の歳下の男に体を洗わせ、そのまま浴室で睦み事を始める甘美な背徳は夜鹿の好物だった。

広めの物件に住んでいて良かったと心から思う。

「ご馳走様。片付けは俺がするよ」

「そんなの置いとけば良いわ。さあ行くわよー！」

大急ぎで拵えたオムライスを二人で食べ、洗い物もそこそこに雪音の腕を引っ掴むと浴室に突入するのだった。

PART 5

一頻り行為を終えた二人は並んで横になり、汗と体液の残滓に濡れたまま他愛も無い話に興じていた。

誰も雪音を知らない場所へ旅行したい、変装してこっそり映画を観に行きたい、などという願望から明日の献立までひそひそと言葉を交わす。

ダブルサイズベッドの中心で夜鹿と寄り添うこの時間が雪音は好きだ。

獣のように激しく腰を打ち付け絡み合うのも悪くないが、こうして隣に無防備な姿で居てくれると安心する。

この人は自分と云う剣にとつての鞘なのだと思えるのだ。

その一方、夜鹿もこの時間を大事にしている。

雪音が何を考えて何を望むのかを良く聞き出し、彼の心を繋ぎ留めるのに大いに役立つ。

その倫理は丸つきり異常だが聞き分けは良く、むしろ世の男の大半より真面目で誠実だ。

しかも身体の相性も抜群に良いと来たら可愛がるのも道理。

体毛が薄くてつるりとしながら意外に厚い胸板から鼠径部まで指でなぞる。

際どい所を爪で行ったり来たりして焦らす。

気絶寸前までギツタギタのバツコバコにされた仕返しだ。

なすがままにされながら無言で擦ったがる雪音の仕草が妙に愛らしくてくすくす笑った。

「どうしてこんなに大きくしてるの？ さっき三回もしたのに。ねえ、どうして？」

「……姉さんが焚き付けるからだよ。そんな触り方されたら俺が我慢出来ないって知ってるよね」

腹筋の駆動で身を起こした雪音は悪戯をやめない両手を掴んで押し倒した。

両手を上げさせ、降参する犬の体勢を強いる。

頬に朱が差した夜鹿の股に、左右に振れる尻尾の幻影が見えた。組み敷かれて欲情スイッチが入ったらしい。

「やあんっ♡けだものっ♡悪いワンちゃんに犯されちゃうっ♡」
「……………」

「ちよつと、何か言ってくれないと私が馬鹿みたいじゃない……」

馬鹿でしょ。

と喉元まで出かけたが我慢する。

「わんわんー」

尖らせた唇を口で塞いで誤魔化した。

誤魔化した。

大人のお姉さんなので誤魔化されてくれた。

こうなったら馬鹿になってこのノリに着いていこうと覚悟を決める。

溶け合うような濃さのキスが延長戦のゴングだ。

首筋を舐めて興奮を高め、白けそうになった雰囲気修復する。

全身を額から足まで舐めると薄っすら塩気があり、蠱惑的なフェロモンが嗅覚から雪音を誘惑するが、まだ挿れない。

手入れされた陰毛が何度も鼻に当たる。

「がうがう」

「やだっ♡そんなトコ舐めたら♡♡汗かいてるからっ♡んもうっ、早くしてっ♡」

淫靡に内腿を擦り合わせていた夜鹿は更に自ら股を割って誘うがまだ焦らず。

焦らせば焦らすだけ後で反応が良くなる。

ねっとり潤んだ割れ目に忍ばせた二本指で浅い所を掻き回し、媚びるような強い締め付けを騙して弄んだ。

剣ダコで固くなった指先の齎す刺激で内腿がひくひくと痙攣し、腰が勝手に持ち上がる。

愛液が手首まで垂れる程ぐっしよりと濡れていた。

「んっ♡これ違う♡欲しいのと違うっ♡そこばかり責めるのだめっ♡」

「犬に言葉は通じないんだよ姉さん。もつと体も使って誘わなきゃ挿れてあげないよ。」

指を抜けば薄暗い寝室で白濁した粘液の虹がテラテラと光る。

雪音は基本は避妊具を使うのでこれは夜鹿が自分で分泌した分だけだが、かなり粘つくく本気で感じている証拠だろう。

「もう♡硬くて太いので一番奥つ……とんとんしてっ♡指じゃ届かないところぐりぐりしてっ♡」

間拔けな迎え腰まで使って股を押し付けて挿入を目論むが、雪音はそれをするりと躲す。

「うう〜いじわるう♡」

「今自分で挿れようとした？ したよね？ 堪え性なさすぎてガツカリだなあ。今日の姉さん自分勝手過ぎるしもうやめちやおつかなく？」

濡れた指先で臍の下を叩けば、解れた子宮はその振動だけで軽く絶頂しかけてしまう。

「ご、ごめんなさいっ♡あやまるかりややめないで♡ゆきねがだいしゆきでもう我慢出来なかったの♡お願いだから挿れてくださーい♡♡」

舌足らずな懇願にキスで応えると潤んだ瞳がうっとり蕩けて悦びを露わにする。

そんな夜鹿が愛しくて、大切に、いつその事壊してしまいたくなる。しかし唯一の家族に間違ってもそんな事はしない。

代わりに快感を与えて代弁する。

「俺も姉さんが大好きだよ」

片手で手早く避妊具を装着して割れ目に先端を宛てがい、一気に突き入れた。

沢山のキスも継続し頭を撫でる。

「んんっ♡いきなり深いイっ♡♡」

「これが欲しかったんでしょ？ ちゃんとおねだり出来て良い子だね」

「あゝっ♡まつでえゝ♡こんな……おがじくなゝるっ♡おゝっ♡

!?!」

「おかしくなっていていいよ。俺が一生面倒見てあげるから」

「死んじゃうっ♡これ」死んじゃうっ♡♡」

矢継ぎ早に降り注ぐ、優しさに満ちた雪音の本心が夜鹿をより昂ぶらせる。

熟しきつて火照る肉体を捉え、背中や後頭部に手を添える。

それらを支えに、密着しつつも夜鹿には無理な体重の掛け方をしないで快樂に専念させていた。

他人には極端に冷酷で暴力的な雪音だが、少ない家族にだけは憂鬱な負い目すら大きな胸の内に抱き留める底なしの優しさを見せる。

好色な夜鹿としてそれに気付かない阿呆ではない。

激しくも優しい優越感と充足感が心を満たしてくれる。

大学時代に付き合っていた相手とは比較するのも烏滸がましいままで深く受け止めてくれる。

壊れた狂人であると忘れるほど溺愛もしよう。

女としての部分が胤を貰おうと脚で腰を挟んで離さず、この男は自分のものだと言示した。

迸る飛沫でシーツに染みが増える。

男女の仲に堕ちてからシーツを替えなかつた日は無い。

人と獣が愛を紡ぐ協奏は夜更けまで続いた。

PART 6 フェイトフル・エンカウンター

七月中頃。

宵ノ口。

違法にして無許可の増築で積み上げた外道共の牙城。

蟻の巣より複雑な狭い通路を雪音はひたひたと歩いた。

今日は闇市トーナメントの開催日だ。

雪音は普段のズボンではなく袴を履いた和装で本気の装いで、場違いなスニーカーが浮いていた。

全力を出せるのが楽しみでいつも以上に打ち込んだ稽古の成果か肉体の仕上がりは最高潮に達している。

達人たる雪音と云えど生きて還れる保証はない。

しかし緊張はしていない。

普段通りに二人で夕食を摂り、

「今夜は遅くなるよ」

とだけ微笑みと共に告げて家を出た。

負けるとは微塵も思わない。

始める前から負ける気になる戯けはその時点で負けている。

雪音はただ、もつと剣を振るいたかった。

疼く指で愛するこがらし丸を撫でつけ、薬物中毒者が転がる階段を降りていく。

薄暗い通路から、明るく開けた場所に出た。

汚らしいビル群の最下層。

元は大型の地下売り場だったのか、ワンフロアを丸々使った大部屋だ。

どこから電気を引いたやら潤沢な照明がコンクリートを打ちつばなしの床を隅々まで照らしている。

血に飢えた剣豪から賞金目当ての小物まで居るわ居るわ、その数は数十人は下らず百にも届こうか。

大半は有象無象のようだが、実際はやってみなければ分かるまい。中央に二十メートル四方の縄張りを囲む四台のカメラが天井に有

り、脇に特大のモニターが設えられる。

「見ろ……本当に来やがった……」

「あんな優男がそうなのか？」

周囲の者共がこそこそと話す。

雪音の存在は都市伝説にも等しい。

誰もが知りながら、その実体を見た試しがない。

雪音に抜かせたら死あるのみが故に。

モニターに電源が入る。

映像に現れたのは上等なスーツに身を包んで革張りの椅子に深く掛けた男だ。

画角が首から下に絞られて顔は見えない。

「定刻だ。腕に覚えがある者たちよ、こんばんは。よくぞ集まった。私がこの大会の主催者だ。賞金を出したスポンサーと言ってもいい。名乗りはしないがな」

声からしてそこそこの老齢で恰幅も良い。

顔も名前も出せないとなると、やはりどこかの組織の大物らしい。「事前に告知した通り、これよりトーナメントを行う。優勝賞金は洗浄済みの現金一億円。賞金の授与と進行はその代理人が執り行う。頑張りたまえよ」

モニターの陰から現れたスーツにサングラスのエージェント風な男がマイクを握った。

背後にはこれまたスーツの男がピタリと貼り付いている。

赤いシャツに黒ネクタイを締め、常に抜き打ちに備えて真顔でこちらを注視していた。

身の熟しからしてかなりの手練れ。

進行役の護衛だろう。

そんなに警戒するなよと笑い返すと目を逸らした。

「ルールは単純だ。時間は無制限。生死も問わない。だが棄権するか戦闘不能になった者を追い討ちで殺害する事は禁じる。それすら守れん馬鹿は消す。負傷をしても手当は期待するな。以上だ」

ただの業務の一部とでも言うような淡々とした説明が却って現実

味を帯びさせる。

想定より規則が緩い。

これは楽しめる。

しかも一般人には莫大な額の賞金だ。

これでかなり夜鹿に楽をさせてやれると、己の勝利を寸毫足りとも疑わず一石二鳥の機会を喜んだ。

鉄火場に咲いた大輪の笑顔に狂気を見た周囲の者はさぞかしゾツとしたことだろう。

「理解したか？ 理解したなら只今を以て参加を打ち切り、組み合わせを決める。抽選など無い。早い順に枠を埋める。並んで用紙に名前を書け。偽名でも構わんぞ」

冷えた眼差しで説明を切り上げると手振りで人員を呼び出し、名前を書かせる。

値踏みされたくない無頼共が足踏みする中、雪音は一番に群衆から抜けた。

モニター横のテーブルに置かれたノートにボールペンで記帳する。

こんな外道の集まりでフルネームを大っぴらに出すと後が面倒になりそうなので、『雪音』とだけ書いた。

「躊躇わんか。流石は剣兇、自信家だな」

「何が？」

呆れと畏怖が半々な進行役の言葉の意図を雪音は理解しかねた。

見られようが関係無い。

一対一の立ち合いに奇跡の介在する余地は無く、勝者は勝つべくして練られた論理の末に勝つのだ。

それが命を賭した剣客の最低限の心得である。

「出ないのかい？」

護衛の男は無言のまま代理人を顎で指した。

話しながら試しに男の間合いの凡そ一足半だけ外までじりじり寄って見たが、抜く気配はしない。

私闘より仕事を優先するらしい。

「いつかやりたいね」

「書いたならさっさと離れる。お前は気にしなくとも次が詰まる」
「おっと。待たせてごめんね？」

進行役に叱られ振り返ると五歩ほど離れて見知らぬ剣士が待っていた。

つまり初戦の相手だ。

直に殺し合う筈の雪音に和やかに謝られ、心做しか顔は強張っていた。

参加登録を済ませた雪音は試合場をから少し離れ、手脚の柔軟運動をしながら他の剣士を品定めしていく。

瞑想したり素振りをしたりと様々だが、全体としてはまああの粒が揃っている。

しかしまああまりだ。

それなりに自信があるか、雪音のような剣の亡者だけが参加する割には半端だ。

厳しい指導の下で何万時間も鍛えた自分が特別だとはまるで思わないせいか、他人の努力不足に見えてしまう。

ゆつたりと出番を待っていると、若い男がこちらへ向かって来た。

伸ばした後ろ髪を一つに纏め、貴公子然とした色男だ。

背丈と歳は雪音とそう変わらないか少し上くらい。

「おい。訊くが、お前が噂の剣兇か？」

「人に聞く前に自分から名乗るって考えは無いんだ？」

「ハッ、この俺を知らないとはな。藤間九十九、思い上がった人斬りに裁きを下さす者の名だ。覚えておけ」

不躰に宣戦布告されて若干不快になりつつ名前引つかかる。

先日立ち聞きした話し口で挙げられた例の藤間某のようであった。

実際の藤間九十九とは何者か。

表の世界では全国的に有名な剣術家であり、成人前に皆伝を授かった麒麟児、或いは神童と呼ばれる。

試合に於いても無敗を誇る達人。

ところが雪音はテレビのニュースも見なければスマートフォンすら持たないので知る由もない。

目で見たまま感じたまま評価する。

この場では最上位の実力者のようだがどうにも面構えが悪い。態度が尊大なのは別に良いとしても浮ついた足取りで間合いに入った辺り、どこかで剣を舐めている。

「強かったら勝手に覚えるんだけど？」

「破落戸風情が、吠え面が見物だな……」

知らない、覚えていない、という事はそういう事だ。

言外に煽られた藤間は端正な顔に青筋を立て去っていった。

それでまた雪音は呆れた。

何をしにきたのやら。

そんなに怒るならさっさと剣を抜いて斬り殺せばいい。

闇市では弱さは罪。

規約でも出場者同士の私闘による殺しは禁じられていない。

雪音はお座敷剣術家が嫌いだ。

命が一番に大事な癖に剣にまつわる者が大嫌いだ。

勝ち上がって対決したら最低でも二度と剣を握れない体にしてやろう。

そう決めた。

藤間を追い払いはしたが居心地が悪くなって口直しを探しに歩き回る。

参加者とは別の集まりがポツポツと有る。

不参加の観客の中では優勝予想の博打が盛んなようだ。

聞き覚えのある声を感じて群衆に近寄ると、先日路地で頭を殴りつけて倒した男が賭けに興じていた。

目が合う。

「うげえっ!？」

「落ち着きなよ。今日は何もしないから」

無意味に撲殺されかけて落ち着いていられる訳もない。

男の顔からさっと血の気が引き膝が笑う。

害意が無いと示すように両手を上げてやっとならぶ震えが止まった。

ちなみに雪音はこの体勢からでも零コンマ三秒未満で居合を放て

るのでまるで安全ではない。

そうでなければ剣を佩いた集団に近づくものか。

「あ、あんたも自分に賭けるのか？ 一口一万からだけだよ……？」

「いや。金無いし。誰が人気か知りたかっただけ」

「人気は藤間の一強だ。でも奴は強くて上手いが怖くない。俺はあんなに賭けておくよ」

「そりやどうも」

自分に賭けるのは良い発想だ。

負けて死ねば金は不要になり優勝すれば賞金に色がつく。

今日は無一文なので出来ない相談なのだが。

下馬評では藤間が優勝候補筆頭らしい。

「その刀を担保にしてくれよ。実戦的な造りでタフそうだし、俺なら二十万は出すぜ兄ちゃん」

「はあ？」

「死んだら貰う代わりに金を貸してやるってんだよ」

それだけで、沸点を越した。

見ず知らずの男から投げ掛けられた下世話な交渉に、雪音は返答代わりに鞘でこめかみを強かに殴りつけた。

ふらついた所を押し倒して馬乗りになり、鞘の先端、こじり 鐙で顔を滅多打ちだ。

微笑みを消し去り、膝で肩を抑え込んで抵抗させず本気で殴りまくった。

「がつ!? あっ！ ひやめろっ！ ぎいっ！」

「今っ……何てっ……言っただけ？ もう一度っ……言っただけ……貰えるかなっ？」

初撃で刈られた意識が痛みで覚醒する。

男の前歯はボロボロと弾け、黒染の袴に返り血で凄惨な模様が付いた。

反応が薄れても力いっぱい五回十回と殴った。

血のあぶくが弾けて顔に撥ねる凄惨な仕置に誰も彼もが鼻白む。

「同情はしねえけどよ。それ、殺す気か？」

「そうだよ。こいつは俺の凧丸を金に換えるなんて巫山戯たことを言った。二度と言えないように挽肉にしてやる」

男は雪音の数少ない逆鱗に触れた。

凧丸は敬愛する父親から相続した唯一の家宝と同時に形見でもある。

雪音には夜鹿に次いで大事な物だ。

それを知らずとも売れと云うのは一線を超えた許し難い侮辱だった。

既に鼻は陥没して片目は潰れた。

上下の顎は砕かれ、奥歯だけが残っている。

泡を吹き意識も混濁した虫の息だがまだまだ足りない。

懲らしめるのではなくしつかりと惨たらしく頭を潰してやるつもりだった。

「邪魔をするなら殺すよ?」

誰がなんと言おうが、神が許そうが、俺は許さないと冷たく燃える怒りが滲む。

怒りのまま問答無用で皆殺しにしても良かったが、雪音は一欠片の優しさから一言だけ警告をした。

「事情は知りませんがもうやめなさい。本当に死んじゃうわ!」

「ならお前から死ね」

後ろから諫める声が出た。

二度目は無い。

忠告を無視した死にたがりを叩き斬るべく声の主へ居合が閃く。

鞘を左手で順手に持ち替え、片膝を立てた脚を蹴り出し、腰を切つて背後に放つ神速の抜刀術。

その場の剣士達は誰も反応出来なかった。

ただ一人を除いて。

制止した者は半歩退いて紙一重で避けた。

平静を欠いたと云えど、常人離れた速度で振るわれる雪音の太刀を見切ったのだ。

本当に殺すつもりで振り抜いた事で反転した視界の中、その剣士が

女だったと雪音は知った。

長髪を高い位置でポニーテールにして、気の強そうな顔の尻尾を上げた正義感が有りそうな若い女だった。

ただそれだけ。

容姿が良し悪しに関係無く殺してしまおうと雪音は構え相対し、雷に打たれたような衝撃が奔った。

何もが完璧だった。

女の振る舞いの悉くに別格の理合が覗いていた。

重心は深く、地面の反発を正しく蹴り足に受け止める。

腰の真っ直ぐな立ちが体軸のブレを減らし。

歩みは柔らかかで上下に力が逃げるのを防ぐ。

常に油断なく周辺を俯瞰する視線の配り方。

胸郭を使わず横隔膜で下腹を膨らませる呼吸は長期戦の消耗にも耐えうる。

何より全身の、特筆すれば膝や肩腕の脱力は素晴らしく、周りの剣士が不意に襲っても即座に反撃に移る瞬発力を捻り出すだろう。

それらの全き長所を列挙すれば切りがない。

羨ましい程に天賦の才がある。

感心の余りに当初の怒りは消し飛んでいた。

この日雪音は生まれて初めて本物の一目惚れをしたのだ。

PART 7

逆島雪音はつい先程までの冷酷な激怒から打って変わって著しく興奮していた。

三年近く探し回ってやっと巡り会えた眼前の女剣士の輝かしい才能に感激し、羨望を向けていた。

強敵に立ち向かい制するに勝る衝動など、有りはしない。

それは亡き父、逆島獅子吼さかしましくより受け継いだ思想の結晶。

より強く。

より高く。

より鮮烈に。

麗しき屍山血河を渡る冥道の旅路。

名前も知らぬ彼女の存在は長らく停滞していたと感じる武の道に差した、ある種の福音のようにも感じられた。

この期に及んで言葉は無用。

矢も盾もたまらず構える。

交感神経が優位になり一気に瞳孔が拡散する。

荒くなる吐息を宥め、狭窄しゆく視野を広く保つ。

しかして冷静に剣を納めて裾で隠し間合いを秘する。

増すばかりの剣呑な威圧感にその場の全員が付近から離れていった。

「試合なんかいい。ここで始めよう」

こんな極上の獲物をみすみす逃すものか。

口内に溢れた唾液を舌でまぶして唇を湿らした。

膝を抜いて韌やかに腰を落とす。

重心はどちらにも偏らず、女剣士を時計の零時だとして十時あたりに体を向ける。

脚は前後に一步分開いて安定させつつ蹴り足に溜めを作る。

剣は腕で斬らず肚と腰の回旋運動で斬るものだ。

骨格に体重を乗せればどの体勢からでも威力が乗る。

故に加速を妨げる強張りを少しでも減らすよう努めて脱力する。

これが出来ていれば腕がどこに置いてあっても迅速な抜刀が可能となる。

構えとはこの一連の動作を一纏めにした呼び名だ。彼我の距離は七歩の指呼。

最も得意とする間合い。

開始位置が遠ければ遠いだけ、夜霞で呼吸を狂わせられる雪音が有利となる。

ところが対する女剣士は全く構えていなかった。

「やるわけないでしょう!?! あなたどうかしてるわ! どうしてそんな簡単に人を斬れるのよ!?!」

「……はっ? えっ? な、なに言ってるの?」

予想外の叱責に呆然としてしまい、鋭利な殺気が霧散する。

「え、ほんとにやらないの?」

「当たり前です! 私の修める神納流かのう合戦兵法は活人剣です! そんな野蛮な剣は教えません!」

「じゃあ何で参加したの? まさか賞金目当て?」

「経営が厳しくて悪いかしら!?! 他所の台所事情に首を突っ込むのはマナー違反よ!」

「ええ……うっそお……それ本気で言ってる?」

まさか、この域の剣豪が生ぬるい不殺の流儀を持っているとは完全に想定外。

経営難で資金繰りの出稼ぎに来るなど、女の紐をしている雪音は想像もしなかった。

隙を作らんとした嘘八百と言われた方がまだ納得する。

「こっちは大真面目です! 私には何かあればすぐに殺し合う考えの方がよっぽど信じられません! 頭おかしいんじゃないの!?!」

「真剣勝負じゃないと比べ合いにならないっていうか、命懸けで全力を出すのが良いっていうか……!」

「馬鹿じゃないの!?! 力比べがしたいなら腕相撲でもしてなさいよ!」

「いや腕相撲で……!」

キレ散らかしている通り、女剣士は雪音に相当に腹を立てていた。無闇な殺生は許されざると剣術を通して教わった倫理に真つ向から反する男だ。

命を粗末にしてばかりの剣士の中でも斬るだけに留まらず撲殺も躊躇わない分とりわけ質が悪い。

「あく、うん……どうせ後でぶつかると、もういいや……」

立ち合いなら怒気のぶつけ合いは望む所だが、素に戻った間に凄い剣幕で怒られると根が温厚な面がある雪音は萎えてしまった。

この手の勢いは夜鹿に叱られた経験が思い出されてどうにも苦手だ。

しかも大人びた柔らかさの夜鹿と違って気が強そうなのでもっと圧力が有る。

気圧されて毒気を抜かれてしまった。

すっかり氣勢を削がれた雪音は構えを解いて凧丸を担いだ無防備な姿勢に戻る。

無血で場を鎮めたのだから活人剣とやらにしてやられたような気もしたが、気分が萎えてしまったので仕方ない。

「次は俺も死ぬまで降参しないから、そのつもりで来るんだよ」

「待ちなさい！ 話はまだ終わってませんよ!!」

「あはは、待つわけないじゃん！」

早々に諦め回れ右で逃走を選んだ。

追い継る女を男の脚力に物を言わせて振り切った。

剣士としては最高なのだが、対戦するまでは会いたくなかった。

人波に紛れて気配を殺し逃げ回っていると、参加登録が打ち切るアナウンスが流れた。

トーナメント表がモニターに拡大表示される。

さっきの女の登録名は不明だが、雪音は六回勝てば優勝となるのでそれまでに必ず当たると決めつけていた。

真実、不殺の戯言を貫いて手を抜いたとしても、あれは負けようがない。

あれを崩すには特別な技が要る。

優勝候補と目される藤間九十九でも凡百の剣しか使えないのではとても負かせない。

足し算しか知らないで割り算を解くのが不可能なのと同じである。そして雪音は条件を満たす僅かな存在であった。

気を取り直し、凧丸を腰に差し直す。

第一試合の為にすぐに呼び出された。

試合場に舞い戻ると対戦相手が待っていた。

「開始の合図は無い。不意打ち騙し討ち上等だ。揃ったら好きに始めろ」

進行役がマイクで言う。

これもルールの一貫なのだろう。

「逸刀流、吉野だ」

「武蔵一刀流兵法、逆島雪音。ご丁寧にもどうも」

互いにだけ聞こえる音量で名乗り合った。

雪音は丁寧な頭を下げるも、礼をする間にも目だけは油断なく向けたまま。

吉野はガチガチに固まっていた。

さもありなん。

たった数十分の間で雪音は剣兇の噂を裏付けるような派手な撲殺未遂を起こし、その残虐性を目の当たりにしてしまったのだ。

強張っていると本来の能力から半減してしまう。

緊張を解してやろうと雪音は朗らかな笑顔を向けるが振り返り血に濡れた顔では却って異様さを際立ててしまう。

恐怖と奇異の目を向けられている間隙に着々と分析していた。

兇悪な剣客と思われる人物の次に並んだだけあって正眼も堂に入っており、一見すればそこそこに腕が立つのは読み取れた。

女剣士に襲い掛かった際の抜刀の速さに上段下段や同じ居合で競えば必敗と見限り、正中線を守る決断を下したのは正しい。

しかし剣先に動揺がある段階で雪音には勝てない。

こうなっては雪音の胸中に昂ぶりも歓びも無い。

退屈だ。

先を取り、夜霞すら使わないただの踏み込みで大胆かつ繊細に接近し、尻丸を抜き放つ。

長身で間合いが広く、磨き抜かれた居合は恐ろしく速い。より遠くから、目にも止まらぬ速さで剣は叩き込まれる。

ただそれだけの単純さ故に盤石で、奇策を用いるか基礎で上回らねばひっくり返せない。

事実、両手首と胸元を斬られた吉野はコンクリートの床に崩れ落ちた。

素人目にも致命傷と分かる。

仮に生きていても両手を失っては再起不能。

吉野は暫し痙攣し、そのまま動かなくなるまで雪音は残心をとっていた。

死を看取つてようやく血振りをする。

「勝負有りだな。戦利品は要るか？」

「要らない。こっちにへソを曲げられても嫌だからね」

懐紙で丁寧な血糊を拭い清めた。

死体へ一礼して愛刀を鞘に納める。

進行役が部下に死体と刀を袋に詰めさせて運ばせる。

鍛えた男の体は重かろうが、矢鱈に手際が良いせいか日常的に死体を扱っている様子を連想させる。

早過ぎた緒戦の決着に観衆はどよめいていた。

隠された手の内を探ろうとした者も何の手掛かりも得られなかった。

真つ直ぐ行つて抜き打ちで斬り捨てただけなのだから。

正面から立ち向かえばあの絶望的なまでの速度の居合がかなりの遠間から飛んでくる。

此方からは届かず、向こうからは届く。

防ぐか躲すかを押し付けられ続ける中で反撃しなければいけない。どこかで読み違えれば死ぬ。

仮に賭けに出て先を取つてもあの神速の抜刀術は後の先で破る。どこを取つても死しかない。

とても簡単な理屈だ。

その点だけは一部始終を目撃した全員が理解した。

銘々が攻略に頭を悩ます中、雪音は悠々と舞台を後にした。

雪音は楽しみだった。

どのようなにして己を破る策を捻り出すか。

はたまた不意打ちの居合すら躲したあの女剣士のように並外れた

才覚を見せるか。

心が疼いて堪らない。

この期待する感覚がもう幸福だ。

次なる出番まで柱に背中を預け、他の出場者をじつと観察していた。

藤間九十九も相手の兜割りを後出して切り落とし、利き腕を切断して腕前を見せつける形で勝利していた。

切り落とし。

相手方の剣閃の後から追隨して振り下ろし、刃で峰を押し退ける事で防御しつつ攻撃にもなる上級者の技術。

角度、速度、拍子を深く理解してこそ成せる。

成る程、基礎の完成度は囀るだけあるようだ。

そして収穫がもう一つ。

あの女は出義牡丹いづるぎぼたんと云うらしい。

此方はやはり不殺。

峰打ちの小手で骨を砕き、相手を殺めずに勝ちを収めた。

どちらにせよ全ての一回戦を終えるとコンクリートはたつぷりの血を吸った。

夏の熱気と殺意の湿度に換気が追いつかず、蒸し暑い地下に粘つく血臭い空気が溜まる。

それを胸いっぱい吸い溜めて、第二回戦の呼び出しに応じた。

さてどんな対策を練ったかと期待して臨んでみれば、殺気すら持たずにおとおどと怯えている四十絡みの男が相手だった。

下段構え。

防御、若しくは後の先狙い。

呼吸が浅く上擦り剣先も震えた姿が擬態なら素敵なのだが、そんなに理想的な現実にはほぼ無い。

ガツカリだ。

名乗るのも馬鹿馬鹿しく思われて、さっさと剣を抜いた。

居合すら勿体ない。

剣を片手で前方下方に向けて呐喊。

猛然と加速する雪音に相手は泡を食って剣を突き出した。

これでまた一つ評価を落とした。

無策で体を崩すなど大馬鹿の所業だ。

速度はそのままに若干左方へ回って切先を避け、相手の剣を鎬で流し隔絶した実力差を顕にした。

勢いのままに、体当たりと同時の刺突で臍の下を串刺しにする。

「がっ!」

「俺に居合しかないとも思ったの?」

「ぐぎっ……!!」

お目出度い奴だ。

左腕の内肘を支点に上方へぎぶぎぶと腹綿を斬り上げ、容赦無くその命脈を断つ。

小腸、肝臓、心臓を裂かれて苦悶の内に死んでいった。

武蔵一刀流兵法、翔馬。

駆けながらしゃがみ込む等して袈裟や横薙ぎを潜り抜け、剣を空に返し体ごとぶつかり下腹を突く。

命中するやいなや肘の内側で峰を支えて背筋と膝を伸ばす勢いで心臓までの臓器を斬り上げる。

刀に適さない近間で小太刀に持ち替えずに必殺性を持たせた超接近戦向けの技。

本来は甲冑の武者を相手に装甲の隙間を確実に狙うものであった。確かに雪音の居合に勝つには先に剣を出すしか無かったが、相手のそれは間合いを見誤った程に早過ぎた。

居合を警戒し過ぎ、硬直した思考で早まって剣を出してしまっていた。

雪音は迂闊に広げたその懐を突いた。
間拔けが。

あの世でもっと稽古するがいい。

「雑っ魚……」

とうに息絶えた男の浅慮を嗤う。

期待は裏切られ、雪音の体感では吉野の半分にも満たない力量だった。
た。

余計に欲求を募らせてしまい、次の相手をどうしてくれようかと残酷な構想に暗い情熱を高まらせたのだった。

PART 8

術理の理解度、実力差は誰の目にも明らかだった。事ここに至っては万人が認めよう。

剣兇とは、逆島雪音とは、剣技と加虐の申し子であると。

加減して楽に戦っても万に一つも負けは無かつたろうに、敢えて血を見せた雪音の蛮行に進行役も何も言わずとも目元をひくつかせた。

その傍ら、モニター横から攻略の糸口を掴もうと雪音の立ち合いを観戦していた出義牡丹いづるぎぼたんは無意味に流れた血に、より強い義憤を駆られていた。

賞金云々を脇に置いて、既に気の向くまま三人を血祭りにあげているあの怪物が榮譽を勝ち取り名を馳せて良い理由など一片足りとも無い。

斯様な狂人に格別の才を与え給うた天が恨めしい。

同門の高弟等を根切りにしても余り有る才覚は、あの男に渡るべきではなかった。

あれは強い。

一挙手一投足に真つ当な稽古をしてきた美しさを湛えていて、果てし無き研鑽を非凡な才に上乘せしているのだと、見る目が有れば判る。

きつと藤間には止められないだろう。

雪音と牡丹が当たるのは決勝戦だ。

最低でも後三人の血が流れる。

主催者が容認している以上は対戦相手が死傷するのは已む無し。

せめて試合外だけでも余計な人死を出させないよう追い掛けようにも、決着をつけると即座に雲隠れしてしまう。

羽織姿の目立つ容姿が容易に発見し得ない程気配の殺し方まで長けているとは、牡丹も畏れ入るしかなかった。

破滅的な狂人と勝手に思われていた雪音はその頃、殴打で半殺しにした男の懐からこっそりかっぱらった金を賭けに投じていた。

当然全額を自分に張った。

投票は終了していたが、胴元の男を脅して無理矢理に参加した。全体としては、それぞれの男が自分に張った分を主軸に観客がさらに上乘せする形に落ち着き、優勝候補の藤間などの名望が高い者を除いてその倍率は五十歩百歩。

剣兇であるか半信半疑であつたのが幸いして、雪音に賭けた者は極少数。

払い戻しの倍率は百倍を超す。

負ければ死ぬと覚悟を決めた男達の文字通り命金が積み上がっただけある。

先程の無様な相手すら一旦忘れた様子で、アクリルケースに貯められた紙幣の山脈を見る。

金は幾ら有ってもいい。

夜鹿に養われ、金に無頓着な雪音もそれは薄ぼんやりと知っている。

強敵との戦いを望む気持ちと同程度に、金を両手一杯に持ち帰り、大好きな夜鹿に楽をさせてやりたかつた。

ついでに褒めてくれると嬉しい。

夜鹿の喜びようを想像し返り血を雑に拭いた顔で微笑む。

羽織と白かった胴着は赤黒く乾いて、動く度に血の粉を落とした。

楽しそうにしていたかと思えば五分後には静かに怒り狂い、またすぐに機嫌が直る。

まるで情緒不安定な子供そのもの。

しかし子供だからこそ、その場の思いつきであつても、偽り無い真心で優勝へ邁進するのだ。

「金に興味は無いんじゃないかなかったのか？」

「有っても良いじゃない？ 楽させてあげられる」

その口振りから、養ってもらっている女か母親でも居るのだと胴元は推察した。

そんな相手に普段はどんな顔を見せているのかと想像すると空恐ろしくなって言葉を失った。

人懐っこそうで端正な顔立ちの雪音に靡く女がこの極悪人ぶりを

知れば同じく絶句するだろう。

さもなければその人物もまた狂人の誹りは免れまい。

「怖い世の中だねえ……」

何となく雪音の人となり解してきた胴元は背景に触れない賢明さを見せた。

そんなご機嫌の雪音を立て続けに不幸が襲う。

なんと、次なる第三試合の相手が開始直前に棄権、第四試合の相手はそもそも会場から逃亡してしまったのだ。

勝利至上主義の身で必敗と悟れば機を改めるのは正答だと雪音も思う。

蟻が人に挑むは勇敢ではなく蛮勇。

無謀を勇氣と履き違えた馬鹿だ。

敢え無く捻り潰される愚挙。

なればこそ、知恵を絞り鍛錬を重ね、ほんの少しでも勝ち目が湧くまで技を練るべきなのだ。

一刺しで倒し得る毒を会得して初めて挑む意義が生ずる。

己を知り、相手を知り、勝ち筋を見極め、必殺の一撃を叩き込め。

想い叶わずば潔く散れ。

剣客とはそうした生き方そのもの。

立場が逆なら雪音もそうしたので批判はすまい。

「チツ……」

そうは言えど鬱憤は溜まる。

理解していても壁際で舌打ちを鳴らしてしまうあたりは若さか。

苛立ちに満ちて余人を拒む闘志の槍袞を一人の若き剣士は踏み越えた。

「見るに耐えんな」

「ああ？」

「見苦しいと、そう言った。そうまで血に渴くならお前の血を飲ませてやる。人斬りが俺の前に立ち塞がるなど烏滸がましい。あの出義とかいう女も、剣ではなく包丁を握っていれば面の良さで女の幸せを得ただろうに」

「ピーチクパーチクうるさいんだよ。ちゃんとぶつ殺してやるからあっちに行つてろ。それともここで今からおつ始めたい？」

気鋭の藤間九十九は順当に勝ち上がり、準決勝で戦うのが確定している。

逃げないだけかもしれませんが、偉ぶった口調であの女も貶めるのが腹立たしい。

壁を背負い退路を塞がれている不利を気にも留めず、殺気を飛ばした。

閉所でも剣を振る技はいくらでもある。

実際にやってみせてもやろうかと、柄に逆手で触れる。

もう三步踏み込んだら叩き斬る魂胆であった。

「言われずともな。覚悟しておけ」

よほど衆人の耳目の下で雪音を倒したいのか、踵を返した藤間は試合場の反対側へ行った。

出義牡丹は危なげなく勝ち上った。

それだけでまずは喜ばしい。

次は彼奴をぶちのめす。

戦えなかった前二戦分の鬱憤をここで晴らしておけば決勝では雑念を絶つて晴れ晴れとやれる。

複雑な感情は重りになる。

酸化して黒ずみ始めた血痕があちこちに残るセメントの床を踏み会場へ臨む。

時計が無いので時刻は不明。

腹時計が確かならまだ日付は変わっていない。

夜明けまでに帰れば返り血も目立たずに歩けるか。

思考を切り替え目の前の藤間を数秒観察する。

既に剣を抜いている。

右利き、脇構え。

袴から覗く爪先は少し浮いている。

踵に体重を乗せて力を溜める脚遣いは新陰流に見られる特徴。

左手は放して片手持ちをしたりと、流派は判らないがそれなりに様

になっている。

体の開きや下体の様子に幾つか異なる流派の息遣いが混在するが、ちぐはぐにはならず纏まりを見せていた。

常人では扱いきれず破綻するそれらを巧妙に統合運用しているのが天才と云われる所以か。

成る程、これでは何が繰り出されるかと手の内を読めば読むだけ無限の手札に圧倒される。

思考に飲まれるとその場に居着いてしまう。

これまでの対戦者はこれにやられた。

しかし、知ったことかと雪音は嗤う。

藤間は名乗りもせず駆けた。

勢い良く奔る。

選択したのは、最後の数歩を跳躍で稼ぎ自身を抱くように体を絞って片手で放つ水平の首薙ぎ。

高難度の技をその年齢で実戦に使えるのなら一廉の名手ではあるのだろうか。

「はあああああっ!!」

裂帛の気合と云えば聞こえは良いが力み過ぎて伸びが悪い。

後出しでも充分に打ち勝てる。

しかし一太刀目を居合で迎え撃つのも興奮めであり、雪音は少しの上体の逸しと後退で避けた。

軌道の変化に備えて半円を描いて藤間の左手側へ小刻みな摺足で三歩回る。

振り抜かれた切先は雪音の鼻っ面を通過していき、先手が空振りに終わったと両者が知る。

溜めた力を使い切った剣はそれ以上伸ばせない。

この型は相手に困惑と動揺を与えて先んじて必殺の攻撃と成す先手必勝の太刀の亜種。

示現流にもほぼ同様の型が存在する。

そちらは縦に落とすが理屈は同じ。

公に種が割れている以上それを超える戦術は常に生み出されてい

く。

いかに高等な剣も必中足らしめる工夫が為されていなければそれは素振りも同然。

わざと浅く躲してみたが、着地する体勢を翻して追撃する仕草は見られなかった。

それ見たことか。

底が浅い。

また啜う。

雪音の才は身体能力や技術ではない。

それらは血の滲むような努力で培ったものであり、真の天稟は五体の躍動を分析する眼だ。

何度も目の前に現れてくれたお陰で歩幅や剣の長さは読み切った。

非常識な動きをしない剣閃がどこを走るかも視えている。

視えてしまう範疇の実力しかない藤間に初めから勝ち味は無かった。

勝敗は鞘の内にあるという格言の通り、戦いとは往々にして始まる前に結果がおおよそ決しているものだ。

先に地面に着けた左足を軸に、右足を強烈に踏み締めて慣性に逆らって雪音を追う。

返す刀で水平突き。

雪音は体を捻ってそれも命中せず。

流れるように逆袈裟。

「は・ず・れ」

これも届かない。

突きの体勢から繋がるのは体当たりか体が開いた方への切り払いだけ。

剣は合理の上でのみ成り立つ。

空間を超えたり、重心の定まらないまま自在に跳ねる剣は実在しない。

一芸に秀でず定石を破れないでは雪音の目からは逃れられない。ちろりと舌を出して小馬鹿にした顔で体を開き躲す。

頭に血を登らせた藤間は居合の達人に居合の軌道で漫然と斬り掛かる愚を何度でも冒した。

「卑怯者が！ 抜きもせず逃げるだけか！」

「はあ……バカにつける薬は無いつてほんとだなあ。お前のおままごとにつき合つてやつてんだよ。すぐ終わらせちゃ可哀想だからさ」

躲すだけに専念している雪音は藤間には逃げ回るように見えてもどかしいだろう。

本人は間断無く攻めているつもりが、四度は反撃の機会を見逃してやったのにお目出度い男だ。

「ほざけえっ!!」

狂人に嘗められるなど天才として幼少から順風満帆な生涯を築いてきた藤間にあつてはならない屈辱だった。

称賛と一身に集めてきた藤間は気位が高い。

恐れられ、尊ばれるのはこの俺であるべきなのだ、歪んだ欲求に狂わされる。

確かに多彩で小器用で筋力に裏打ちされた瞬発力は優れているが、常識から外れていない範疇に収まった器。

だがもう底は知れた。

雪音は後ろ向きに数歩走り左右にフェイントをかけながら下がって風丸を抜く。

それを大股で藤間は追い、袈裟に振る。

雪音は受け太刀の姿勢をとり、そして右肘を空けた。

無意味に体軸を散らすのは受け側に不利を生む。

しかしそれは無策でしたのであればだ。

重心が剣から前腕の中心付近に密やかに移動したのを理解したのは観衆の中で出義牡丹のみだった。

不利な体勢で受けた筈だった。

血肉を断ち割って臓器を傷付ける事はなかった。

刃がぶつかり合う直前、瞬間的に後退し切先の近くで浅く受けて肘と肩を軸に右腕を絞り上げ、剣を回す三段構えの工夫が力を逃した。

そして小さく回す先には藤間の右腕がある。

「ぐうっ!？」

引き締まった腕の外側がザツクリと切れた。

動脈は無事だが腱が断たれ剣を取り落とす。

静脈の断面から暗い血が流れる。

「おーおー、不健康そうな血だけど調子こいて不摂生してたんじゃないの〜?」

追撃せず離れた雪音は残心もとらずに凧丸の刃に毀れが無いか調べている。

にやにやとして、まるで敵として扱っていない。

武蔵一刀流兵法、火車。

先を誘い、受け太刀に加わる衝撃を逃しつつ手首を中心に小さく回して小手か喉を斬り上げる返し技。

足腰の敏速さが相手より勝る場合のみ有効な技であり、藤間が雪音より格下だと一撃で明確に決定付けた

右手を浅く斬ったのは敢えて。

お楽しみはこれからだ。

左手で傷口を押さえて激痛に耐えるがそうしている限り剣は握れない。

動脈が無事なら小一時間は死なない。

剣客であればそれは無視していい負傷だ。

藤間は何とか拾おうとするが痛みがアドレナリンを上回り、膝をついたまま立ち上がれず睨めつける事しか出来なかった。

「貴様……俺の腕をよくも……!!」

「ゴチャゴチャ言っていないで立てよ。奥の手とか無いの? ?でしよ、あんなに自信満々だったのに?」

まだ治療すれば再起の望みは残るが立ち合いの中でそんな未来を考えるのは剣客ではない。

たかが腕の一本も捨てられないつまらない男め。

やはり見下げ果てた腰抜けだったと、敵から玩具へと格下げした。

玩具とはそれで遊ぶものだ。

雪音の瞳に苛虐の光が灯る。

「や、やめろ……来るな……!」

片膝立ちで停止した藤間に死神のように静かな足取りで近寄り、鏢を返して尻丸を振るった。

急所を的確に狙わない限り死なない峰打ちは下手な真剣より残酷である。

剣が握れずとも多少の気概を見せて喉笛を食い破りに来れば喜んで楽に死なせてやったものを。

右浮動肋骨複雑骨折、左腓骨亀裂骨折、右上腕三頭筋断裂。

鞭のように靱やかに次々に打ち据える。

「ぐぎゃあああああああつ!!」

痛かろうが死にはしない。

拷問を受ける藤間は悲鳴を挙げて蹲り悶絶するが、未だにプライドが邪魔して降参もできない。

どん詰まりだ。

それを良いことに雪音は存分に黜った。

苦痛の凄まじさもさることながら、死にもせず立ち上がれてしまうよう絶妙に加減してある。

つまりこれで立てなければ根性無しの意気地無しだからかかってきた。

「下手糞♡雑っ魚お♡弱過ぎ♡才能も根性もないのマジみつともない♡」

挑発的な声音で嘲笑い、苛虐の舞を妖しく踊り狂う。

内出血に留まらず、破れた皮膚から流れた血が藤間の胴着を染めてゆく。

苦痛と恐怖と絶望に死を予感させられた藤間は心の底から震え上がった。

殺される前に棄権を宣言しようとして口を開いた瞬間、戦意が潰えたのを見取った雪音は鏢で頬を殴り飛ばす。

藤間の顎関節が外れて発声能力を失った。

手足は力を失くして這いずって逃げることも叶わない。

「今更白旗なんか揚げさせると思ってたのかよ」

「ハヒ……ヒイ……!!」

「ひやはははははは！ みつともねえ、先に死んだ奴らが地獄の特等席で待ってるぜ!!」

死相と恐怖を浮かべていつの間にか失禁した藤間を地獄から這い出た鬼のように嗤う。

いざ止めを刺さんと喉に切先を当てる。

ゆっくりと差し込んで存分に苦しませて死なせるつもりだった。

「もういい、そこまでだ」

拷問ショーを止めたのは進行役だった。

「止めるなよ。まだこいつは剣を握れるし、脚も動くようにしてある。ならかかって来るだろ？ まだ終わってない」

命懸けで戦う者らに覚悟なく混ざり死合を穢した愚か者への仕置を中断された雪音は、悪鬼羅刹の表情を進行役へと向ける。

不満げに狙いを変えた邪気にじろりと睨まれて動じないのは流石か。

「勘違いするな。それはもう壊れた。我々は強者を求めるが、弱者の処刑を観たいのとは無い。これは主催者の意向だ」

懐から鉄の塊を出して雪音へ向けた。

見慣れない道具であるが、即座に理解した観衆は息を呑んだ。

拳銃だ。

刀剣類が野放しにされるまでに官憲が傾倒して摘発した優位性は語るまでもない。

小銃より命中精度が低いとしても剣に明確に勝る武器。

薬物取引等のシノギで得た潤沢な資金力で密輸、密造、横流しのどれかをやっているのだろう。

表では警察に執拗に締め上げられても、闇市を牛耳るような組織であれば入手は造作もないという事か。

「お前の腕を見込んでもう一度だけ警告してやる。やめておけ」

サングラスに瞳が隠され真意は読めないが、指先に宿る力は確かに本気だ。

銃口の軸が胸の中心を捉えて逃さないのも感知している。

これは分が悪過ぎる。

さしもの雪音も五歩より離れて銃に勝つビジョンは視えなかった
ので大人しく剣を引いた。

「それでいい。疲れは？」

「疲れるような事有った？ それともまさか疲れてたら敵が待つてく
れるってのかい？」

やるせない不満を飲み込み、歪みが無いか丁寧に目視で点検しながら
血を袖で拭いて尻丸を鞘に納める。

滑らかに仕舞い、鯉口をぱちりと閉じた。

柄巻もかなり血を吸ったので帰ったら分解して手入れしてやりた
い。

良き剣士は命を預ける相棒を大事にするものだとし獅子吼に口を
酸っぱくして言われている。

雪音は自ら斬り捨てた今も敬愛する父からの言い付けを厳守して
いる。

「だろ。このまま決勝戦を始めるぞ。あの御方も期待している」
銃を懐のホルスターに戻すと目配せをひとつして、ぐったりした藤
間を手下に運ばせて行く。

剣の方はかなりの業物だったようだが使い慣れた尻丸があればい
い雪音は貰おうとも考えなかった。

発散はしたが下らない幕引きだ。
だが許そう。

次に控えた御馳走の前では霞んでしまう。

怒りに手を震わせた出義牡丹が待っている。

入場した牡丹は……嗚呼、やはり姿勢が美しい。

心の中で諸手を挙げて賛美する。

だからもつと怒ればいい。

活人剣など捨てて真の実力をぶつけてくれれば、それが正義だ。

「あなたは、あなたって人は……命をなんだと思ってるんです!？」

「世界に六十億もある何かだよ。自分で望んで来たのに土壇場で死に
たくないなんて通じない。人は怪我させといて、そのくせ自分は痛い

のもイヤなんて嘗めたこと言ってるなら死んで当然だろう？」

真面目な牡丹が嫌いそうな言葉を選んで返していく。

鋭い敵意が飛び込んで、雪音の心を濡らす。

稀代の才能から吹き上がる熱量を肌で受けるのは最高に心地良かった。

PART 9

神の使徒を見た信徒の眼差しを向けてくる雪音に対して、牡丹は苦虫を噛み潰したように渋い顔をしていた。

忌み嫌う人物に好意をぶつけられても嫌悪しか湧きようがない。

「あなたはケダモノよ。あんな事をするのは人間じゃないわ」

「ははは、剣を振れるなら俺は畜生でも餓鬼でも悪魔でもいい」

「……………やっぱりあなたとは分かり合えないみたいね」

「んなことあ無いと思うけどな。まあ、どうでもいいさ…………」

毅然と罵倒されるがそんな事で傷付く雪音ではない。

剣を交わせば嫌でも分かり合う。

分かり合わざるを得ない。

強みと弱みを押し付け合い、その背景にあるものまで見えるのが熟練者だ。

甘美で蠱惑的なぶつけ合いはセックスより何倍も楽しい。

女好きが極上の娼婦を抱くような期待と感動が押し寄せ瞳孔の拡張が激しくなった。

和やかなお喋りはもう終わる。

スニーカーの底をズリズリと滑らせて腰を落とす。

雪音はその本領である居合を解禁した。

血霧煙る風を深く吸った牡丹は横隔膜を緩めて息を吐き、剣を抜いて正眼に構えた。

「武蔵一刀流兵法、逆島雪音」

「神納流合戦兵法、出義牡丹」

「牡丹か。名前も良い」

「あなたに褒められても嬉しくないわ。行きますよ」

牡丹は迷わず先の先を取った。

この期に及んでは気の迷いから攻撃を引き伸ばしても無意味。

なぜなら雪音が先を取ればどのような目論見も御破算と成り果てるからだ。

一戦目と場外乱闘の二度だけ見たが、本気であればあの居合より速

いと仮定すると、後の先で山を張って待ち構えても勝ち切れる見込みは非常に薄い。

私刑を止めた時でさえ背中中は冷や汗でいっぱいになっていた。

防御と回避のみに回ればどうにかといったところで、反撃などともとても。

つまり雪音を叩きのめすには先に剣を出すしかない。

無傷で勝ち抜いてきた同格の使い手をしてその結論に至らしめた。

鎖から放たれた餓虎がそれを許すか。

そんな雑念を牡丹は振り払う。

迷いは敵。

自身を見失わず死地へ踏み出す一片の勇氣こそ肝要。

先に抜き、先に振り上げ、先に振り下ろした。

雪音を倒す手順として、そこには一つの落ち度も存在しない。

利き腕破壊狙いの逆袈裟が決まると確信するほどに。

「……………!?!」

本能が鳴らした警鐘に従って太刀を止め、体重移動で無理矢理に行方向を直角に変化させた。

結果的に、それは正しかった。

首の高さを尻丸が通り過ぎて、ピタリと停まる。

雪音の抜刀は余りに速かった。

鯉口を切ってから殺傷圏に至るまで、その間僅か零コンマ一秒台。

それを第六感が感じ取った。

反応速度の理論的限界値を超えている察知の速さに雪音は逆にただ感心する。

牡丹の白い首を刎ねる気で放ちつつ当たるとは微塵も思ってもいなかったまでも、こうまで完璧に躲されたら嬉しくもなる。

咄嗟に受け止めるのを選ばなかったのも素敵だ。

受け太刀は戦術の一つではあるが剣を著しく傷めてしまう下策。

「そうこなくっちゃなあー!」

敢えて刃を見せて間合いを教えるようにゆっくりと尻丸を引き、喜色満面で微笑み称える。

「馬鹿にして……！」

牡丹も見え見えの誘いには乗らない。

軽々しく攻めてもひよいと避けられるのが落ちだ。

居合の使い手が本来何より隠すべき間合いを堂々と晒して自らを不利に立たせる。

まったく馬鹿にしている。

いや、これはもう馬鹿げている。

二人の技量のみを総合的かつ客観的に評価すれば概ね拮抗しているか牡丹がやや勝る。

雪音は見切りと剣速に、牡丹は手加減と防御に特化した鍛え方をしてきた。

不利をひつくり返す速さと目の良さがとにかく手強い。

楽しめたなら死んでも良いとする気構えを備えた実力者と対峙するには、生け捕りなど生温い。

引き際を抑えた上での捨て身を御するには此方もまた斬り捨てる覚悟無くしては敵う由も無し。

間合いも、技も、見切られず見切るべし。

武蔵一刀流兵法の真髄は見切りにある。

理想を愚直に追い求め超常の域に足を踏み入れた今や、殺気の無い鈍い太刀に捕まる雪音ではない。

「おいおい出義い、もっとやる気出してくれよ。折角の死合なんだ、お高く留まってんな。俺を殺したくなってくれなきゃ嫌だぜ」

愛刀を抜き挿しして見え透いた挑発をする。

両者の水域では小手調べにもならないお遊びに過ぎない。

「ほらほら、満足させてくれないと帰りに辻斬りしちゃうぜえ？」

血の染みた袖を振りかざし、まだまだ吸わせ足りないと示す姿は魔物そのもの。

剣とは己を律する道と習ってきた牡丹には根本から相容れない考えだ。

相討ち覚悟の呐喊。

それでもなければこの男は勝ち拾えまい。

一瞬だけ膨れた気迫に、いつからか恐怖を忘れていた雪音の肌が粟立つ。

眠れる獅子が片目を開けた。

向き合った雪音に突如として消えたと思わせる速さで繰り出されるは異端の脛斬り。

峰で打てば確実に折れる。

それで戦闘不能だ。

前進するまま倒れ込むように一挙に身を伏せ、放った。

活人剣に有るまじき邪道。

そうまでさせられて募る怒りを原動力に威力をいや増した一閃は
またもや読まれていた。

低く前進しながらの突進を雪音は前方への跳躍で逃れる。

十メートル四方の広い会場を羽毛の軽やかさが生かした。

右脚でコンクリートを固く踏み、慣性のまま飛び出した左脚を胸に着かんばかりに伸ばして地面を蹴る。

腰を螺旋状に絞り上げ、使い切っていた溜めを一瞬で蘇らせて背後へ斬り上げる。

「こ……の、お、っ!!」

「はは、すげえ！ すげえなあ！」

これは先程の乱闘で熱くなった雪音が使った技、武蔵一刀流兵法が旋毛龍尾。
つむじりゆうび

その変型応用。

うっかり見せた剣技を模倣された。

当然雪音は軌道を知っている。

昇り龍の如き剣閃を海老反りで避け、猫のように足から舞い降りた。

「くひっ……」

「さっきから何がおかしいのよ!」

まず腰の撥条が非常に強い。

よく鍛えられている。

柔軟性、思い切り、重心の移動も滞り無く超一流。

最も素晴らしいのは勘所の良さだ。

一目しか見ていない技をぶっつけ本番で出してまともに当てるのは雪音にすら不可能だ。

正しく奇跡。

不世出の傑物と巡り逢えた幸運よ。

これが喜ばずにいられるだろうか。

昂りのままに抜く。

鏢に掛けた左右の親指は弾き出しと引きの相乗作用を生んで抜刀を早める。

それら幾多の工夫を凝らした居合は陰り無く鞘走る。

我慢の限界だ。

抜き打ちで袈裟に落とす剛の剣。

牡丹が受け太刀の保険をかけたつっ左へ動いて空を切る。

否、剣同士で少しだけ当たっていた。

僅かに当てたその反動で自身を動かしたのだ。

余分な力を抜いた分だけ次手への移りが早まる。

精妙な軽業だ。

牡丹の逆袈裟の反撃を、半歩体を入れて半身になり避け、直前の軌跡を逆戻りする股間への斬り上げ。

牡丹は左脚一本で跳ぶ。

右脚を中心に螺旋に重心を操り遠心力を縦に変換した高速の兜割りに転じた。

流石にこの場に居座っては避けきれないと下がり胸から上を反らす。

腰が浮いて態勢が崩れたことで、さらなる追撃は両者とも出来なかった。

雪音は五歩下がる。

仕切り直した。

少し手を伸ばせば顔に触れられる至近距離でこうも当たらないものか。

観客は野次を飛ばすのも忘れて息を呑む。

「くふ、ふふふ、あはははは！ 親父以来だ！ こんなに鋭くて！ 疾くて！ 正確で！ 楽しい戦いはさあ！」

必殺の剣舞を踊って湧き起こる悦びから饒舌の雪音は嬌声にも似た艶つぽく妖しい咆哮を高らかに叫んだ。

視えている雪音と違い牡丹はほぼ勘のみで避けていた。

眼は雪音のみを追い剣は見ない。

幾つか若い牡丹と同じ年の頃にそれが出来たか。

無理だ。

そんな芸当、やろうと思っても難しい。

この異常者め。

たまらなく素敵だ。

凧丸を右肩に担ぐ。

左肘を顎の下で前に突き出して肩の力を過剰に抜いた奇妙な構えだ。

雪音は胸中渦巻く想いを五臓六腑に染み渡らせ、元気一杯に飛び出す。

先手を取らせては拙い。

牡丹とて分かっている。

判ってはいるが、一見して隙が有っても手を出せば返されると思うと動けない。

その思考の迷路に嵌まった結果正眼から剣をろくすっぽ動かせず、まんまと懐に入り込まれた。

「くうっ!？」

柄を腹へ引いて梃子の要領で切先を跳ね上げ、超至近距離で鏢元で殴りつけるように剣を押し付ける。

武蔵一刀流兵法、釣瓶つるべ上げ。

遠間ばかりを警戒する相手の裏をかく奇手。

間合いを重要視する流派ながら、それを潰された際の対策も豊富だ。

考える前に牡丹の体は動いた。

鏢に鏢をぶつけ返し、間一髪で真つ二つにされるのを回避した。

押し切られかけるも辛うじて抑えた。

切先の速さに囚われず回転軸を見抜き、膝を使って全身で持ち堪えた。

見事だ。

しかし依然として死は目の前に立ち塞がる。

額を突き合わせて剣を押し合う。

穏やかな吐息がかかり、体に帯びた熱も刃の冷たさも感じられた。半端に退けば斬られる。

かといって押し込み過ぎても透かされて斬られる。

身長差を使って上から体重をかけるが牡丹ものらりくらりと力を逃してどうにか抑え込もうと躍起になった。

伝説の達人のように無刀取りでもしようとするのか、剣の制御を奪おうと懸命だ。

頭一つ小さい身でよくやるものだ。

牡丹の器用さにはほとほと感心させられる。

が、それと勝ち負けは別の問題だ。

「でもそれじゃヌルいんだよなあ!!」

丁度よい高さに接近していた牡丹の頬に右肘を入れて殴り飛ばす。

雪音は立ち合えば女の顔も平気で殴る。

真剣勝負で殴らない方が余程無礼に当たると考えている。

それが剣への愛であり誠意だ。

歯や鼻は折れずともたたたらを踏んで崩れかけた牡丹を追いはしない。

そんな終わらせ方は野暮だ。

「そろそろ体は温まった?」

「今まで本気じゃなかったって言いたいの?」

「手を抜いてたのはお互い様だろ。喜べ、良いものを見れるぜ。頼むからうっかりくたばらないでくれよ?」

再び居合の構えに戻った雪音は不敵に笑う。

実情を知らない女ならコロツと行ってしまおう爽やかで優しげな笑顔だ。

牡丹を格上と認めながら、どうしてこんなにも自信があるのか。十中八九勝てる確信が有るからだ。

それはなぜだ。

そも、雪音はなぜ、剣兇と並んで魔剣士と警察関係者に形容されたのか。

雪音が死体を残した現場に不可解な点があったからだ。

本来、現代の科学捜査はどう戦いどのような武器によってどう死んだかを詳らかにする。

血痕、足跡、繊維、体組織、指紋、死因。

推測に役立つ痕跡は無数にある。

証拠を消されない限り警察は検挙に漕ぎ着ける。

ところが、足跡しか残さず無傷で勝ち続ける剣士が現れてからは未解決事件が多数残った。

特定の距離で戦っている事は足跡や傷口の形状から明らかになり

犯人は単独と見られる。

それはまさに雪音の犯行に他ならない。

問題はどのように斬ったのか。

大半が驚愕し、あるいは困惑の表情で死んでいた剣士達は最期に何を見たと言ったのか。

勝負事に必勝不敗を齎す摩訶不思議。

答えは未だ霧の中にある。

これを魔剣と呼ぼずして何と呼ぶ。

稀代の剣士か必殺を突き詰めたる鬼札。

秘められた魔剣の帳が開かれる。

PART 10 インヴェイジブル・ソード

「いきなりだと心臓に悪いし、順繰りに行こうか」

命を奪うにはあまりに優しい顔で獰猛に駆け寄り抜刀を披露した。凧丸の間合いを掴んでいた上に声掛けも有り、牡丹も先の一閃よりは余裕を持って躲せた。

悔しさの欠片もない表情で頷く雪音を見て、武蔵一刀流の技の数々は本命を出すまでもない相手と遊ぶ余技に過ぎなかったような悪寒がする。

「まずこれが普通の居合だね」

雪音は難なくやってしまうが、走る最中に淀みなく抜き打つのにどれだけの研鑽があつたらうか。

直感的な行動より複雑な分、一朝一夕では身につくまい。

縦横無尽に走れば足を使って体を開きを生むのはそれだけ困難だ。

骨盤の捻り、肩甲骨の駆動で刃渡り三尺の凧丸を巧妙に引き出す技術には脱帽する。

腕は緩く前兆を見抜くのは牡丹の目を以ってしても不可能であり、今も間合いの感覚だけで動いた。

満足げに微笑んだ雪音は牡丹がしっかりと無傷で離れるのを見ると、続いて秘していた夜霞を使った。

「次に、これがウチの秘伝の歩法の夜霞と併せた居合ね」

足運びを歩幅も速度も拍子も完全に不規則にしてを読ませない武蔵一刀流兵法に伝わる特殊歩法夜霞。

袴と重なりひらついてより視えにくく偽装する思惑通りに羽織が働く。

「……………」

初見となる不規則な歩調にさしもの牡丹も動揺した。

速さと起こりの無さは据え置きで、間合いを惑わす夜霞の脅威が加わっている。

動くのが早くても遅くても斬られる。

二重の幕が膝の動きを完全に隠してしまうのが非常にいやらしく、

発展途上のこれでさえ、今日の参加者は誰も居合の間合いと拍子を読み切れず斬られただろう。

滑らかな頬から顎に冷や汗を垂らした牡丹だが、彼女もさる者、膝から脱力し身を伏せ真横に身を投げ出して髪を一房だけ犠牲に見事避けた。

死から逃れた牡丹を横目に雪音は駆け抜ける。

「やるねえ。ここからが大事だからよく見とくんだけ。お次が俺のオリジナル技だ」

お楽しみクライマックスだ。

雪音は奮戦に期待した。

懇切丁寧に予告してやるのは、あわよくば全てを凌いで貰いたい一心からだ。

左右に軽くステップを踏み、蠱惑的な笑みでまた夜霞を発動した。

始まる。

何かが。

立ち上がり身構えた牡丹は心の中で一足の間合いに入られるまでを数えた。

活人剣を極めつつある牡丹の剣術に対する嗅覚は凄まじく、たった二度目の夜霞から速度の平均値を弾き出した。

間合いまで四歩。

三歩。

二歩。

そして、虚を突かれた。

届く筈の無い遠間で抜かれた剣がぐんと伸びる。

これは錯覚ではない。

実際に間合いの拡がりが伴っている。

対応が遅れ後退や上体だけでは避け切れない。

背筋を縮めてのけぞる。

足りない。

腰から後ろに全身を倒す。

まだ足りない。

溜めていた脚で左へ蹴る。

最早斜め後方に頭をぶつけようと狂を発したような体勢であった。ここまでしても、凧丸は冷たくさらりと首筋をなぞったのを牡丹は感じた。

斬られた、そう思うと同時に手足を振り上げる反動で器用に立て直し足から着地する。

喉に左手をやると薄皮が裂かれ少量の出血があった。

妙なる秘剣を躲せたのは、沢山の蛍光灯の一つが刀身に反射した幸運を見逃さずにいたからだ。

暗夜の路上で小さな街灯だけを頼りに立ち合っていれば、首が飛んでいたやも知れない。

これぞ我流秘剣、渚。

居合を得意とする雪音が間合いを見切られることを防ぐ目的で創り上げた剣技。

手順は極単純明快。

まずは夜霞で幻惑しつつ先を取る。

指は柄と鏢に絡める程度にして一切の力みを捨てる。

次に、居合を発動し腕が伸び切る刹那、肩、肘、手首の関節を外し、柄を手の中で滑らせて間合いを一尺半伸ばす。

柄頭に向けて太くなる薩摩拵を愛用するのは、すっぱ抜けないよう先端で握りを止めるためだ。

剣は体幹のうねりの連動で動かすので腕力は不要。

それでいて速度は落とさずに放つ。

巧みではあるが、ただそれだけ。

居合の仕上がりと先天的な関節の緩さに由来する妙技だが、必勝の絡繰りと呼べる魔剣の神秘は見えない。

それもその筈。

まだこの時点では、何も起きていないのだ。

「あはははっ、避けた！ やっぱりすげえよー！」

虎の子が不発に終わって悔しがるところか、喜色満面でその場で小躍りした。

恐れこそ無かれども、牡丹は困惑の極みにあった。

何度驚かされたら良いのだろうか。

とても無邪気に喜んでいる。

却ってその態度が怪しい。

奥の手をやり過ぎした。

決定打を仕損じれば普通は余裕を失くし狼狽えるものだ。

致命傷でないと知った牡丹は喉から手を離し、油断無く正眼に構えた。

反撃の隙など無いのは百も承知。

しかし、構えるしかない。

雪音に敵わないとしても、座して死を待つつもりは一片もなかった。

一太刀浴びせられるか否か。

判らずともまずは剣を出す。

活人剣か殺人剣を問わず、それが剣客の生き様なのだ。

一頻り飛び跳ねて落ち着いた雪音は、気を鎮めた牡丹が改めてぞつとする事を口にする。

「この組合わせに名前を付けたんだ。あり得ないけどあり得る《魔劍》ってね」

それは、夜霞から始まる。

「これが本当の渚——《魔劍》　渚《だよ》」

一つ一つはただ高度な技。

全てが合わさり、真価は発揮される。

次に何をするか丁寧に教えていた雪音が口を鎖した時、凡俗な剣技の渚は真なる姿の《魔劍》　渚《へと羽化した。

傍目には矢鱈と速い居合でしかないところだ。

対峙してみれば途端に事情が変わる。

「……………これは……………!?!」

何だこれは。

有り得ない。

しかし断じてまやかしではない怪異に遭遇して牡丹は言葉を失った。

どの機にも避けられない。

反撃もしてはいけない。

奇しくもと云うべきか、やはりと云うべきか、牡丹もまた数々の敗者と同じく戦慄と困惑を顔に滲ませた。

練達の牡丹をして、打つ手が無かったのだ。

逆転の発想で編まれたる《魔剣 渚》。

そも、並の剣技を超越した常ならざる魔剣とは。

その定義とは。

雪音が勝手に定めた条件では、それは必殺。

発動すれば如何なる劣勢からでも敵を死に至らしめる、文字通りの必ず殺す技必殺技。

人は斬れば死ぬ。

しかしどうやって当てるかに人は苦心する。

漫然と居合を打ても当たり前のように躲され後の先を食らう。

ならば必ず当たる状況にしてしまえば良い。

どうして当たらない。

読まれるからだ。

見切られるからだ。

そこで雪音は考えの前提をひっくり返した。

同じ動作から異なる剣を放ったならば防げまいし躲せまいと。

思い立った雪音は居合を磨き抜き、区別の鍵となる起こりを徹底して消した。

無ければ焦れた相手は山勘で動くしかない。

読むことも出来ない。

見切る事も出来ない。

居合が見えれば死。

居合が見えても夜霞が見えれば死。

よしんば夜霞を見切ってもただの居合と勘違いしては手前から翔ぶ渚で死ぬ。

渚と山を張って尚早に動けば、雪音が後の先の居合を打つ。夜霞と神速のまま放たれる渚が奏でる究極の後出しジャンケンで相手を追い詰めるシステムこそが魔剣の正体。

つまりは相手が行動を選択するまで不確定の剣。

まるで潮の干潮に左右されて不確かに揺蕩う波打ち際。

向き合った者だけが渚の名の由来となった術理を理解する。

されど、殺意に溢れる理合を知った時にはもう詰んでいる。

剣速と技巧で雪音より大きく勝らない限り、先手を許した段で敗北は確定してしまう。

何が来るか判らぬ不可視の剣。

見えざる故に必殺。

種を見破られて尚も必殺。

恐るべき定理に織られた殺意の粹。

絶命必至の太刀がその身に訪れて初めて威力を知る。

この二段機構が雪音の無敵を支える《魔剣 渚》の全貌だった。

「……………くふ……………ふはっ！ あはははははははははは！！！」

牡丹は木の葉のように空を舞い、砂塵を蹴散らして着地した。

雪音は今日一番の笑い方をした。

そんな逃げ方があったとは予想だにできなかった。

筋骨逞しく体重の重いむくつけき男ばかり斬っていたせいか。

結論から言うと牡丹は《魔剣 渚》を凌いだ。

見えなかった。

思いつかなかった。

だが、牡丹は為し得る最善手を尽くした。

躲せずとも卓越した鋭敏さで、剣が迫る左側に腰から外した鞘と剣を盾にしたのだ。

命の代償に鞘は両断され剣越しに強かに打たれて腕を痺れさせたが、凌ぎきった。

「……………はっ……………はっ……………はっ……………私はまだ、生きてるわよ……………！」

過去最大の窮地を生き延びた。

遅れ馳せながらその実感が牡丹の胸に押し寄せた。

心臓は暴れ、震えがこみ上げる。
女の身の軽さが命を救ったのだ。

いくら強がっても、生き延びはしたと同時に勝てないと証明してしまつたようなものだ。

これで終わるものか。

終わらない。

なにせ雪音は汗もかかず涼やかにしており、《魔劍 渚》を何度でも使える。

渚が来るか居合が来るか、二つに一つの賭けにたまたま勝つただけで、まだ何も終わってはいないのだ。

しかも次は鞘を盾に出来ない。

いよいよ牡丹は進退窮まつた。

PART 11

出義牡丹は絶望の無限連鎖、《魔剣 渚》の悪夢に墜ちた。
進めば斬られる。

下がれば斬られる。

抗えば斬られる。

仕掛ければ斬られる。

醒めない悪夢は彼女からあらゆる自由を奪った。

「何なのよこれはっ!!?」

「はは、楽しんでくれてるか? もちろん楽しいよなあ!? とうにか俺をぶっ飛ばせるように脳みそブン回してるんだからさあ!」

雪音は自分を天才だと思つたことは一度たりともなかった。

物心ついた時から逆島獅子吼という厚い壁に当たり、超えるまでに二十年近くもかかつて驕れるほど自信家ではない。

今があるのはただ愚直に努力し、何十万時間と剣に向き合ってきた結果でしかない。

眼前の才能と比べれば平凡も平凡。

奇々怪々の渚に初見から対応した牡丹の方が遥かに凄まじい。

良く言つて秀才止まり。

だから工夫を凝らして理詰めで考えに考えた。

天才を倒す方法を。

決して逃れられぬ循環の網を。

見開き過ぎて眼を血走らせた牡丹は泡を食って利き手と逆側へ逃がれたが、雪音はそんな凡策を想定しない間抜けではない。

「それは甘いよねえ」

鞘を返して左手で抜く異形の居合が訪れただけだ。

間合いは当然雪音が広い。

速さも上だ。

反応も鋭い。

もう何も出来ない。

何もさせてやらない。

冷徹な魔剣の機構は全てを潰す。

まだ動く足を使って左右に揺さぶりをかけるも、逆に夜霞に翻弄されてまた一撃を浴びる。

受けを砕くのも刃毀れを許容すれば容易いが、それでは楽しくない。

どこまで興が乗っても冷静に剣を操る雪音は凧丸を労る。

結果的に寸止めか浅い傷で済んでいるものの、力任せに叩き斬ろうと決めていれば二度目の発動で死んでいる。

凧丸は昨今の流行りでもあるぶつけ合うのを前提とした剛刀ながら鏢迫り合いを拒んでいた。

高みを目指す鍛錬でもあるし、大事な形見を壊したくないがためでもある。

今宵に抱えた感情が殺意であるなら、もつと居合に向いたもう一振りの得物を持ち出ている。

それらほんの気紛れで牡丹は生き延びていた。

事実として正面からでは勝てない。

事実を認めて諦めるのではなく、頭を切り替えた。

その余裕か油断の態度の中に光明が見える筈。

逃げの一手に専念して隙を窺う。

「まだよ、まだ私は負けてない！」

いつか勝機が訪れると言い聞かせる為の誤魔化しだとしても。

何度でも立ち向かう凛々しさ美しさは胸を打ち、鋼の矜持の前に立ち塞がる《魔剣》は更に冴え渡った。

男を知らぬ柔肌は玉鋼の冷たさに犯される。

肩口に浅く剣が入り肌を斬り裂いて白い胴着の袖を朱く染めてゆく。

痛みは判断力を奪い体力を削る。

不意急襲的に凧丸の腹で足腰を打ち据え、斬らずに内部の筋肉にも痛打を食らわせる。

鋭く鈍く悶絶ものの痛みを噛み殺し倒れるのを拒否した。

頬を殴られて口の中が切れていたのか舌の裏に溜まった血を吐き

目をかつ開いた。

まだ闘志は健在であつた。

その強く瞬く眼光が雪音を喜ばせる。

「そうだ！ 戦え出義牡丹！ もっと俺と戦ってくれ！」

超えてみる。

淡い希望を何度でも打ち砕いた雪音はおどろおどろしく吼えた。

苦痛と恥辱に挫けないよう心の底からの声援だ。

黒曜の瞳を爛々と輝かせるその胸中には悪意など欠片程も存在しない。

ただ頑張つて欲しかった。

新たなる地平へ到達するに不可欠な相手だと思えばこそ、厳しく接し大切にするものだ。

大切の方向性が一般より乖離しているが、雪音なりに精一杯の応援だつた。

牡丹は朦朧とした意識の中、ぴたりと剣を構える。

中々出来ない潔さはしかし虚勢だ。

幾多の敵意を浴びてきた雪音はその手の意思に鋭敏になっている。

傷と消耗を精神力で克服しても、剣がより鋭く働くことは無い。

小説とは違う。

ゆつたりと好き勝手に打ち込める己と満身創痕の牡丹では土壇場の逆転は起こり得ない。

天才と言えどもその摂理からは離れられない。

力量も計測し終えた。

防御や基礎に凄まじく偏つた指導を受けたと見え、肝心の決め手が全くと言っていい程に欠落している。

下らない流派のぬるま湯に浸つてさえいなければ、もっとずっと優れた剣士であつたらうに。

活人剣は眠れる獅子を眠らせたまま飼ひ殺しにした。

剣の道への冒瀆だ。

殺生を禁じて空前の才能を腐らせた神納流に恨みを募らせ、《魔剣渚》はまた始まる。

牡丹は傷を増やすも更に数合を耐えた。
受けがやや単調になっている。

限界が近いのだろう。

つまらなさと共に少しの寂しさがある不思議な感情が湧き起こつた。

斬りたいが殺したくない。

こんな切ない気持ちは生まれて初めてだ。

牡丹はまだ二十歳そこそこを見た。

才能を鑑みれば、正しく鍛錬を続けていれば必ず伸びる。

今だけでもどんどん良くなっている。

もつと見たい。

さらに全力をぶつけたら死んでしまうだろうか。

それは嫌だった。

「まだやれる？ 死なない？」

「馬鹿にしないで！ 私だって負けられないのよ！」

「違う。本当にそう思ってるんだよ俺は」

なんだか胸が苦しくなった。

複雑な真心の伝わらなさに珍しく感傷的になって物憂げに翳った顔をした。

人生最高の好敵手と出逢えた幸福の絶頂にあつた雪音は打って変わって哀しみを覚えていた。

人知の理を超えた天才がそう言うなら凡人は信じるしかない。

蠟の翼で空を翔ぶ英雄が堕ちるか否か予想は凡人の手に余る。

「じゃあ、行くよ……」

未だ正眼に構えた誇りに敬意を払い、不要とすら思われる夜霞から入る。

牡丹の深奥に眠る才覚を信じて鞘走るは真つ直ぐに首だけを狙つた最速の居合。

動作に入れば十分の一秒で喉を裂く。

これが《魔剣 渚》の最大出力。

カメラ映像では腰から柄が消えたと錯覚する速さで居合が到達す

る間際、牡丹の瞳がギリりと燃えた。

剣先を落とし、手指を狙った突き。

居合より移動距離の短い切先が手元に届くが早い必然。

極めて精緻な制御に操られた神納流合戦兵法の秘伝。

活人剣の括りから外れる殺し技は今の今まで使うのを躊躇われた。

刺突は殺傷力が高過ぎるのだ。

誤って臓器や動脈を傷つければ容易に命を奪ってしまう。

その上で、鉄壁の魔剣理論が一門の禁忌に触れさせた。

だが手応えはなし。

居合は止まれど骨肉は断てず。

剣の動向や手首の推移から握りを狙っていると察した雪音は伸ばした肘を引き戻し、これを鏢の右上面の刻印に絡めて受けていた。

上から抑えつけられる不利な体勢にも負けず脇を閉じた腰からの踏ん張りで強引にかち上げる。

拇指球で地面を踏みしめた。

「があ、あっー！」

相当に筋肉質な事を含めても六十キロほどしか無い牡丹の身体は浮き上がりふらついた。

上半身と下半身の連携を失い立ち止まった剣をすかさず巻き上げる。

余波で弾かれた剣は手から抜け、床へと転がり落ちた。

突き技を除いたあらゆる攻撃を跳ね除ける筈だった乾坤一擲の秘技は不完全だった。

これで万策尽きたか牡丹は疲労に屈して跪く。

一矢報いる試みも相手が雪音でなければ指を落として形勢を逆転の王手になり得た。

頗る天才性の証明だ。

しかし。

たらればを悔いる愚かさは語るまでもない。

興奮に飲まれない精神。

敗死も恐れない胆力。

負け筋を潰していく戦術。

戦術を実行するに足る技術。

死合の結末を決めるのは剣の操り方だけではない。

多くの面で優位に立った雪音は勝つべくして勝つたのだ。

それも無傷のまま。

「こっちは必死こいて寝ないで悩んだつてのにさ。とんでもねえよ、ほんと」

爽やかな後味を残して興奮が醒めていき、脳内麻薬の分泌量が減るのを自覚した。

呆然としてがら空きの首を凧丸でゆっくりなぞる。

額から足まで汗を湛えた牡丹の肌にもまた傷が入り、死の幻想を見せた。

殺しはしない。

この女剣士の才能に魅せられて、摘み取るのが勿体なくて、どうしても殺せなかった。

「情けを、かけるつていうの……？」

「好きに思えば？ 勝った俺がどうしようが俺の勝手だろ？」

血脂や埃を袖と懐紙でよく拭つて鞆に納めた。

これにて全ての死合が終わった。

やはりと云うのか、最後に立っていたのは雪音だった。

優勝そのものはどうでもいい。

最優が証明されただけの事。

暗転したモニターの横に立つ進行役に向き直つて手を出す。

「はい終わった終わった。早く賞金を頂戴ね」

「なんだと？」

「だってほら、もう俺は負けようがないし勝ちでいいんじゃないかなあつて」

「さつきは藤間を血祭りにしたと思つたら今度はなんだ。優勢だからって戯言を抜かすな。見る、剣を拾った。とつとと殺せ」

先の残酷な振る舞いから血も涙も無い悪党とでも思っているのか、けしかけようと声を荒げる。

とんだ勘違いだ。

剣に不誠実ならば殺戮対象になるが牡丹はその真逆だ。

しかも伸び代の塊と来れば後ろから刺されるくらいは幾らでも許そう。

そもそも弱った好敵手に無益な追い打ちをかけて何が楽しいのか分からない。

「やなことたねつまんねえ。あんたには判らないだろうけどこいつの勝ち目は百に一つも無い。そういう風になってるんだよ。信じられないならそつちに訊けば？」

護衛の男は佇まいからして非常に優れた剣士だ。

体格は太く雄々しい。

上背は雪音を越している。

体脂肪は少なく張り詰めた肉体に相応の腕前を醸している。

苦り切った顔をしているので《魔剣》の構造のいやらしさを理解したのだろうと第三者に意見を言わせた。

「やるだけ無駄だ。勝敗は見えた」

「……糞つたれが。これだからお前らは使い難いんだ。上と現場に挟まれるこつちの身にもなってみろ」

中間管理職の悲哀に悪態をついてどこかに電話を掛け、神妙な顔で短く何かを話した。

通話を切って部下に指示を出していくと細い通路から大型キャリーケースが転がされてきた。

それは雪音の前で停まり、寝かして開かれると札束がぎつしり詰まっていた。

「賞金だ。入れ物はこつちでサービスしてやるから自分で持って帰れ」

「ん？　なんか多くない？」

ふとその中身に違和感を覚えた。

一億円であれば帯付きの束が百本だが、これはどう見てもその倍程ある。

有り難いが只より高いものはない。

「素直に受け取っておけ。ボスはお前の腕と容赦の無さが気に入ったんだと」

剣闘士を見世物にするような娯楽でもあったらしい。

貰えるものは貰おうと受け取ろうとするが、手を離してくれない。「お前が幾ら剣狂いの阿呆でもこの金を受け取る意味は分かるな？」

その内に伝言役が仕事の話をしに行く。食うには困らん割の良い仕事だ」

「どうせそんなことだろうと思つたよ。俺は素人を斬るのとかボデイガードはやらないよ？ 時間の無駄だ」

誰彼構わず噛みつく無鉄砲な奔放さが気に入らないのか護衛役が小さく鼻を鳴らす。

「様子を観てれば判る。精々お前向きの内容を宛てがってやる」

「そりやどうも」

組織の妨げとなる誰かを斬らせると暗示したので笑顔で礼を言う。

武器を持たない一般人を襲うのは突っぱねるが強敵と戦えるなら素晴らしい仕事だ。

雇い主が誰であれ。

今夜のような楽しい夜が増える。

振り返えると死線を共有した女は呪わんばかりの暗い目をしていた。

「今日はここまでだよ」

「……必ず倒す……必ず……！」

言葉は届いてはいないだろう。

きつく歯を食い縛ったから唇は赤い雫が流れている。

粉碎された矜持と道場の破綻の二重苦に板挟みにされて苛立っているのか、今日一番の強い感情、即ち敵意を前面に押し出している。

薄ら寒い妖艶さを雪音は覚えた。

目が善い。

しよぼくれた負け犬に甘んじないその目が。

怯えではなく執念がある今にも噛みつきそうな顔だ。

人は逆境を味わえば大きく成長する。

もつともつと矜持を食い荒らして心の奥底まで脅かしてやらなくては。

「近くの河原で稽古してるから怪我を治してからおいで。なんで負けたか教えてあげるし勝てたら残ってる金は全部くれてやる。リベンジマツチは何時でも歓迎するよ」

歪んだ親切心から漏れ出た笑顔で語りかける。

「楽しみにしてるよ」

名残惜しくも別れを告げ、会場の端の賭場で配当金の紙幣をゴツゴツ回収してキャリアケースに押し込む。

もう用無しとなったので三十キロ近い荷物をえっちらおっちら転がし闇市を歩く。

道中に金狙いの間抜けが徒党を組んで奪いに来た。

集団で囲んで袋叩きにすれば隙を突けると考えたのだろうか甘すぎる。

管め過ぎだ。

全局面を夜霞で繋げば隙など無い。

楽な展開ばかりで十二分に余力のある雪音の前に残らず凧丸の錆となった。

「姉さん、喜んでくれるかなあ」

外縁部にて深夜の時間帯に営業する怪しい肉屋で買ったコロツケを頬張りながらキャリアケースをゴッ機嫌で引いて帰るのだった。

PART 12

四半分の月の下、週末の夜であっても一切の喧騒を失ったままの真つ暗な駅前を雪音は抜ける。

治安の劣悪化によって日本の安全神話は崩壊し、夜間の外出は非常な危険を伴うものとなった。

特に最終電車も過ぎた後は破落戸ごろつき、人斬り、犯罪組織が跋扈する時間だ。

暗殺や逆撃に遭った前例から警察すら少人数では動かず、もしも巡回をするなら銃器で武装して隊伍を組んで行う。

交番も撤廃され、そんな具合だ。

公園の水道で振り返り血を流した髪は夜更けのぬるい風に小一時間吹かれてやっと乾いた。

顔から下はどうにもならず血腥いのは相変わらずで、凶らずも人払いの効能になっている。

帰路の足取りはとても軽い。

抱え込んでいた欲求を解消した興奮を反芻して不気味な独り笑いを浮かべるほどだ。

それに、夜鹿に養われて小遣いを貰っていた自分が初めて金を稼いだ。

大好きな姉にやっとなつ恩返しができる喜びと安心が快と楽の感情を齎す。

これは一種の保身なのだ。

今でこそ夜鹿から可愛がって貰っている。

しかし来月は？

来年はどうだ？

飽きられたり愛想をつかされたりはいらないか。

雪音は彼女が大好きで身内でもあるが、甘え過ぎてはいけないと弁えている。

過剰な我儘は言わない。

嘘もつかない。

殺人者を取り締まるべき夜鹿が温情で保護してくれているのだから、出来るだけ不興を買わず、気に入って貰わなければならぬ。

夜鹿の性欲や嗜好を十全に満たし、己には分からぬ仕事の疲れを共寝や按摩で癒して好意を維持する努力はこの約三年間一日も欠かさなかった。

籬の外れた奔放さに見切りをつけられ、爛れた蜜月に終わりを告げられたとしよう。

雪音はいよいよ現し世に未練を失くして悍ましい凶行に走るだろう。

くたばるその日まで誰も彼もを斬って斬って斬りまくり、目まぐるしき最期に自らの腹を斬る。

紛うことなき狂人の理。

無論好んでそうはなりたくはない。

大好きな姉とずっと暮らしていたい。

だからそうはならないように努力している。

養われるだけの紐男に見えて、その洞察力で機微を嗅ぎ分けて機嫌を取り、捨てられないよう必死に捧げる側の男なのだ。

学も地位も無く、心すら欠陥品だ。

有るのは体と剣のみ。

他には何も判らない。

それは自覚がある。

夜鹿が働くのは生活費を得るためであり、その手伝いをしたいと、情緒が拙くとも僅かな知恵で漠然と考えていた。

逆島家は筧家の分家なれど両家はそこそこ資産家の家系で質素に暮らしていた事もあり不自由なく生きていけた。

性分からしても勤め人をして稼ぐのは逆立ちしても不可能な己には、仕事の苦労は想像に余る。

朝から外に働きに出てはやや疲れた顔で晩に戻りたつきを立てる夜鹿を労りたくもあつた。

降って湧いた一攫千金の好機を夜鹿には無用の長物であつた剣で探し当てて勝ち取つた。

人を斬って得たが合意の上であり金は金だ。
しかも今後も継続して金を得る目処がついたとなれば、これでもう世話になるだけのお荷物ではない。

存在価値を主張できる。

追い出されまいと安心して側に居られる。

無知故に無邪気にそう信じて喜んでいた。

無職の人間が大金を急に持ち帰ったらどうなるか、社会経験が欠如した雪音は全く知らなかった。

そうこうして健脚で歩く事約三時間。

誰にも会わずマンションまで帰って来た。

腕時計はおろか携帯電話も持っていないので時刻は不明だが朝も近いので夜鹿はもう寝ているだろう。

起きるまで居間で風丸の手入れでもしようか。

いつだったか強制的に持たされた合鍵でそっと解錠する。

忍び足で入ろうとして、薄暗い玄関に浮かび上がる白い脚が目に残る。

夜鹿だ。

明かりも点けずに土間に脚を投げ出して俯き、寝間着で玄関に座り込んでいた。

扉の開く気配で顔を上げる。

「姉……さん……？」

「雪音……!？」

塞ぎ込んでいた表情を明るく一変させて飛び起きると雪音の背中に腕を回して固く抱く。

「馬鹿馬鹿馬鹿！……こんな時間までどこほつつき歩いてたのよ！」

胸板に顔を押し付けて思うままに罵倒した。

取り乱す夜鹿に雪音はひたすら困惑する。

「待ってたの？ 遅くなるって言ったよね？」

「限度があるわよ！ 心配したじゃない！」

いつもは日付が変わった頃にはけろりと戻って来た。

それがこんなに遅くまで帰って来ない。

怪我をしたのだろうか。
命を落としたのだろうか。

それとも自分との暮らしに飽いて出て行ってしまったのだろうか。
猫が死期を悟ると姿を消すように、幾重にも愛した男がどこかに消えてしまったのではないかと気が気でなく。

時間の経過と共に悪い想像が胸を埋め、気が付けばさめざめと涙していた。

「怪我してない？ どこも痛くない？」

体から血の臭いを感じて全身を弄る。

我が子の身を案じる母のように。

「俺は怪我なんてしてないよ。それより見てよこれ！ いっぱい稼いできたんだ！」

「いいからよく顔を見せて！」

褒められたくて疼いていた雪音をぴしゃりと黙らせ、両手で頬を挟んで顔の左右を確認する。

暗がりの中で髪も触って出血を探した。

尋常ならざる剣幕の夜鹿の頬にマンシヨンの非常灯で涙の跡を見て、雪音も能天気な笑顔を段々と曇らせる。

何か重大な間違いを犯したと遅巻きながら察したのだ。

おずおずとキャリーケースを引き込んで廊下の照明を点けると、やはり涙の跡は見間違えではなかった。

「……嬉しくなかった？」

「頑張ってくれたんでしよう。でもお金よりもっと大事なものも有るのよ」

傷一つないと分かって気が抜けた夜鹿に今度は恐れが押し寄せた。

実力の差や不敗の理合など夜鹿には知り得ない。

命のやりとりをして、危なくない事などあろうか。

紙一重で勝利を拾っていて、いつ落ちるとも知れない綱渡りを好んでいるようにしか見えなからう。

「あなたが無事でいてくれたらそれでいいの。雪音が帰って来ないか

と思つたら、私は……」

雪音と再開したての頃は戸惑いや義務感もあつたが、今となつては失う方が怖かつた。

異常性は理解して受け入れられても、失う恐怖は耐え難い。

口を噤んで肩を震わせた夜鹿を黙って抱き寄せればじわりと湿つた温もりが首に染みる。

女慣れした優男なら巧みにあやして機嫌を取るものだが、生憎とそんな話術は手元に無く、その場凌ぎの世辞を使うのも趣味ではない。

こういう時、雪音は愚直に謝る。

「……ごめんなさい」

「駄目、許さない」

「どうしたら許してくれる?」

「昔みたいに呼んで」

「夜鹿お姉ちゃん……どう?」

「……もつと」

「お願いだから許して。俺、お姉ちゃんに嫌われたくない……」

哀しそうにする雪音の哀愁はお姉ちゃん呼びと相まって高い破壊力と中毒性があつた。

珍しいしおらしさと体を抱く力強さに、脳の快樂中枢で電気信号が弾ける。

腰が痺れ、下腹部が甘く蕩ける。

夜鹿は禁断の泣き落としの快感を覚えた。

悪しき快感だと自戒する。

夜鹿とて明るさが魅力の一つにある雪音を進んで虐めたくはない。

だがこれはお仕置きなのだ。

反省するまで懲罰は与えなくてはいけない。

本当に、仕方無くやっているのだ。

これ幸いと要求を通そうとは考えていない。

「許してほしかったら、お風呂で素直に洗われなさい」

「うん」

「綺麗になつたら、許可するまで一緒に横になつてる事。いい?」

「うん」

「それから……」

顎をに手をやり、まだまだ命じようと尖らす唇を口づけで塞ぐ。

雪音にはそんな命令は元から必要なかった。

「俺が悪かったよ。本当に反省してる。姉さんが嫌な事はもうしない。夜中は出歩かないし毎日一緒に寝るって約束する」

普段は理性的で毅然とした姉が酷く取り乱して泣いた。

きつと凄く嫌な思いをさせてしまったのだ。

どうして泣くのか自分には根本的には理解出来ないが、夜鹿を泣かした事には深い罪悪感を抱く。

夜鹿のように涙は出せず、ただ悔いた。

「……キスで誤魔化すなんて悪い子。どこの誰に習ったのかしら」

上手くあしらわれたと感じてむくれた夜鹿が羽織から脱がしている。

あなたにです、とは口が裂けても言えない雪音は黙って尻丸を腰から外して洗濯機に載せる。

愛刀には悪いが手入れは明日に回そうと決めた。

「大人しく洗われるのよ。怪我してないか、もう一度チェックするわ！」

剥かれた血だらけの服は洗濯籠に押し込まれ、脱衣所に連れ込まれると丸裸でまじまじと全身を探られた。

二人して頭を洗われる間も瘤も作ってないかと観察され、赤黒い水を頭から爪先まで濯ぎ出す。

暑いので湯船には浸からず上がったが体を拭いたりドライヤーで髪を乾かすのさえ自分ではやらせてもらえなかった。

男の一線として歯磨きだけは死守したがそれも真横で見られながらだ。

夜鹿による過保護が落ち着いたのは向き合う姿勢で寝具に入ってからになった。

家ではほとんど剣の話をしな。

これまで一貫してそうだ。

雪音の精神の根幹に関わる繊細な部分であり、夜鹿も安易に聞き出そうとはしなかった。

となると話題は手土産の大金となる。

出世街道を登りゆく夜鹿でも纏めて手にする機会を訪れない大金を雪音は持ち帰った。

その出処は当然気になる。

本職の警察官としても、その前の家族としてもだ。

「ざっと数えてで二億円も有ったけど、あれ、どこから盗んだりしてないわよね？」

「まさか。闇市で大会が有ったんだ。あのお金は優勝賞金だよ。あれだけあれば旅行にも行けるよね」

「出処が闇市なんてモロに真っ黒いお金じゃないの……嬉しいけど使えないわよ……」

「まねーろんだりんぐ？　つてのをしてあるから使っても大丈夫だってさ」

「あのね、急に仕事を辞めた挙げ句にお金の遣い方が荒くなったりしたら世間から怪しまれるのよ。だからなにかあつた時のために残しておきましょう」

あのお金は使えない。

暗に言わてしまった。

やっと褒めてもらえそうだと思えば、またしても期待は裏切られた。

心の中で振っていた尻尾が垂れる。

明かりを消した暗闇の中でも重ねた時が影の向こうの表情を読み取らせる。

今の夜鹿は困り顔をしていた。

「やつぱり……迷惑だった？」

「いいえ、私の為に頑張ってくれたのは嬉しいわ。それでも雪音と居られる時間はお金よりもっと大事なの」

金は幾ら有ってもいい。

しかしこうしているのが夜鹿の一番の幸せだ。

恋人繋ぎで捕まえた雪音の右手の甲に顔を擦り付ける。

「ごめんね、姉さん。俺がもつと賢かったらこんな苦労しなかったのに」

「ふふ、世話が焼ける子の方が愛着が湧くわ。どうしてかしらね……」
独りよがりな束縛を望む自己嫌悪が夜鹿の胸にちくりと刺さる。

それでもこの愛おしさには敵わない。

ずっと手の掛かる子で居て欲しいと願いながら雪音の頬を一撫でして目を閉じた。

抱き合うように寄り添い心臓の鼓動を聴かせると夜鹿の拍動が落ち着いていくのを肌で感じた。

安らいでくれている。

良かった。

もう怒っても悲しんでもいない。

いつもの優しく落ち着いた姉に戻っている。

雪音もそう安心して優しい匂いに包まれながら瞼を下ろした。

PART 13 デブイケイト・トウ・ユウ

夜鹿の仕事が休みで外出の用事も無く、二人が起床したのは昼前と
なった。

雪音は夜明け前にも習慣的な目覚めは訪れたが、まだ眠っていた姉
の横で何度か眠り直して彼女が起きる瞬間を見計らっていた。

整った顔は眠っていても美しく、目覚めた瞬間から引き締まる。

意識を覚醒させた夜鹿の腰に手を置いて目を合わせる。

「おはよう雪音」

夜鹿は雪音の頬に軽いキスをして昨日の温もりが幻でなかったと
確かめた。

寝癖のついた髪に手櫛を通して手触りを楽しむ。

つるりとした女顔で髭も生えてこないのに髪は太く体つきもしつ
かりしていたり、色々な場所に逞しさを感じられる男になった。

「おはよう姉さん。こんなに寝坊したの、初めてだ」

雪音は夜鹿を抱き締めて無形の幸福を味わいはにかんだ。

風邪をひいても剣を振っていたので朝稽古をすっぽかしたのは生
まれてこの方初めてだ。

初物で列挙すれば、性体験もキスも共寝もデートも夜鹿に捧げた。

姉さんにならこれからも全部をあげてもいい。

あげられる初めては、あと何が残ってるだろうか。

腕の中の腰を抱いて思う。

同じ血統の高い背に合わせて手足は長く、仕事着のパンツスーツが
似合って格好いい。

剣は学ばずとも徒手の体術は修めており、並の男を叩きのめせる四
肢は細過ぎない。

以前に鏡の前で胸に手を当てて難しい顔をしていたので、そこに何
かしらの劣等感を抱えているのだと雪音は思う。

深い感情は理解していなくとも長い付き合いでなんとなく空気が
見えるので、肌を合わせても手では触れない。

代わりに腰や臍の下辺りを撫でられると悦ぶのでそうしている。

頭半分の身長差も男女の情交には丁度いい。

「練習……したかった？」

「ううん。姉さんというって決めたから」

余計な身動きは取らずベッドの中でじっとしていたが剣を握るだけが鍛錬ではない。

昨日観た応酬で感心した技法を脳内で反芻したり戦ってみるのも有用だ。

あの《魔剣》もそうした検証を重ねて編み出した。

稽古の有無を抜きにしても、夜鹿とずっと触れ合っているのは苦ではなく、どうせならこの安息をもう少し楽しんでいたい。

細やかな望みを遮って、寝間着にしている甚平の内で腹の虫が鳴いた。

二人してくすりと笑う。

「お腹空いたわよね。まずはご飯にしましょうか」

並んで歯を磨き、台所に集まる。

夜鹿の料理を食べるだけだった雪音が台所に立っていたのだ。

上手く金も稼げない自分でも夜鹿のために何かをしたい。

そうだ、台所にはまだ初めてが有った。

願うまま自然と体が動いて、冷蔵庫を開けた夜鹿を後ろからふわりと抱き締める。

「悪戯しないの。すぐ作ってあげるから座ってニュースでも観てなさい」

「俺だけで観てもよく分かんないし、だったら姉さんと何かしてたくて……今日だけでもさ」

「んっ……！」

男に甲斐性を出される事ほど女冥利に尽きるものがあるだろうか。

いじらしく手伝いたがる雪音に黄色い悲鳴をあげて飛び跳ねたいほど感激するも、危うくこらえて姉の威厳は守られた。

「料理してみたいの？」

「姉さんと、したいんだ」

「はうっ……」

夜鹿は明後日に向けて目頭を押さえる。

これだから雪音が好きなのだ。

正直可愛くて仕方が無い。

この裏表の無い直情さにいつも絆されてしまう。

嫌味と無縁で。

素直で。

純粹で。

分かりやすい。

後ろめたさに濡れた夜鹿の心に一言一言が刺さっていく。

最初から沸点にあつた好感度は嘗てなく高まり爆発寸前。

そばにいるだけで良かったのに、固く屹立した言葉に突かれる快感

を得てはもう病みつきだ。

返事をするのにも二回の深呼吸を要した。

「……じゃあ、一緒に簡単なのからやっていきましよう」

「いいの？」

台所は女の戦場。

そこで足手まといになるただの殺人者が入り込むのは自己満足と

しか思っていない。

許しを得た雪音はあどけない笑顔を咲かせた。

片手間に味噌汁を作る夜鹿の頬も緩む。

雪音との共同作業。

夢のようだ。

白米と味噌汁の他に考えていた献立を全て切り捨て、雪音でも作れ

る目玉焼きを量産した。

焼き加減や卵の割り方を伝授してもお世辞にも上手くは作れな

かったが、性交とは別種の心躍る時間だった。

焼き上がると雪音は二枚の皿を用意した。

大きい皿とその脇の小さい皿に分けて載せる。

食卓に置いた山盛りご飯の井ぶりの横に大皿を並べた。

品揃えは白米と味噌汁と目玉焼きに漬物を少々。

簡素な朝食を並べ終わると向かい合わせで座る。

雪音の皿に載るのは全部型崩れした目玉焼きで、夜鹿の皿には綺麗なものだけ盛られていた。

何事も最初から成功ばかりとはいかないなりに、夜鹿には美味しい方を渡せたので雪音はこの出来上がりにもそこそこ満足していた。

ただ、夜鹿としてはいつでも食べられるものより、試行錯誤したと感じられる方を食べたかった。

いずれ上達してしまつたら、この目玉焼きはもう食べられなくなつてしまう。

今だけの味が欲しい。

「雪音、そつちのと交換して頂戴」

「ええ、やだよ。失敗作は姉こんなのさんに食べさせたくない」

「私が食べたいのよ。ほら、食べさせて？」

「仕方無いなあ。はい、あーんして」

箸で割つた目玉焼きを口に運ばれると堅焼きになつてざらつく黄身からはこれ以上無い蜜の味がした。

自分は果報者だ。

好いた人を餌付けして餌付けされて、紛れもない幸福の只中に居る。

それは至高の調味料だ。

「それ美味しくないでしょ？ 無理して食べないで」

「逆よ逆。毎日食べたいくらい美味しい」

「ほんと？ 大袈裟じゃない？」

「本当に美味しいわ。全部食べちゃおうかしら！」

「一人でこんなに食べたら体に毒だつて」

そう苦笑する雪音も安心していった。

喜んで貰えた。

頑張りを褒めて貰えた。

それも誰よりも大事な人に。

愛しきで爆発しそうになり、表情はいつもの笑顔でもテーブルの下では爪先を曲げ伸ばししていた。

「姉さんが作ってくれたこの味噌汁だつてすごく美味しいし、二人で

ゆっくり食べよ？」

何でもない昼前に、二人は何でもない目玉焼きを食べさせあつて笑い合った。

人生史上最高の朝食を食べ終わり、二人で洗い物をしてソファに並んだ。

左に雪音、右に夜鹿が座るいつもの形だ。

簡単に拭いただけで放置していたこがらしまる丸の手入れをするつもりだった。

刀身のみならず血が降り掛かった鏢や柄も手入れを怠れば傷んでしまうのだ。

ローテーブルに敷いた古新聞の上に手入れ道具を置き、刃を上に向けて鞘から抜く。

引つ掛からずに抜け、刃をじっと見つめて毀れを調べる。

実戦向けの造りをした凧丸はかなり頑丈なのだが、出義牡丹と戦った際には向こうの剣に当たっている。

無様に刃筋を乱してはいまいが、虫眼鏡まで出してよくよく観察した。

一通り見終わり、嬉しい事に微細な傷を除けばほぼ万全の状態だった。

血で固まりかけた目釘を抜き、手首を何度か叩いて振動で抜け出したなかし茎を見る。

普段は柄に包まれたここも、腹を挟るしょうま翔馬で相手を開きにしてたっぷり浴びた血が入り込んでいた。

はなはき鏹と鏢も外して細い刷毛で血糊の汚れを落としていく。

刀身は打ち粉を当ててから、前回塗った古い椿油を柔らかいティッシュペーパーで拭う。

油には塩分や水分から刃金を守る役目がある。

人体に含まれた塩気は腐食の原因にもなるのでしっかりと拭き取る。

刀身の汚れが落ちたら新しい椿油を染み込ませた布を滑らせて全体に薄く引いていく。

後は逆順で組み立てるのみ。

これで手入れは終わりだ。

心配していた研ぎもまだ不要そうだった。

「ふう……」

雪音は満足げに一息つく。

夜鹿は一部始終をじつと観ていた。

過去に手入れの様子は何回か目撃していたがここまで詳細に観察する機会は中々無く興味を引かれた。

血腥い闘争の残り滓を夜鹿の目に触れさせたくなかった雪音は意図して隠れて行う事が多かったのだ。

「綺麗ね。綺麗過ぎて怖いわ」

この洗練された殺しの道具は何人を果てさせたのか。

手入れが済むと妖しい白銀に命の痕跡は一片もない。

それなのに、染み付いた幾多の怨念がそうさせるのか、どこことなく血の香りがする。

夜鹿が職務中に帯びる拳銃の弾は見えないが、刀は死の形がはつきりと見える。

その差は大きい。

「そういう道具だし、親父のご先祖も使ってたらしいからそりゃあ、ね」

視線に畏怖の色があり、ばつが悪くなって言葉尻を濁す。

ついでにもう一振りの手入れやろうかと考えていたが、やはり取り

止めて道具を片付けた。

洗面所で油や鉄粉の着いた手を洗って直ぐに戻る。

腰を下ろしソファに寝転ぶと夜鹿の左太腿に頭を置いた。

「ねえ。録画したドラマを観終わるまで、こうしてていい？」

「いちいち訊かなくても好きにしているのに」

指を開いた右手を左肩の辺りに持つていくと、空いていた夜鹿の左手に絡めて掌を重ねる。

握り返す指がそのまま返事で良さそうだ。

顔を小脇に抱えられている体勢だ。

雪音は音を出さないよう小さく嗅ぐ。

嗅覚細胞が甘い香りを拾い、全身を包まれるような錯覚をさせてくれる。

弥勒の微笑で首を捻れば慎ましい胸の上に夜鹿と視線が交わる。

髪を手櫛で梳くと気持ち良さそうに目を細める雪音はまるで大きな赤子だった。

もし、雪音との子が産まれたらこんな風か。

うっかり想像すると夜鹿は腹が疼いた。

流石に欲望が過ぎる妄想で赤面しかけ、目を逸らして画面に集中しているふりをした。

観ているのは恋愛物。

優柔不断な男が献身的な女達に翻弄されるまま二股をかけ、なし崩しで破滅へ進んでいく筋書きだ。

どちらかと別れようとしてもそうはさせない、山あり谷ありが脚本の巧みさ。

職場と私生活の双方で二人の女と深い仲になり、しかし割り切れないまま二重生活の物語は続く。

「こいつ、自分で二股してるくせにめそめそしやがって、腹立つなあ。やるならやるで隠さないで堂々と構えてりやいいのに」

「大抵の男の人はナイーブで女々しいのよ。雪音みたいに強くも優しくもなれないの」

「俺は誰の前で姉さんが好きだって言っても恥ずかしくない。綺麗で優しくて、大事な姉さんだもん。笑う奴はぶん殴ってやる」

自分勝手に苦しむふりをする男役に苛ついた。

片手間の愛など有り得ない。

好きなら命を懸けられる筈だ。

生も魂も費やして死んでも惜しくない筈だ。

そうでないなら、思わせぶりな仕草で相手を振り回しているだけの屑だ。

命を燃やす剣客でもかなり極端な雪音の過激さに夜鹿は苦笑いだ。

物語が進行すると男も多少なりと成長したのか開き直ったのか、両

者との関係に前向きになり、今度は女同士で鉢合わせの展開になった所で録画していた分が終わった。

続きは今週の夜に放送される。

「なんだかんだで最後まで観ちゃった。ドラマってこんな感じなんだね」

「こういう息抜きも少しは面白いでしょう?」

「まだよくわからないなあ。早く続きを観ないと」

人物に感情移入出来ないのです、どうしてそんな事をするのかを考察するという点では興味はある。

完結まで視聴すれば何かしらは夜鹿との生活に生かせそうなので真剣だ。

「ぶっ、ちゃんとはまってるじゃない」

夜鹿は軽く吹き出す。

現代の娯楽に免疫がなく、作家の手管にあっさりと墜とされかけている雪音が妙に可愛かった。

PART 14

部屋の掃除や洗濯物を片付けてもまだ昼下がりに。

二連休はまだ序盤で、食材の買い出しは明日に回しても持つ。

持ち帰りの仕事も無い。

有り体に暇だった。

手持ち無沙汰にひとつ屋根の下、男女がすることと云えばそう多くはない。

体の方は膝枕している間から電源が入っている。

すぐに寝てしまった昨夜の分を取り戻したいが、歳上の自分から誘えば淫乱な女と喧伝するようで気恥ずかしく、夜鹿はソファでもじもじと躊躇っていた。

薄化粧の白い頬に朱が差した顔色で胸元や手先を行ったり来たりする視線を浴びて、雪音もははあ、と察知した。

室内でも持ち歩いていた凧丸は脇の壁に立てておく。

「姉さん」

脅かさないよう一声掛け、腰を曲げて夜鹿に口づける。

唇の弾力の中でついばむように付かず離れずを行き来し、しつとりた上唇を食み、下唇を軽く舐める。

止めに舌を淫靡に絡めると情欲の炎が大きく灯った。

どちらからともなくソファに倒れ込んで夢中で唇を食った後、息継ぎをする二人の唇の間に銀の橋が架かる。

都内のどこぞで押収品の拳銃が盗まれたのだと味気無い報道番組を流すテレビを切った。

「……しよ？」

正確に意図を汲んだ雪音の哀願は効果覿面。

堤が決壊した夜鹿は唇を求めた。

雪音の首を捕まえ、柔らかに挿し込まれる舌を情熱的に迎える。

カーテンは開いたままだが覗かれる心配のない高層階だ。

愛人の体を求める細腕は心置き無く甚平の紐を解き、逞しい指も寝間着のボタンを外していく。

その間も唇は繋がっている。

唾液の爆ぜる音と空調の音が荒い吐息で掻き消される。

「昨日の分もしたいから覚悟してね、姉さん」

不信任を与えた落ち度を精算する意味合いでも姉に恥をかかせない道化を選ぶ。

耳に流される熱っぽい声に夜鹿はぞくぞくと痺れた。

雪音が嗅覚に惹かれるように、夜鹿は聴覚と触覚に惹かれる。

体の方も長い付き合いだ。

性的嗜好の暴露こそ無かれどおおよそ理解している。

満更出鱈目でもない。

実際に雪音は牡丹との一戦の興奮が尾を引いてむらむらとしていた。

命を脅かす相手と向かい合えた余熱は瞑想に費やしてもまだ余る。

それを夜鹿への献身に昇華する。

簡単な事だ。

スポーツタイプの下着を剥ぎ取り投げ捨てる荒々しさとは正反対に、柔肌を撫でる愛撫は慈愛を湛える。

自分も下履きを脱いで互いに裸になり体温が溶ける快感を分かち合った。

舌を甘噛みしたり首や耳にも吸い付くと夜鹿はその都度息を漏らし腰を震わせて飲んでいた。

そろりそろり下へ指を走らせるとぬるりと濡れている。

連日の条件付けで雪音の味を覚えた夜鹿はすっかり欲しがりな体になってしまった。

受け入れる準備は万端といったところ。

いつもはこの辺りで夜鹿の中に分け入る前の装いを整えるものだが、腕を掴まれ僅かに体を離す試みすら阻止された。

「待って。今日は着けなくて平気な日だから……」

冷静で気丈な夜鹿はどこにも居ない。

ここに居るのは発情して瞳を潤ませ、愛人の肉体を求める女だ。

雪音はその手の対策は怠らない。

勢いで言ってやしないか。

子を妊んで起こる様々な変化を必ずしも考慮はしていないのではないか。

その迷いが夜鹿には伝わった。

「……もう焦らさないで」

百分の一ミリの隔たりすらもどかしいと訴える。

女が求めた。

ならば応えねば男が廃る。

今日に限っては野暮な悩みを捨てた。

「それじゃ、いくよ……夜鹿」

妖精のように儂い人へ、野獣のように雄々しく覆い被さる。

考えるべきは、満たし、悦ばせ、愉しませる事だけだ。

それが雪音が夜鹿に払える最たる対価。

自分を養う夜鹿を癒やす義務があると心得る雪音は好みの研究も熱心だ。

名前を呼んで後背位で抑えつけると内外の筋肉が収縮して歓喜の悲鳴を漏らすのは確認済み。

更に手の甲に手を重ねて後背位で組み敷き、腰を突き動かしてやると快感の閃電に悶える。

強く責めてばかりでは快感の渦ですぐに疲れてしまうので動きに緩急をつけるのも忘れない。

責め一辺倒ではないけない。

うなじに口づけをしたり、腰を止めて体を重ねて頬擦りをしたりに触れ合いも性感を優しく高める。

夜鹿は被虐嗜好だが、ただ無為に虐げるのは違う。

あくまで自分本位にならず丁寧に絶頂まで押し上げる。

臍の裏を小突いて腰から蕩けさせ、抗えない大きな波に乗せて連れて行くと、強い力で指を握り返して果てる。

「んっ………！ 雪………音………♡♡」

「俺も凄く、いいよっ……姉さん……くっ」

ぬらぬらと唾え込む生の粘膜の感覚は雪音にも強い刺激となる。

弾けてしまわないよう懸命に耐えて続け様に腰を使う。

快適な室温でもたつぷりの汗をかけた背中に舌を這わせ、肩甲骨から上へ舐める。

やがて互いに上り詰め、法悦の絶頂に至る。

二人の熱量はたった一度では収まらない。

ソファに突っ伏したまま腰を揺らして誘う彼女を何度も貫いて忘我の境へ駆けた。

次は趣向を変えて向かい合わせで膝に夜鹿が跨り密着する。

身長差が逆転する視点を得て今度は自分からキスを落とせるこの体位も夜鹿のお気に入りだ。

腹と下腿を擦り合わせ、胸板が乳房を押し返すと全身で愛しい人を感じられる。

「ん……ちゅ……」

後背位では啼かされるだけの口が心地よく繋がる。

腰を支える腕の太さに微睡む胎はらを何度もゆったり突き上げてぐずぐずに蕩かす。

「好き……ゆきね……んっ……♡」

甘く、それでいて不可逆の刺激がまた夜鹿を夢中で縋り付かせた。

血の繋がった親族である事も、本来は弟のような関係である事も、殺人者である事も忘れ去り、快樂に堕ちていく。

「俺も姉さんが好き。大好きだよ」

求められるのは嬉しい。

もっと求められたい。

雪音の中には単純で子供っぽい感情が大多数を占めている。

社会の禁忌など知った事ではない。

好きな人に好きと言ひ、行動で示すのが許されない規範など糞食らえだ。

上気した肩に落とした一つのキスを合図に動きを速める。

硝子細工を持ち上げる位に丁重に夜鹿を抱いて、背もたれと唇に挟まれた間で遅く小さく腰を突く。

子宮を押し上げられる緩やかな絶頂が幸福感を無限に生み出して

いった。

「んう……♡」

恋人たちの睦み合いは日が沈むまで続けられ、かれこれ千を超す情事にまた一枚ページが足された。

次なる転機は性交の間の小休憩。

「……ひよつとしてなんだけど、雪音は胸ってあんまり好きじゃない？」

「……どうしたの急に？」

汗みずくの体を起こしてテーブルから水を飲む雪音に、ソファ上で三角座りの夜鹿はタオルケットを胸元に引き上げて隠し問う。

普段ならこんな放言は絶対にしない。

真面目で常識人の仮面が言わせないが、快樂に魘うなされて朦朧としたままの夜鹿は思った事を何も考えず言ってしまった。

加えて今は寂しさと不安感に苛まれた直後。

浮世離れた雪音が不意に立ち去ってしまう恐怖はどこかでもまだ拭えないままだ。

懸念を払拭する確証が欲しい。

他の誰にも負けない強烈な繋がり。

意思を尊重して自由に生きさせたい想いと永久に自分の物とした独占欲がせめぎ合った末に性欲と融合し、歪んだ母性として発露する。

「だって、全然触って来ないし……私の胸は小さいから嫌い？ 嫌いでもちよつとだけ吸ってみない？」

「は、はあ？ あのさあ姉さん、俺達従兄弟だよ？ イキ過ぎて寝惚けてない？」

突然の提案に雪音は戸惑った。

性交の下準備の前戯として性器を舐めるのはまた違う。

胸を吸ってどうなる。

出ないのに何を吸えと。

雪音は雪音でかなり近い親族でもセックスは別にいいが、行為の中で胸にしゃぶりつくのは変態という貞操観がある。

中々に変態的だがそれでも一定の線引きはしている。
雪音の中ではセックスの目的は子作りか快楽を求めた性欲の解消だ。

授乳は母子の間で行われる行為なので、その他の血縁とするものではないと思っている。

雪音は生まれてから物心が付く前に母親を亡くした。

母親からの授乳にまつわる思い入れも、懐かしさに由来する渴望も無いので、夜鹿とそれに及ぶのはこそばゆい違和感しかない。

雪音には意味不明だ。

姉からの素っ頓狂な提案を大いなる混乱を受けて怪訝な眼で見た。

「やっぱり小さいおっぱいじゃ嫌よね……。今のは忘れて」

目を伏せてそっぽを向く。

拙い。

折角朝から良い雰囲気を持っていったのにまたやってしまった。

そも、好感度を下落させるのは避けたく、悲しませるなど以ての外。
泣かれるともうお手上げだ。

溺愛している夜鹿がこれだけで機嫌を損ねるのは有り得ないが、底無しに鈍感な雪音は一人で焦る。

「い、今のは驚いただけで全然嫌じゃないからあ！　そう言われたらしてみたくなくてきたなあ！」

「お世辞じゃない？」

「うん！　ほんとほんと！　姉さんの体で嫌いな場所なんて無いよ！」

機嫌を直して貰えるように、背中へ向けて全力で肯定した。

事実、想定外過ぎただけであって嫌ではないし、夜鹿がしたいと言
うなら断る選択肢は無い。

夜鹿は覚えたての泣き落としを早速悪用していた。

どうせ言ってしまった以上は飲み込めない。

ええい、ままよ、と。

毒を食らわば皿まで。

痛がるどころか悦んでいる。

本物だ。

平手打ちの痛みも快感に変換される倒錯性癖に半ば呆れ、なすがままにされる腹を括った。

これが一度きりで終わらず以降も前戯の一環に組み込まれるとは、今の雪音は知る由もなかった。

PART 15

昼は汗を流し、夕には好物の手作りカレーライスを食べ、一緒に風呂に浸かり、共寝をする。

最後にまたまぐわいを重ね仲睦まじく一日を終えて何の不満もない。

その筈だ。

だが、眠れない。

腹の底に渦巻く渴きはたった一両日で背中に気配を醸すほど膨れ上がった。

一度も剣を振らないまま眠りに就こうとする宿主を雪音の血は赦さない。

逆島雪音は徹頭徹尾剣の鬼なのだ。

暴れ足りない四肢がむずむずして眠れないのも已む無し。

心を空にして薄目を開け天井をじっと見ていた。

その様子に夜鹿は昔を思い出す。

小さい頃から雪音は不意に眠気が飛んでいってしまったりする。

雪音は細い胸郭に抱き締められた。

絹一枚纏わぬ心音を額で聴く。

互いに言葉は無い。

獅子吼との猛稽古の後で目が冴えて寝付けない夜はこうされていった。

うなじを撫でる手の小ささは逆立つ本能を宥める。

その嫺やかな温もりが、その香りが血のざわめきを忘れさせ、深い瞑想に似た境地へ誘う。

すかさず意識を断つ事に成功した。

遡る事二十三年と五ヶ月。

都内区外に居を構える逆島家に雪音は生まれた。

母の白雪は雪音が二歳に成る前に病でこの世を去った。

父の獅子吼は武蔵一刀流兵法の道場で師範を務める男で親心こそ有れど子育ては不器用の極み。

妻に先立たれて落ち込む獅子吼を見かねた笈家当主夫妻が食事から下の世話まで陰に日向に手を貸した。

特に、笈家の娘の夜鹿は弟が出来たと喜び高々六歳で雪音の面倒を良く見た。

逆島家と笈家の降嫁と婿入りの多さから血縁も濃く、両家の繋がりは兄弟並に非常に親密であったのが幸いした。

父から頑健な体質を受け継いだ雪音はすすくと育ち、気が付けば他の門下生に混ざって獅子吼の薫陶を受けていた。

幼い夜鹿からの言いつけも守る聞き分けの良い賢い子供ではあったが、稽古への熱心さは常軌を逸していた。

獅子吼が出かければ、手足の皮が擦り切れて流血し、小さな胴着が紅くなつて兄弟子から止められるまで収まらず、手当をする夜鹿を泣かせていた。

母親を持たない故か、その異常性もまた陰ながら育まれていったのである。

義務教育を受けても同年代の子供等に交わろうとはせず、学問や異性にも興味を持たなかった。

休校日は日がな一日道場に居座り、食卓でも学級の話題より父の背を追って剣の探究に熱を上げた。

そしてある日、手合わせで兄弟子の腕骨を叩き割った。

その時の雪音に反省の色は無く、弱かったから当然と言い放ち冷たい目をしていた。

才能に恵まれた反面、怒や哀という感情が欠落しているのだろうか、獅子吼をして震撼する。

狂気を確信したが、流派の奥義である夜霞を十歳にして修めた雪音の自己進化はもう止めようが無かった。

息子がいつか悪鬼の悪名を被るならばいつそと、凧丸に手を伸ばしかけた夜もある。

しかしそれは無理だった。

瞳の色や顔貌が妻にそっくりの息子を、あどけない顔で夜鹿に添い寝される忘れ形見を、愛妻家が斬れようか。

懊悩は決意の呼び水となりて獅子吼を変えた。

誰にも見られない夜更けに仏壇の遺影に泣いて詫びた翌日、獅子吼は人が変わったように厳しく指導を始めた。

命とは剣に骨肉を喰わせて磨く砥石。

無為に散らさぬよう強く。

どこまでも強く。

剣に生きる親子の仲は良好で、雪音は遥かな先達の獅子吼に常に敬意を払った。

時に年相応の無邪気さで夜鹿とじゃれ合う様は獅子吼の岐路をより茨の道にする。

妻との一粒胤を、愛の証明を死なせぬよう、すっかり狂った獅子吼は雪音へ心を鬼にして血塗られた伝承を受け継がせた。

全ては息子を生かさんが為に。

時は過ぎて雪音の二十歳の誕生月。

父子の真剣勝負に敗れた獅子吼は斃れ、満を持して剣兇が鎖から放たれた。

その後は大学卒業と共に一人暮らしをしていた夜鹿を頼って生きてきた。

父親が斬殺され息子は行方不明。

第一容疑者になって然るべきだが、警察の捜査網が躍起になって雪音を探したかといえそうではない。

雪音を匿った夜鹿は更に警察官としてあつてならない事をしていった。

公務員総合職試験を通過したキャリア組の階級権力の悪用。

即ち捜査の捻じ曲げだ。

裏付ける証拠品を始末し、捜査資料の改竄まで行って意図して雪音を重要参考人から外したのだ。

めぼしい容疑者も居らず日夜殺人が横行する東京で、強盗も働かずに去った人斬りを宛もなく追えるほど官憲は暇かではない。

こうして無事に迷宮入りした。

同居して以降の立ち合いは証人と物的証拠の無さから名前が拳が

りもしない完全犯罪。

雪音にとつては残る唯一の家族と歩む楽しい生活の始まりだ。

斬っても良い悪党、辻斬りが犇めく街はまるで広大な遊園地に思え、一日たりとも我慢しなかった。

昼は橋の下や屋上で稽古。

夜は相手を探して彷徨い歩く。

弱者をいたぶる趣味や、力尽くで奪うまでは世俗の娯楽に興味が無かったのは獅子吼の教育の賜物か。

剣だけにときめきと高揚があった。

夜鹿との時間だけ安寧があった。

母も父も亡く、外に出れば剣の他には何も無い。

それでいて、姉に向ける笑顔は昔のままだ。

これが狂気でなくてなんだろうか。

環境と生まれに狂わされた不遇な弟が哀れで、姉は背信者に身を落としてでも守ると誓ったのだ。

ともあれ、今は良くも悪くも安定している。

子犬のような愛らしさにすっかり絆されてしまったくらいには。

日曜日の朝日に二人が起こされて顔を洗ったら朝食を作る。

「ねえ、これで合ってる？ 間違ってるない？」

「大丈夫、上手よ」

今朝は米研ぎと味噌汁を教わった。

塩鮭を焼いている横でおっかなびっくりり具材を切り分ける雪音は

剣と包丁の違いに苦心する。

握りからして勝手が違う。

豆腐は人間と手応えが違う。

汁物で失敗したら夜鹿に食わせる分も悪くなるので不安で仕方ない。

垂涎ものの新鮮な反応に浮かれる心理をおくびにも出さないで、夜鹿は手取り足取り教えてやった。

出来上がった味噌汁は煮崩れしかけたじゃが芋も妙に大切りな豆腐にさえ目を瞑れば悪くない。

米は水分量だけ正しく計って炊飯器に任せて順調に炊けた。

ついでに作った目玉焼きはなんと二回目の挑戦で上手く焼けていたので、あの失敗作の群れは予想通り昨日のみの幻となり、食べておいて良かったと胸を撫で下ろした。

それら並べると二人で向かい合わせで手を合わせる。

素敵な朝食の始まりだ。

「ねえ雪音」

「なあに姉さん？」

「外で稽古したくて眠れなかったんでしよう。なら行きなさい」

昨夜の寝付きの悪さに夜鹿は思い知った。

動くものを無理に拘束したら壊れてしまうのだ。

過程はどうあれ家も両親も失った雪音から剣まで奪う仕打ちは残酷が過ぎる。

雪音が唇を曲げ、米を掬う箸が止まる。

「……行かない。俺は姉さんと約束した」

「子供が意地張って理屈捏ねるんじゃないの。別に四六時中一緒とは言ってないでしょう」

「俺はもう大人だよ」

「お姉ちゃんには何時までも子供よ。ちゃんと帰って来るなら一々目くじら立てないわよ」

鍛錬はしたい。

だが姉を裏切ってまでするかと問われたら否だ。

家族への想いは何もかもを上回る。

獅子吼もそうであったように、それが血族の宿業なのか。

雪音自身にもそれは分からない。

「したいならしたいと、本当の事を言っつて。私は雪音に我慢させてまで我儘を言うお姉ちゃんになりたくないわ」

「怒らない？」

「怒らない。一昨日は私もどうかしてたの」

伏せ目がちに腕の米粒を突く雪音の手に夜鹿が指を重ねる。

答えずとも本心は態度から明らかだ。

道徳も世俗も投げ捨てて邁進してきた弟が昨日今日で剣を辞められるなら苦勞はない。

「……どれぐらいやっていい?」

夜鹿は答えに詰まった。

人を斬るなど言ってみようか。

人を斬る術しか持たない男に?

言えない。

そうあれかしと育てられた存在意義と矛盾してしまう。

色気を垂れ流す極上の女を前に自慰しか許されないようなものだ。

本来なら気の赴くまま手当り次第に暴れてもおかしくない雪音は十分に歩み寄っている。

「時計を見て夕飯までに帰って来なさい」

中途半端な制約を言いつける。

これでも言い過ぎでない自信がなかった。

「姉さん」

雪音は箸を置いた。

「え、え?」

「ありがとう」

テーブルを回り込んで呆気に取られる夜鹿に抱き着く。

嬉しさと愛しさと感謝をすぐに伝えたかった。

「俺、姉さんが好きだよ。大好き。大大大好き! 姉さんの弟になれて良かった」

瞳には綺羅星を瞬かせ、幼い語彙でこれでもかと好意を露わにした。

己の狂える性^{サガ}を世界でただ一人愛し、許し、認めてくれる。

これに勝る幸福など有りはしない。

牡丹に散々に否定された後では感動はより顕著だ。

「でも、まだいい。姉さんの折角のお休みなんだから、姉さんを優先する」

温もりは名残惜しいが着席して白米を掻き込んだ。

もどかしい渴きなら甘んじて受ける。

こんなに好きな夜鹿を寂しがる愚を再び犯さない為の罰だ。
二十三歳になっても、雪音は感情を引き出す根本に異常がある。
共感能力の欠如を理性で補って来たが、それでも生きるようにしか
生きられない。

例えば、今の夜鹿がどうして顔を手で隠して肩を震わせるのか、本能的に感じられない。

姉としての悲喜などとてもとても。

「お代わりしてくる」

手放しに喜んで貰えるものと思い込んでいたが、何かがおかしい。
気まづくなつて台所へ一時退却した。

頭脳を高速回転させても、山盛りの白飯を盛り付けるだけの数秒で
は名案など思い付かず舞い戻る。

恐る恐る顔色を窺うと夜鹿は普段の夜鹿になっていた。

見間違えだったのか。

そんな筈は無い。

「そんなに人の顔を見て、何か付いてる？」

「え、いや、いつも通り姉さんは可愛いなって……」

「歳上をからかうんじゃないやありません。雪音こそ格好良くて自慢の弟なのに、ほっぺたにご飯粒付けちゃってたら台無しよ」

冷静な夜鹿とて想い人に褒められて悪い気はしない。

少し耳を赤くした夜鹿に撫でられる。

そのまま頬に付けた飯粒を拾い、自分の口に運ぶ。

「後でお買い物に行かないとね。荷物持ちしてくれるでしょう？」

「もちろん！」

我慢してでも閉じ籠もろうとする雪音に対し、口実を付けて制する。

「夜は何が食べたい？」

「ハンバーグ！」

つい先程は大人と言い張っておいて、まるで子供な好みを即答する雪音がおかしくて、夜鹿は笑ってしまった。

PART 16 ブラッディ・レイン

剣を振りたい。

そして誰かを斬りたい。

骨も肉もずぱつと通り抜けるあの感触が恋しい。

斬りたい。

斬りたい。

斬りたい。

感じ疲れた夜鹿が寝付いた闇で雪音は塗炭の苦しみを味わっていた。

数時間が待ち遠しい。

すぐにでも剣を握り半狂乱に飛び出すまま夜道を彷徨いて、目に付いた剣士を全員斬ってしまいたい。

飲んでも食っても抱いても寝ても癒えぬ渴望が雪音の内で暴れる。

牡丹の治癒は芳しいだろうか。

稽古をしないでいて、いざ立ち向かってきた牡丹を打ち倒せるだろうか。

不安なのだ。

雪音は運動能力と反射速度と空間認識能力を高次元で複合した鬼才。

その反面、勘働きは天才とまではいかない。

牡丹のように剣の神に愛された独創性は持ち得ず、上達にはひたすらな修練を要する。

勝ちたい。

上回りたい。

高みを見たい。

かつて授かった武蔵一刀流の本懐は雪音のそういつた性質に深く噛み合っている。

万回の瞑想に耽り千回の素振りをしたとて、一回の充実した実戦はそれらを凌ぐ経験と喜びをくれる。

四十時間も剣を一回も振らなかつたのなど過去の雪音からは有り

得ない。

夜鹿を想い寂しがらせまいと衝動を耐えた所で強がりの痩せ我慢だ。

続く道理はない。

しかも今は出義牡丹という光を知ってしまった。

瞼の裏にちらつく願望を追うと幾分楽になるのも一時の作用だ。

夜鹿が潰れるほどに手足に力を入れて発散したい衝動を抑え耳を澄ますと脊髄から声が入ってくる。

ああ。

あれを斬りたい。

あれになら斬られたい。

あれを斬れたならなんと素晴らしいだろう。

思考はぐつぐつと煮える混沌の坩堝に落ちて眠れやしない。

夜鹿の胸の中で焦燥と期待に駆られる内に空が白み朝が来る。

がなり立てる目覚まし時計の音に合わせて雪音は狸寝入りをして
おいた。

平日は仕事に向かう夜鹿を見送る。

しゃんとしないと怪しまれる。

怪しまれると怖がらせてしまう。

それだけは駄目だ。

何事もなかったようにおはようと言ひ、当たり前前に朝食を摂り、いつものように送り出す。

そうしたら風丸を引っ掴んで闇市で目に付いた悪党とやり合えばいい。

それまでの辛抱だ。

「おはよう、姉さん」

「……ずつと起きてたのね」

一目で見抜かれてどきりとする。

夜鹿の眼力には敵わない。

そう云えば、隠し事は露見しなかった試しが無かった。

「気にしないで。姉さんは仕事なんだから休まないとだけど、俺は

プー太郎じゃん？　ちよつと気分転換したら二度寝するよ」

「隠さないで良いの。今日こそは行ってらっしゃい」

夜鹿は自分だけ欲求を満たされて熟睡していた浅ましさを恥じ入った。

健気で優しく正直な、自分には出来すぎた男を胸に抱く。

「私は雪音を信じるわ。こんなに良い子だもの」

血も涙もない剣兇などとは無知な外野に言わせておけばいい。

仕事で帰りが遅くなつても夕食すら食べず起きている。

愚痴の一つも零さず優しく共寝をする。

こんなにも温かく愛してくれる男が悪人なものか。

これで多少の困った癖も許さずば女の度量が知れる。

「ちちゃんと帰って来るよ」

こんな事を言わせるつもりじゃなかった。

畜生、馬鹿野郎。

ふざけているんじゃないんだぞ。

これではあべこべだ。

雪音は悟らせてしまった愚を自責する。

「なによもう、そんなにしよげて。雪音は気にし過ぎよ。ほら、いつもみたいに笑えないならこうしちゃうわよ？」

夜鹿は大型犬を溺愛する手付きで髪から何まで撫でくり回して憂鬱を吹き飛ばした。

「あはは、やめて、姉さん、あつ、ちよつと、駄目だって……」

乾いた体液でざらつく肌を指が行ったり来たりするくすぐったさに悶えさせられ笑いを漏らした。

元来切り替えが早い雪音が気分を取り戻すにはそれで十分だった。

元気になり過ぎた雪音に朝から襲われない程度に留めて体を起こす。

「暗い話はこれでおしまい！　お風呂でサツパリしてご飯にしましよ」

「うん、そうだね。もう腹ペコだよ」

裸でじゃれ合いながら浴室に行き、仲良く洗い合つて服を着るとも

ういつもの二人だ。

初挑戦の卵焼きをしつかり失敗してスクランブルエッグに変えた朝食を食べた。

「行ってらっしゃい」

「行ってくるわ」

化粧を整えて怜悧な美貌に磨きを掛けた夜鹿にキスをして送り出した。

静まり返る玄関で深呼吸を一つ。

許可は得た。

凧丸が血に飢えている。

求めているなら早々に与えねばなるまい。

雪音の目は爛々と光った。

愛刀を竹刀袋に隠し準備万端。

羽織はクリーニング出しているので今日は着ない。

どうせ闇市の三下には強化した夜霞を使うまでもない。

無頓着な雪音に代わり夜鹿が見繕った服のポケットに札束を一掴み押し込むと、罪に溺れた鬼の哭く城へ向かう。

闇市は常に温かく迎えてくれる。

剣兇として知れ渡った男に挑む酔狂が見つかる素敵な場所だ。

餌は札の束。

左手に剥き出しで持ち歩くと色気を出した間抜けが次々と集まる。

まず到着早々に見つけた剣士は問答無用で誘いに乗り、一度目の立ち合いを楽しめた。

無謀に挑むほど尻に火がついた食い詰め者となれば大した手合いではないが、ジャンクフードでも腹は膨れる。

禁欲のせいかな真剣で斬り掛かられるだけでもまずは楽しかった。

ご機嫌の雪音はさらなる強者を探して奥へ奥へと足を運ぶ。

今歩いている通路は酷く狭い。

たった一畳ほどの幅にゴミやらビールケースやらが放置されている。

「あは、弱い弱い！ 弱過ぎる！ 狭い場所でどうやって左右に振り

回すってんだい!」

戦法のいろはも心得ないでかかって来る大間抜けがまた一人散る。横向きに反り返った姿勢から上体だけを右に捻り、横ではなく縦に腰を切った抜刀。

肩から脇まで逆袈裟に斬り分ける。

閉所での難儀な居合もお手の物だ。

名前も知らなかった男は死んだ。

「くひっ……い」

風通しの悪い違法増築で永く留まる芳しき闘争の香りを吸い込む。

正午にもならない内から転がした死体は四つを数える。

返り血を被る至近距離まで踏み込めず、雪音は身綺麗なまままでいる。

死体の服で刃の血脂を拭う。

雪音は存分に楽しみつつも、記憶に思案を巡らせている。

目下の主題は牡丹だ。

正確には牡丹が最後に繰り出したあの刺突。

あれだけが異質だった。

何かが足りない。

完璧な才人が放つにしては、能力に頼り切りで技そのものも画竜点睛を欠き粗い。

そのせいか血溜まりの横で再現してもしっくりこない。

なんの変哲もない突きになってしまう。

「なんか違うなあ? もつとこう……なんだろうなあ」

真相解明に思案していると新しい風が吹く。

「流石は東洋のジャック・ザ・リッパー。殺しも殺したり、大したお手並みだな」

血溜まりを避けてスーツの男が二人立っていた。

雪音より上背のある大男と、細身の男。

「えっと、おじさん誰だっけ?」

「お前は鳥頭か? 態々出向いてやったつてのに、刀振るしか能が無いのか?」

サングラスをした細身の方が奥で口を開いていた。剣を提げた大男は鋭い眼光で雪音の挙動を注視する。見覚えのある二人組だ。

具体的には、先日の進行役とその護衛。

用件は想像がつく。

「あはは、冗談だよ。言つてたお仕事の話は伝言係が来るつて言つて無かつた？」

「お前がそれを殺したんだ。此処に着いて早々に」

「あれがそうだったのかあ。弱いくせに喧嘩を買つたあいつが悪くない？」

「知るか。つたく、三日と経つてないつてのに派手にやりやがつて。いい加減にしないとケツ持ち連中がお仕置きに出張るぞ」

「ふーん………そいつらは強いのか？」

「妙な気を起こすなよ？」

有無を言わさず斬り合いに発展した使者から始まり、午前だけで四人も斬つてまだ食指を動かさそうになつた雪音に釘を刺した。

サングラスの下の顔は皺が寄り、苦々しい心境を克明にしている。「お前がくたばろうが知つたこつちやないが無駄な騒ぎにするな。サツに話を通すのも使える用心棒を探すのも面倒なんだぞ。大体な、金を撒いてもお前らみたいな厄介者ばかり集まるつてのはどういう見だ？　そもそもなんで俺が……」

「いや、俺に訊かれてもねえ……」

狂気は正気を制する。

深淵を目指す剣客であれば修羅道に堕ちていくのが必然。

吐き捨てる中間管理職の愚痴を雪音は聞き流した。

「ああ糞、とにかく、蜂の巣にされたくないけりや程々にしておくんだな」

煙草に火を点けて気を取り直し、懐から出した封筒をこちらへ投げ渡した。

「本題はこつちだ。中の写真を見る」

「うわあ、悪そうなのツラだなあ。誰これ？」

厚く重量感がある。

開けてみると中身は金と地図、写真が一枚ずつ。

写る一人の中年男は固太りで首まで刺青を入れた極悪な人相をしている。

紋付き袴のあまりにも悪党といった面構えでつい失笑した。

「知る必要は無い。今週中に地図のビルに隠れてるそいつを斬れ。監視カメラは無い。護衛が居たらそれも斬っていい。金は前払いでくれてやる」

「やるとは言っていないけど」

極道の事務所に送り込む鉄砲玉にしようというのだ。

それも明らかな使い捨てとは人を舐め過ぎだ。

こうして替えの利く人間を定期的に集めるのがあの大会の目的だったのだろう。

心優しき雪音とて腹を立てじっとり睨んでも男は痛痒にも感じていない。

武器を携えた大量殺人犯に面と向かい吹っ掛ける度胸は裏稼業の強かさか。

反対に、護衛の男は剣に手を掛けている。

「そうか。なら返せ。残念だが別の奴に頼むとしよう。直属の護衛はお前好みの腕利きらしいんだがお気に召さないなら仕方無い」

「うそうそ、やるよ。ヤツちやうよーん！ やだなあ、それならそうと早く言つてよおじさん！」

腕利きと聞いて雪音は掌を返した。

満面の笑みだ。

組織の犬に成り下がるだとか、捨て駒扱いだとかはどうでもいい。血を滾らせる美食を提供してくれるなら協力するとも。

「おじさんはやめろ。三上だ、そう呼べ」

「俺が前金だけ貰って逃げるとか寝返るとか、考えなかった？」

「ハッ、お前がそんな小器用なタマか？ 剣だけが生き甲斐のお前が？」

どう繕つても狂人は狂人。

出来るものならやってみろ。

ニタリとした笑いで雪音の性をそう見做す。

「蝙蝠野郎が務まるならやってみな。楽しみだ」
慌てないのではからかい甲斐がない。

雪音は鬨気を収めて尻丸を鞘に戻した。

護衛も腰を落とした臨戦態勢を解く。

距離は八歩。

一足一刀の必死圏だ。

居合の恐るべき速さを知る故、手は柄に当てたままにしてあった。

「明日までには済ませとくよ。……命拾いしたね」

踵を返す雪音は路地を曲がる。

護衛が気を抜いたなら魔剣にて斬るつもりでいた。

素人を狩るよりは楽しかろう。

冷めたように振る舞うも、その心中はまだ熱く煮えている。

腹の足しにしたかったが諦めた。

まずは下見だ。

件の筋者のビルは地図によると闇市から少し移動した場所に建っている。

今日は電車で現地に行き、間取りや立地を調べて本番は明日だ。

三上は腕利きと言った。

どれだけやれる男か、今から楽しみで足が軽い。

色気づいた雪音が闇市を抜ける道中で更に死者が増えたの言うまでも無い。

PART 17

風丸にへばりついた血肉を死体の袖で片面ずつ丁寧に拭う。

上等なスーツを汚して艶美な輝きが戻った刀身を鞘に戻した。

内臓を垂れ流した半死人が千切れ飛ぶ光景は刺激が強かったのか、標的は護衛の背で失禁して震えている。

人員や立地、間取りを偵察した雪音は手薄になる時間を狙わず白昼堂々と強襲した。

正面からエレベーターで上がり正面切つて、もしもこの人を探してますと用件を伝えたのだ。

何故か問われて斬るためと馬鹿正直に答えれば、当然長ドスや匕首を携えた輩が続々と集まったので誰彼構わず斬りに斬った。

現代の池田屋に残るは二人。

「さあ、どうするんだい。もう逃げ場は無いよ」

雪音は微笑む。

階の最奥の室内は凄惨な赤だ。

とにかく赤い。

壁と床と天井がどこを見ても赤が目に残る程、ビルの一室は血が彩られていた。

石膏とタイルのつまらない白と調度品にぶちまけられた模様が鯉を思わせる。

材料に四人の命を齧^ひぎ成した芸術を下らないと雪音は冷笑する。

この部屋を含めて既に十五人を斬ったのに、何の快感も得られなかったのだから。

術理の欠片も持ち得ず気合いばかりが先走る素人を幾ら斬ったとて何も楽しくはない。

応接セットの障害に隠された夜霞を素人が受けてはどうせ死は不可避。

護衛の腕が立つ前評判は幸いにして真実だった。

小手調べの夜霞を受けて無事であるだけで大したものだ。

部屋には標的と護衛を含めて六人居た。

扉を蹴破つて繰り出す居合で手前に座っていた二人の首と腹を初手で斬った。

それから直ぐ様に手首と足首を返し、立ち上がりかけで腹が斬れた方の首を刎ねつつ、渚の応用で間合いを延ばし奥の二人を叩き斬った。

護衛は標的の襟を掴まえて次の一步で当たる範囲から素早く後ろへ逃してしまつたので三太刀目は不発。

重畳だ。

二拍の猶予を得ても逃れられない剣士の方が多量中、冷徹にして精密な雪音の剣を躲している。

退避するとすぐさま灰皿やグラスを床に撒いて出鱈目に足場を乱した。

雪音の余裕を警戒して三人掛けのソファを挟んで斜めに位置どつているのも戦闘経験からか。

奇しくも同じ居合使い。

体は同等に鍛え込んでいる。

雪音は唇を更に歪めて赤子のように笑つた。

主役はお前だ。

「雑魚が死のうが知つた事か。俺は貴様の命を獲るだけよ」

「て、てめえっ！ 俺を守らねえのかっ?! 今までたんまり金を世話してやつたらうが!」

「黙れ。貴様から死ぬか」

「ぶひっ!?!」

鼻っ面に後ろ蹴りを食らわせて親分を黙らせた。

悪どい面で腰を抜かし、雇つた護衛にも手荒にあしらわれる惨めさつたらない。

「あはははは、どつき漫才やってんじやないんだから変に笑わせないでくれよ。………あんたさ、あの場に居たね?」

「だったらどうした。急に家に帰りたくなつたか?」

「まさか。あんたは大馬鹿だ。とびっきりの馬鹿野郎だぜ」

「ふ、ほぎけ」

片や不可避の《魔劍》に挑みたがり、片や手の内を知られて喜ぶ、血に染まった男達。

二人は瞳をどす黒く輝かせて笑い合った。

《魔劍 渚》を擁し世代最凶と噂される剣兇との居合対決に臨んでも護衛は強気でいる。

不敵な挑発に雪音がにやつく。

出義牡丹との死合を観戦して《魔劍 渚》は足運びが不敗の機構の要と見取り、こうしてきたのだろう。

確かにこの立ち位置や足場では必勝の《魔劍》は効果が半減し不発となる。

出そうにもただの我流剣術渚を見せるに終わってしまう。

拳動を束縛する机や椅子が《魔劍》の自在性を潰してしまうのだ。

「穴戸兵馬^{ししどひょうま}。我流だ。剣兇の手並み、見せて貰う」

「武蔵一刀流兵法、逆島雪音だよ」

重心の安定も良く戦術は合理的。

闇市での凄惨な立ち回りと残酷な速度の居合を目撃した割には怯えの色は無い。

かなりの上物だろう。

我流が欺瞞でも真実でも俄然面白くなってきた。

「《魔劍》を使わせなけりや勝てるだろうって？」

縛られた魔劍は魔劍足り得ない。

回り込めばその隙を打たれる。

だがそれが何だと言うのか。

こうなっては、どちらかが間合いに飛び込んで居合を叩き込む。

決着まで一太刀。

「試してみようじゃないか」

狙われているのは首より上か。

ソファを飛び越しても迂回しても首を撫で斬る軌道を相手が脳裏に描いているのは彷徨う視線や肘の角度から明白だった。

足場の悪さは剣に影響する。

がらくたを避けて進まざるを得ない攻め手の雪音は大いに不利。

自分の居合に絶対の自信が有っても分の悪さは否めない。
それは分かっている。

だからどうしたと言わんばかりにソファとテーブルの間へ突っ込む。

そこもまた割れたカップやら新聞やらが散らばる殺し間。

死地でまごつく間抜けは居ない。

早々に見切りを付けてソファの背もたれ方向へ跳躍した。

空中では身動きは困難だ。

穴戸はほくそ笑んで居合を放つ。

その首貰った。

狙うは無謀に飛び上がった雪音の生白い喉。

腰の尻丸に防がれない高めの角度で斬り上げる。

しかし勝ちを確信するには早かった。

軌道を視た雪音は手足を畳んで小さく一塊になりソファを側宙で

飛び越えて、本来の首の高さを過ぎる一刀を躲した。

生じる回転を予備動作に使い、着地寸前に居合を叩きつける。

空中には雪音の剣の道を阻む者ものは何も無く、一步踏み込んだ剥

き出しの首を尻丸は鮮やかに撫でる。

振り抜くと同時にガラス片をスニーカーの底で踏みつぶして荒々

しく着地した。

うなじの皮を残して脊椎まで断られた穴戸は即死してその場に崩

れる。

全ては一瞬の出来事で驚く暇も無かつたろう。

左右のどちらかに側宙し、着地前もしくは着地時に回転方向へ斬り

払う。

下段払いへの回避や障害物を飛び越えつつの奇襲攻撃に使用され

る異形の剣。

武蔵一刀流兵法飛独楽^{とびごま}。

この高難度の技も必要とあらば使うが今ひとつ好きになれない。

これの主目的は軽業紛いの回避であって、剣が生きていない。

手本を見せた獅子吼は空中で逆さまの間に青竹を五本纏め斬りに

していたが、あれは例外だ。

体重は乗るし威力十分だが派手なだけで面白くない。

雪音個人の趣味では地面の反発と重力に従う堅実な剣技が好みにあたる。

脱力第一を標榜する流派の宗旨にもそれが合っている。

「悪くなかったよ。地獄でもっと稽古しようぜ」

《魔剣》など本来なら不要。

勝つ公算の高い敵に楽に勝てるようになるだけ。

雪音の居合より地力が有れば勝てるのだ。

突き詰めれば、雪音が抜いた後に抜いて勝てる速さが有ればいい。

《魔剣》を恐れるのは格下である証左に他ならない。

牡丹並の使い手であれば事情が変われども、その程度の剣士に同じ居合の土俵で負ける道理が有ろうか。

それでもなかなかの腕前だったのは違いない。

「悪いけど、そういう事だからさ。おじさんも似たような事やってたんでしょ？ 因果応報って奴だよ、諦めて死のう！」

晴れ晴れとした開放感に包まれた雪音は、血溜まりの中に顔面蒼白でうずくまる標的に珍しく優しく説いた。

「幾らで雇われた!? 俺はその倍を出すぞっ!!」

「〜〜」

先日視聴したドラマの主題歌を鼻歌で口ずさみ、必死の命乞いにも聞く耳を持たず剣を振り上げた。

金には困ってない。

むしろ得ても使えないと夜鹿に言われたばかりだ。

剣を振り下ろして仕事を完遂した雪音は騒ぎになる前にそそくさとビルを離れた。

終わってみれば呆気ない。

返り血の一滴も浴びていなかった。

たっぷり戦って満たされているが、まだ昼下がりがりだ。

家に帰っても夜鹿は居ない。

時間を持って余した雪音は闇市近くまで戻って近傍の河原に足を運

んだ。

ゆつくりと土手の上を歩いてその姿を探した。

期待はしていない。

三日と経っていないのだから傷が癒えて鍛錬に励むには早過ぎるが、国道の橋の袂にそれは居た。

「おお、良いねえ」

一心不乱に立木に木刀で殴り掛かる野蛮な稽古をしている。

暫く遠目に観ていると顔の腫れは引いても体の痛みによるものか時折ぎこちなくなっていた。

痛む筈だ。

薄切りと滅多打ちの生殺しにされた身体が痛まない訳がないのに構わず鬼気迫る形相で打ち込んでいる。

牡丹は焦りに突き動かされていた。

道場を護るには金が要る。

雪音を倒せば高い確率で金が手に入る。

全てが嘘である可能性もあながち皆無でなくとも、あの手の狂人は取り決めに異様に遵守する。

勝てば報われる。

あの悪鬼に勝つしかない。

「頑張れ。お前なら絶対に出来る」

勝利に向けて万全を期し編み出した《魔剣》を今では逆に破られたい。

空間を超えて向けられる怒気に雪音は嬉しそうに独りごちた。

あの嵐のような様子では手応えは未だ無いのだろう。

どうにか《魔剣》を攻略せしめない限り牡丹に勝ち目は無く、今会っても前回のやり直しになるだけで互いに面白くない。

しかし如何せん、鍛錬の要領が悪い。

基礎稽古は出来ているものの、血気盛んに殺し合う対人戦の経験値が足りていないのが最大の弱点だ。

これでは差は縮まらない。

急にもやもやとした雪音は声をかけずに河川敷を去った。

人の斬り方を素直に教わるような女なら話は簡単だったのだが、甘ったれな流儀がそれを邪魔する。

成人してから習慣が抜け切るには時間が要る。

適当な剣術道場に放り込めば才能のまま勝手に育ったものを、よりよって活人剣とは。

どこまで行っても剣は剣でしかない。

剣とは人を斬る道具。

手加減だの不殺だの抜かすのは包丁を料理以外に用いる阿呆と一緒だ。

そんな浮ついた戒律で自ら迷いを生じさせるなど愚の骨頂。

どうしたものか。

電車に乗ってマンションに帰り、たった一日で沢山斬った凧丸をまた手入れする。

夜鹿が仕事から戻るまでの数時間を鍛錬に宛てて潰そうと非常階段を伝って屋上に出た。

丹念に柔軟運動を施してから素振りを行う。

好調だ。

夜霞も渚も問題無く使える。

しっかりと牡丹を返り討ちにしてやれる事だろう。

《魔剣》を開発し運用してきてそろそろ三年経つ。

言ってしまうえば《魔剣 渚》は現状無敵だ。

雪音の居合を見切れない者へは限りなく無敵に近かった。

しかし牡丹のような未曾有の才能を目の当たりにして、そろそろ改良案を練るべきかと雪音は考える。

どうしようか。

武蔵一刀流兵法の技を初歩から奥義の夜霞まで復習して剣に訊く。

凧丸は答えないまま時は過ぎ、赤く焼ける西の空を月が追いかけて夜が来た。

そろそろ夜鹿が帰宅する頃合いなので、家に戻って習ったばかりの米研ぎをして待つ事にした。

PART 18

夕刻。

雑居ビルの中で十数名が斬殺死体で発見されると通報を受けた警察は対応に追われた。

薬物取引や地上げで急速に勢力を伸ばしていた一家だった。

付近に防犯カメラ等は設置されていなかったが、状況証拠からこの虐殺はたった一人によるものだと考えられた。

鮮やかな切り口を過去の資料と照らし合わせ、剣兇の仕業であると断定されるに至る。

つまり雪音の犯行に他ならない。

関係各所の署員に共有された現場写真を見た夜鹿は心配で心臓が飛び出そうになったが平静を装った。

恐らく組織同士の抗争に巻き込まれたのだ。

今の所は剣兇の血痕等は検出されていないそうだが、こんな大立ち回りをして無事でいられるのか、雪音がどれだけ剣術の高みに在るのかを知らない夜鹿には気が気でなかった。

携帯電話も持たない雪音の安否を知るには直接顔を合わせるしかない。

組織犯罪は担当部署がやや違うので捜査員には指名されず、普段の仕事を持ち上げて大急ぎで帰宅した。

名指しされたとして、相棒の熟練刑事に頼んで飛んで帰っただろう。

血相を変えた夜鹿は蹴破らんばかりの勢いで扉を開けて玄関を突破する。

週末に無理に我慢させたのが行けなかったのか。

雪音の宿痾は分からない事だらけで焦燥と困惑に包まれていた。

靴を脱ぎ捨てドアが半開きの居間に雪崩れ込むとエプロン姿の雪音が左手に凧丸、右手にお玉を持っている。

夜鹿は一も二もなくその胸元に飛びつく。

いつもと変わらない姿で力強く受け止めた雪音からは濃厚な血の匂いがした。

「……良かった……」

「おかえり。そんなに慌ててどうしたのさ？　もうすぐご飯が炊けるし味噌汁も出来たから手を洗って来て。それとも先にお風呂にする？」

そんなに逢いたかったのかなと、相も変わらず能天気な発想で喜び微笑む。

少々恥ずかしい体勢をしていると気付いた夜鹿は雪音から下りると照れながら身繕いをした。

「そうね、走って汗かいちゃったから流してくるわ」

初夏から蒸し暑い都内を走り抜けた体はうっすら汗ばんでいた。思わず抱き着いたが汗は臭ってないだろうか。

乙女な羞恥心が鎌首をもたげ、いそいそと脱衣所に向かう。

エプロンを外した雪音もお玉を鍋に戻すと後に続いた。

背中を流そうと意気揚々と風呂場に入り込んだ雪音はしかし、血の匂いを落とそうと躍りになった夜鹿に丹念に隅々まで洗われた。

身を清めてさっぱりした二人は協力して仕上げた夕食を摂った。

昼に大暴れして空きつ腹だった雪音も腹一杯になってソファでうつらうつらする。

隣で手を繋いでドラマを観ている夜鹿の肩に寄りかかる寝顔はあどけなく天使のようだ。

昼間の悪鬼の所業が嘘に思える。

「あなたって子は……」

このまま時間が停まってしまうばいいのにと夜鹿はその愛しい頬に何度もそつと口付ける。

しっとりした刺激に片目を開けた雪音は首を傾け唇を重ねる。

「……んっ……」

艶やかな口から切なく息が漏れた。

「ごめんなさい。今日は、その……」

「分かってるよ。やめよう」

軽くついでにキスを繰り返す雪音はそれ以上を求めなかった。

伊達に二十年来の付き合いはしていない。

互いの体調はお見通しである。

人心を理解出来ずとも体の事なら目端が利く。

手や口などで代替しようと提案しかけた夜鹿をキスで黙らせる。

雪音は非常識で無邪気だが夜鹿を相手にした時に限ってはその意図を汲み取って先んじるのも得意だった。

失態を演じた後も実に心地良く慰める。

夜鹿が落ち込めば必ずそれを上回る喜びを与えて最後には笑顔に変える。

他の男への興味が失せてしまうのも道理か。

二つの唇を離すと指を絡め合った手の甲で雪音の腿をさすり、ドラマに目を向けた。

主人公は職場では快活な同僚に、家では母性的な恋人に好意を寄せられどっち付かずの曖昧な態度で過ごして来た。

前回の終わりには二人の女が鉢合わせして修羅場に発展しかけるもその場は口八丁の方便で凌いだ。

が、状況は確実に悪化していた。

物語は後半に差し掛かって、煮え切らない主人公は静かに火花を散らす二人の女に挟まれて破滅の螺旋階段を転がり落ちていく。

女にうつつを抜かして仕事も気が入らず、恋人とはぎくしゃくとし始める始末。

雪音は毎週一時間放映される喜劇だとして観ていた。

これが人気だというのだから世間は奇怪だ。

怪訝そうに人物の行動を考察して唸る様を夜鹿はくすくすと笑って見ていた。

いつも二人の言葉は少ない。

喋るのが得意でもないし、必要な時に必要なだけ話して静けさを楽しむ。

スタッフロールを見送って、また甘い沈黙が流れる。

逞しくも柔軟性に富んだ腕を最高品質の抱き枕として腿で包む。

ドラマの次に流れる報道番組は都内の一角のビルで突如として発生した凶悪な殺人事件を捲し立てた。

真つ昼間から二桁の人数を一方的に抹殺した犯行動機を熟知り顔の犯罪心理学者が語る。

力の誇示だとか快樂殺人だとか語るが、どれも的はずれだ。素人めと、内心鼻で笑う。

研鑽と仕事でしかない。

弱者を黜つて楽しむ三流の手合が到れる境地など高が知れている。協調だの友愛だのも糞食らえ。

強者と戦い、喰らい、天へのし上がる。

逆島の剣はそういうものだった。

だからここまで雪音は来た。

だから牡丹は負けた。

「……ああ、そっか……」

ゆっくり廻り解き明かしたお陰で何をすれば良いのか分かった。すっかり腑に落ちる。

昼の牡丹の猛稽古を思い出す雪音はある妙案の着想を得た。

「どうかしたの？」

「いや、ちよつとした相談があるんだけど、いい？」

「なあに、畏まっちゃって。珍しいわね」

「神納流合戦兵法って剣術の道場がどこにあるのか知りたくて、姉さんなら調べられるかなって……」

身構えてみればそんな事かと気が抜ける。

この現代ではパソコンやスマートフォンからネットで調べれば簡単に探し出せるだろうが、雪音はIT機器に非常に弱かった。

一人ではテレビ番組の録画すら覚束ない機械音痴ぶりを見せる。

電話に出るくらいは出来るので夜鹿とて持たせたいのは山々だが雪音が束縛を嫌がりそうなので言わないでいる。

ネットで住所をさらりと調べるとメモに残した。

道場破りでもしようと言うのだろうが、詳細を探ると活人剣という不殺を貫く人道派であると知って然程心配はしなかった。

雪音がこれまで斬った相手も獅子吼を除けば犯罪歴に塗れた極悪人ばかりだったので今回は命までは取るまいと信じていた。

「ありがとう姉さん」

歯磨きをしながらメモを受け取った雪音はうたた寝の余韻でふわとした笑顔で微笑んだ。

「眠そうね。もう休みましょう」

「うん……」

頬を一撫でしてやり、大事そうに凧丸を抱える雪音の手を引いて寢室へ歩く。

向かい合わせで横になると薄ぼんやりと一日を振り返った。

ズブの素人が多かったが、最後のあれは面白かった。

報酬の金はどうでもいいとしても、このまま三上の使いつ走り続けるのも悪くないかも知れない。

第四の欲求と呼ぶべき剣の欲を昼間に発散し尽くした雪音はすぐに寝付く。

むにやむにやと稚気に溢れた寝言を言ったりしながら今夜も一塊に密着して眠った。

夜が明けて夜鹿を仕事に見送った雪音はクローゼットを開けた。そこに凧丸とは別の一振りを隠してある。

拵は酷似するが中身は全くの別物の刀は出番を待ち望んでいる。しかしまだだ。

これは真の強敵にのみ使う。

雪音は手入れだけしてまた封印した。

今は凧丸が有れば事足りる。

最後に父を斬つてからは剣に見合う相手に恵まれなかった。

戦えど戦えど全身全霊の死闘には巡り会えず無聊を慰める日々の終わりが来る。

そう予感させる剣士に出会えた。

夜鹿に向ける物とは真逆の壮絶な笑みを浮かべる。

「俺が楽にしてやる」

PART 19 クリミナル・ウイズ・クリアマインド

朝方の河原で汗を迸らせている女が一人。

麗しかった外見は負傷によって見る影も無く、痛々しい包帯や当て布で四肢を覆われている。

出義牡丹は怪我の治癒もそこそこに熱情を持って余し河川敷で稽古に精を出していた。

雪音が指定した場所はここで間違い無いのは付近の商店の人間から確認が取れている。

長身で長髪な女顔の男が刀を差してそうそうぶらつくものでもない。

包帯も巻いたまま走り込みや打ち込みに邁進する女剣士に通行人はぎよつとしては足早に通り過ぎていく。

想像上の雪音を倒そうとする闘志はその道に通じずとも伝わるものだ。

手酷く嬲りものにされたはずの牡丹だが、生来の気の強さで剣兇許すまじと再起していた。

それを雪音は橋の欄干から遠巻きに観ていた。

それでこそ剣士の鑑と、並の女なら見惚れてしまう柔和な微笑みを浮かべている。

金は得られず、屈辱を味わった。

苦しからう。

もどかしからう。

されどまだ《魔剣 渚》を上回るには執念が足りない。

百回やって百回勝つ。

千回でも万回でも勝つ。

不敗機構こそ《魔剣》の本旨。

不殺など笑わせる。

力無き正義など絵空事の願望である。

こつぴどく惨敗しても迷いを消せないならこちらで手伝ってやるとも。

「くふ……」

喜悦を噛み殺した。

滅多打ちにされただけで右往左往して血気盛んに逸る乙女。

可愛いものだ。

凧丸でもっと深くまで手籠めにしてやりたい欲求が沸々ともみ上げるが柄を握るに留める。

まずは本家で不殺を謳うだけの秘伝を見せて貰おう。

雪音が次に足を向けたのは神納流合戦兵法道場。

有名無名問わず武門が乱立した都内によくある中小規模の団体で、閑静な住宅街に本拠地を構えていた。

昼前に辿り着き中に耳を傾けると氣勢をあげる男共の声が重なっている。

生家の道場を思い出す造りの間口を勢い良く開ける。

「たのもーう！ おーい！ たのもーう！」

清々と稽古に勤しむ十数人の男がすわ何事かと一斉に振り返って困惑と猜疑の視線が雪音に降り注ぐ。

「一回言ってみたかったんだよね、これ」

空気を思い切り吸い込んで実家振りの道場を味わう。

汗の匂いはどこも変わらないらしい。

実は道場破りは初の体験となる。

男の一人が中断してこちらへ歩み寄る。

「や、やあ。えつと……入門希望者かな？」

使い込まれた真剣を携えてそんな訳もないが、白昼堂々にまさかという先入観に囚われた問いかけをした。

「こんにちは。道場破りだよ。代表者に俺が勝ったらこの道場を潰させてもらうね」

「なつ、なにを言ってるんだ!？」

呆気にとられる男を無視して裸足になると勝手に上がり込む。

「ちよつと！ 困るよ君！」

「いいからいいから。お遊びでやってんじやないんでしょ？」

雪音の身勝手な振る舞いに男らは戸惑いざわめくが、ただ一人、神

棚の真下で正座をして稽古を覗いていた白髪の老剣士だけは体を強張らせた。

如何にも豪傑といった風体な巨躯の剣士が進み出る。

「先生、私がやります。若者によくある無鉄砲くらい、優しく諫めてやりますよ」

「逸るな狭山」

立ち合いの許可を乞う男に老人は警句を発する。

殺到する視線にも飄々としている青年から漂う危険な香りを嗅ぎ分けている。

しかし狭山は鷹揚に笑い壁に掛けた木刀を取る。

剣の道を進むこと三十余年。

師範代にもなり一廉の剣士という自覚が狭山を寛容にさせる。

「なに、ご心配召されるような大怪我はさせません。少し痛い目を見れば賢くなりましょう」

「逆だ。油断してはならん」

「……成る程」

狭山はどこか現実味が足りない様子で相槌を打つ。

神納流合戦兵法当代師範、出義鬼兵。

激動の世紀を生き抜き道場を立ち上げたその老人だけは魔剣士の狂気を正しく感じていた。

「師範代の狭山三郎だ。その剣には悪いが殺し合いはご法度だ。木刀で失礼するよ」

「逆島雪音。どうぞよろしく」

狭山は明朗で立ち方も良い。

師範代とあれば牡丹より上の使い手であるのやも知れない。

雪音は礼を尽くして慇懃に木刀を受け取った。

その際、剣胼タコが盛り上がり節くれ立った手指がちらりと覗く。目礼しつつも視線を外さず残している雪音のそれも熟練の剣士のようだ。

木刀を通して相互に触れ合った刹那に剣士達は内面の上辺をなぞりあった。

出来る。

狭山は考えを改めた。

少なくとも若者にありがちな全能感からの自惚れではなさそうだと。

「ルールはどちらかが戦闘不能になるか降参するまで、でいいかな雪音君？」

「それでいいから誰も止めないでね。横槍入れたら女だろうが斬るよ。いいね？」

凧丸の柄を指で叩く面構えはぞつとする穏やかさに冷たさが潜んでいた。

門下生には年嵩の女も一人混じっていたがそんな事に躊躇する雪音ではない。

本当に斬る。

「人をそんな簡単に殺すだなんだって、最近の若者は物騒で困るよ」

眼前の青年が魔都東京でも指折りの剣客とは露知らず狭山ははにかんだ。

「それが俺の剣だからね。さあ、やろうよ」

茶目っ気たつぷりに言うと、凧丸を背に差し変え板間を歩いて狭山から離れた。

雪音は既に戦術を組み立てている。

この距離も理由がある。

夜霞の少ない短所として敢えて動きを見せる必要があり、一定の間合いを開いていて初めて有効に作用する。

奇怪な足運びで焦りから動揺を誘うにも思考が挟まる余地が要るのだ。

最低でも三歩、出来るなら六歩は欲しい。

雪音は会話の中でこれをさり気なく手中に収めた。

得意の居合を木刀で封じられた手前、これぐらいはやらせてもらう。

「ふんふん……」

持った木刀の具合を軽い素振りで確かめた。

丈は風丸よりやや短いはずつしりと重厚で骨を砕くのも容易からう。

雪音は無造作に右肩に担ぎ、声も無く夜霞を発動して先を取って仕掛けた。

「なっ!？」

虚を突かれた狭山は慌てて木刀を握るが雪音はもう目と鼻の先に居た。

卑劣と誇られたら鼻で笑う。

劍客が得物を握り名乗りを済ませたというならそういう事だ。

接近の慣性を乗せ峰の反りで木刀を跳ね上げて相手方へ投げ出すような袈裟斬り。

武蔵一刀流兵法、釣瓶上げ。

闇市で牡丹に放つたのと同じ技が、至近距離まで迫った上で猛然と襲い掛かる。

泡を食うような並の使い手なら額を割られていた。

「くっ、おおおおおー」

狭山は雄叫びを挙げて自身を鼓舞した。

不意を突かれた狭山だが全神経を最大駆動し熟練の技量をもってして最短の軌道で打ち落とす。

牡丹を育てた男の劍技は成る程、強ち捨てたものでは無かった。

峰を抑え込むように下方に押し退けて芸術的な防御を果たし、飲んでしまった息を吸う。

その一呼吸で勝敗は決した。

雪音は間髪入れず膝を抜き腰を落として下へ前へと懐に潜航する。進むべき道は拓かれた。

罎元を抑え込まれただけで降参するようなら伊達や酔狂にも劍客稼業など始めない。

蹴り足の反発で腰を絞り上げ、連動して左手を宛てがう柄頭を臍下に落とす。

天秤になった切先が行くは股下。

狭山の上背による腕の長さや破壊力は危険だった。

しかし代わりに剣の中心軸が上体に偏り下方の守りが甘くなる。雪音の勝機はそこにあった。

適度に馬力を込めた袈裟斬りは食わせる為の餌に過ぎない。

袈裟斬りから脚を入れ替える事なく前進し即座に内腿ないし股間の動脈を斬り上げる。

切先が降り立つが早いか飛び跳ねて次撃を食い破る。

武蔵一刀流兵法、飛蝗^{ひこう}。

牽丸を潰し骨盤を砕いた手応えが返ってきた。

「ひ、あつ……!!」

立つこともままならず蹲る狭山は頭を垂れるように俯き悲鳴を漏らした。

だがまだ終わらない。

「よっ、と」

上段に構え直した木刀を無防備な首に叩きつける。

頸骨が折れて首があらぬ方へ歪んだ。

命脈を絶たれ弛緩した狭山は失禁する。

絶命を確信してから溜めていた息をゆっくり吐き、残心を取ってすつと離れる。

腕だけで評価するなら悪くはなかった。

しかし雪音は牡丹という前例から流派の情報を得ていた。

致命傷を与える技を嫌い、命の奪い合いにも慣れていない。

こちらだけが死を覚悟した優位性。

加えて機先を制した。

技の優劣は一概に語れずとも、情報、機、気構えの三つの利を手にしていた雪音は戦う前から勝利に近かった。

狭山にはまさか木刀を以てして命のやりとりはすまいと侮りがあつた。

平和呆けた油断から一太刀やり過ぎただけで気を抜いた狭山がその餌食となったのは当然の帰結と言えよう。

雪音の袈裟を打ち落としてからすかさず剣を跳ね上げ二刀目を繰り出せば運良く相討ちに持ち込めた未来も有ったろうに。

首や胸元を狙わざるを得ない体勢に誘い込まれ、躊躇って次手を選ぶ時間を設けようとした狭山の負けだ。

「狭山先生！」

「救急車を呼べ！」

道場に悲鳴が満ちる。

「鎮まれ。無駄だ、事切れておる」

今から蘇生を試みたとして遅い。

そも、頸椎を砕かれ死に至る損傷を脊髄に負った剣士を無理矢理に生かす方が残酷というもの。

「貴様……!!」

門下生が浮足立ち糾弾の眼差しを雪音に向ける。

勝負は着いていた。

なぜ狭山を殺した。

そんなお門違いの怒りを一笑に付す。

降参したか？

していない。

戦闘不能だったか？

雪音の常識に照らせばまだ戦えた。

だから反撃を受ける前に止めを刺した。

それだけだ。

認識の相違が有ったにせよ兎や角言う言われる筋合いは無い。

大体、負け犬に何かを言う権利があるものか。

死人に口無し、流儀を主張したいなら何をして勝てば良かったのだ。

頭をかち割られても雪音は文句を言わないし言えなくなる。

「おいおい、ガツカリだぜ爺さんよ。タマを潰されても腹綿を溢しても戦うのが俺達剣士じゃないのか？ ええ？ 違うかい？」

壁に掛けられたご立派な理念と戒律の木彫り看板を目で笑い、木刀で殴り割る。

にこやかだった表情を一変させ、憤怒の形相で欠片に至るまで破壊した。

「……くだらねえ、なーにが活人剣だよふざけんな。くたばれ。あいつを、あいつの才能を腐らせた道場なんて糞だ。だから潰す」

半ばから折れた木刀を放り出す。

不殺の象徴を打ち砕いても雪音の癩気は収まらない。

「牡丹は俺より強くなれた。俺を斬れた。それがなんだよあのザマは!?! なんであんなに弱かった!?!」

この場に居もしない牡丹をなぜ知っているのか。
対戦しているからだろう。

先日にも満身創痍で帰還した牡丹を痛めつけていたのは他でもない己だと明かした。

牡丹は器量もよく才気に溢れてとみに可愛がられた。

腕は同じく門下生の両親すら上回り、同門では最高位の使い手として愛されていた。

それをあれだけ傷つけておいて、まるで牡丹を憐れむような口調で神納流合戦兵法を罵った。

傍目には支離滅裂な狂人としか映るまい。

「……剣に狂っておるな」

「それが? 弱いより良いよ」

何をか言わんや、雪音は淡々と言葉を返す。

「先生っ! どうかお願いします、やらせて下さい! こいつだけは私の手で……!!」

「……裏手の涸れ井戸はまだ潰しておらぬな?」

白髪交じりの男が継り付く勢いで鬼兵に頭を下げる。

目尻には涙すら浮かべた悲壮感を漂わせた懇願に、鬼兵は訊き返す。

過去を知らずに過ごしていた若手の門弟も歴史の暗部を思い知った。

「はい、来たる日の為に残しておりました……!」

「……全ての戸を閉じよ。皆の者よ、如何なる犠牲を払おうと、その男を生きて帰すこと罷りならんと心得よ」

不殺を誓った筈が、鬼兵がそう告げれば『殺す』となればその凶器

は刀以外には思いつけない剣士の集いは殺気立つ。

若衆が鎧戸を落とし嚴重に施錠する。

持ち出された刀の刃に蛍光灯が反射する煌めきに雪音は囲まれた。

厳かに冷静な鬼兵を除き神納流の門弟は一様にぎらぎらと殺意を募らせる。

昨日の雑兵共とは比較にならない研ぎ澄まされたそれを一身に浴びた。

「よもや卑怯とは言うまいな」

「むしろありがとう、アハッ！」

戸締まりは雪音を閉じ込める為ではない。

外から水を差されないようにだ。

仮にも人道派を謳う神納流が他所様には見せられない報復をしよ
うと云うのだ。

寄つてたかつて殺して、これまでのように井戸に投げ捨てると云う
のだ。

敵討ちを懇願した年嵩の男が白羽を翳してその筆頭に立つ。

似た年齢の女も隣で構えていた。

今は憎しみに歪んだ顔も、利発な牡丹の面影がある。

「お前が、娘を……！」

「ああ、もしかして牡丹の親父さん？ いやあ、その節はどうも。

ひよっとしたらそちらはお母さん？ 娘さんとは仲良くしてもらっ
てます」

「どの口でほざく、この外道が！」

「よくも、私の子を……」

愛想良く挨拶して返って来た恨みがましい視線を侮蔑する。

溢れる剣才を飼ひ殺しにしてなにか活人剣か。

いくら本性を隠したとて一皮剥けば貴様らも獣だ。

醜さを嫌悪して遠ざけ目を逸らした潔癖の先にあるのは無力な脆
さだけだ。

今の牡丹が正しくそうではないか。

「あははは！ そんなんだからあんたらは負けるんだよ」

言い終わるが早いか、凧丸抜かれていた。

瞬く間、ただ大きな一步を踏み出し居合が二人の腹を薙ぐ。

「あっ……!?!」

先に抜いたなら反撃に全員斬り殺しても夜鹿への言い訳が立つ。

渚を使うまでも無い。

夜霞で幻惑する必要も無い。

反応が遅過ぎる。

興奮を律していなければ息は上がり視野が狭まって技は大きく乱れる。

狂騒に操られて立脚点を失った剣士の末路など語るに及ばない。

「卑怯者！ よくも、よくも!!」

先に抜いて囲んでおいて飛び出す的外れな憎悪を浴びるも全てが馬鹿馬鹿しい。

一人二人やって血も見せてしまえばもう止まるに止れず。

ひたむきな男達は義と狂に乗せられて行く。

後は屍の山だ。

真に愚か。

剣兇という猛獣と同じ檻に飛び込んだのがまだ分かっていない。

全員で押し合いへし合いのもみくちやにしておけば最悪でも何人かの犠牲で雪音は殺せたものを、馬鹿真面目に何人かずつの斬り合いを繰り返すから取り返しが付かない。

集団戦の何たるかを学ぶ機会も無かったのだろう。

徐々に流派の手の内を見せてくれるのだから勉強が捗っただけ。

「もうおしまいだよ、ナマクラ共」

対多数の殺戮の術にも長けた雪音は老若男女を見逃さない。

多様な流派が乱立する現代から無駄な一門を間引いてやろうと云うのだ。

善行を積んでいる気すらしている。

才人の脚を引っ張るのが絶対的な悪であると捉えるが故に。

人命の尊さなど母の墓の中に忘れてきた。

残る一人の家族が無事ならばその他の万事に剣が勝る。

剣に誠実か、手を抜かず努力しているのか、そこだけに善悪の尺度が存在する。

そうあれかしと育った。

綺麗な事を並べるだけの神納流は論外だ。

斯様な剣の鬼に、常識に絆された只人が敵う道理も無い。

まさしく蛮勇。

そうなるべくして一門は崩壊に向かった。

PART 20

雪音が一刀を振り翳す度に滅びゆく者達の呻きが道場に溶けていく。

日本刀は万全であつてこそその鋭利な斬れ味であり、血と脂が絡むと斬れなくなるといふ説がある。

刃物の特性として一部は事実であるが、それらを唱える者は競技と合戦の違いを理解していない。

懐紙を出す猶予が得られずとも雑巾ならそこら中に落ちているのだから手早く拭けば良いだけの事。

骨に当たつて刃が欠けるといふのも未熟な使い手の問題だ。

突きひとつを取つても剣を寝かせて肋骨の隙間に滑り込ませる工夫で摩擦を減らせる。

首を刎ねても頸動脈を浅く裂いても死ぬ事には変わりない。

事実、雪音は尻丸を歪ませたり刃毀れさせたりしないで門弟十二人を十数秒で斬り捨てた。

それなりの稽古をしていても、死人の出ない畳の上の上手さと恐怖の伝染する実戦の強さはまるで別物だ。

そして雪音は両方を兼ね備え、果敢に攻めた者も怯え立ち竦んだ者も全てが尻丸の錆となつた。

天井も戸板も血飛沫が彩る。

「さあ爺さん。あんたは強いのかな？」

半端に型通りやつてくるものだから神納流合戦兵法をじっくり学ぶ良い機会になつた。

残るは一人。

牡丹の祖父、出義鬼兵その人のみ。

当主と戦うのは父親以来。

狭山に使つた夜霞はじつと観察されていたのでそれ単体で通用すると思えない。

神速の居合も間合いを見せている。

幻影を見せる材料は揃つた。

だが《魔劍》は使えない。

「あれがお前の手に負えるか？」

止めようのない惨劇を座して静観していた鬼兵はやっと剣を執った。

皺の刻まれた体を老いさらばえたと侮る無かれ。

鍛えられた骨肉は正確で、感覚の鋭さも雪音の本性を看破する。

恐らく同格の剣士。

「あはっ、俺はどっちでもいいんだよ」

雪音は興奮に打ち震えた。

強者と戦い斃し糧とする。

例え果てようと、より高みを視ただけで本望。

生と死の狭間に生きるが剣客の宿業。

剣とはなんと素晴らしき哉。

「……問答は無用か。出義鬼兵、相手になろうぞ」

大刀剣時代の開闢期を渡り歩いた古強者はひたひたと進み出て構える。

中段のゆったりした構えは懐が深く、不用意に飛び込むのは拙い。

鬼兵は先の戦いで撥ねた血が落ちていない空白を選んでいる。

活人剣を謳う癖に、明らかに命懸けの戦いに慣れている。

美しさの中の獰猛さが隠せていない。

若しくは、弟子を塵殺され隠す必要が無くなったのか。

三味線弾きの狸爺め。

「ひっでえなあ爺さん、不殺なんてどの口で言ってるんだか」

重心は前にある。

前進を念頭に置いた攻撃の体勢だ。

雪音は返り血もそこそこ浴びており、当然足の裏も血のぬめりがひどく踏ん張りが弱い。

更に血に濡れた接地面では反発で速度を出す居合は封じられたも同然。

血の池を越えて斬り掛かっても加速が足りなければ返り討ちに遭う。

対決の条件はかなり悪い。

しかし雪音は夜霞も使わず遮二無二突っ走った。

絶体絶命こそ面白い。

不規則歩法を自在に操れるなら、血が無い僅かな地面を駆けるのは造作もない。

斬るも八卦、斬られるも八卦。

いつものような勝ちが決まった勝負ほどつまらないものもない。

雪音が本当に求めているのはこれだ。

この荒れ狂う危機の渦なのだ。

興奮状態から息を鎮め、定番である右肩に凧丸を載せた釣瓶上げの構えで走る。

七歩の助走の後に鬼兵を囲む血の轍を飛び越え狙うは居合を除いた最速の袈裟。

しやらくさい突きや受けでは全体重を乗せた剣は捌き切れない。

「そら行くぞっ！」

雪音は為し得る全力で殺しに行った。

凧丸の間合いは目を閉じていても分かる。

跳躍と併せて切先から四寸の深さが肺と心臓を食い破る軌道の弧を描く。

これを鬼兵は最後の最後まで引き付けた。

そして四半歩だけ後ろへ滑るように極低空で跳んだ。

背後にだけ血は落ちていない。

それも鬼兵の巧妙さだ。

後退して相討ちを回避した。

牡丹のようなただの躰し方ならば雪音なら二段目の斬り上げで仕留められる。

後の先で反撃しようにも、一度加速した方向を真逆に動かすには慣性という物理法則が立ち塞がり、著しく制限される。

しかして鬼兵の重心は前にのみ在った。

屈強な雪音と正反対の身軽な体をやや前傾させながら跳んでいた。

この数センチが絶妙な時間差を生む。

背負った最小限の慣性を蹴り足で消し、木の葉が舞うが如く軽やかに前へ出た。

雪音が着地してから袈裟斬りを出すにせよ、振りを変えた二段目に繋ぐにせよ間に合わない。

剣を振り下ろす雪音の腕を目掛けた突きが閃く。

それは牡丹が敗北間際に剥いた牙の真の姿。

神納流合戦兵法の後継者にのみ受け継がれる口伝。

——秘剣、綴じ蟲^{とじむし}。

やられた。

体重を剣に預けているので軌道の変更は利かない。

立場はこの一瞬で逆転した。

立て直すより先に二段目を食らう。

着地寸前に高速で術理を理解した雪音は逃げ場が無い事を悟った。

考えるより前に咄嗟に凧丸を真上に放り出す。

無理矢理に動かした反動で腕は弾かれ着地が加速する。

切先は一拍早く下がった額を掠めて無を穿つに留まった。

この機転を才能だと呼ぶなら雪音もまた牡丹に劣らない。

直面した危機をやり過ぎせても安心するにはまだ早い。

初段を躲しただけではすぐに二段目が出る。

綴じ蟲は迎撃技ながら前進しながら打つ為に追撃も容易である事

が恐ろしい。

のこのこと剣を構え直している間に刺身にされてしまう。

しかも凧丸は空中を落ちる真つ最中だ。

もうなるようにしかならないと腹を括る。

「ははっ!!」

雪音は崩れた流れに従った。

膝を沈めてもつと体を落とし、落下する凧丸を逆手に握る。

この位置からの振り下ろしでは威力も乗らず速度も出せない。

必敗だ。

無意識でそう判断した。

黒地で目立たずも血に染まったズボンの左膝で板間を滑る。

時間を与えれば何を始めるか分かったものではないのはお互い様。鬼兵と雪音は手を伸ばせば触れ合えるほど近い。

鬼兵は重さのみで額を押し割るつもりで予備動作を消して剣を振り下ろす。

雪音は腹筋の螺旋の絞りで加速させて追い上げる。

脇を締め、手首を返し、全身で前へ剣を出す。

超至近距離の窮屈な間合いにて最高速で競われた逆手の斬り上げと兜割り。

血が舞う。

賭けに勝ったのは雪音だった。

鬼兵の右脚を太腿から切断し、頭上の脅威を潜り抜けた。

片脚を失った鬼兵が倒れる。

「……見事だ」

「そっちょこそ」

断面の動脈から脈の波に沿って著しく出血していく。

意識を失い死ぬまで十分とかかるまい。

勝ちはしたが薄氷の勝利だ。

老獪さは鬼兵が圧倒したが雪音は若さの分だけ瞬発力で優れていた。

狙いを脚へ変えたのも功を奏した。

逃れられない死を前に老剣士は天を仰ぐ。

「冥途の土産に一つ訊く。牡丹は……あの子はどうする」

「心配ご無用。俺が爺さんの代わりに面倒見るよ」

鬼兵は死の間際に牡丹を慮った。

万死に値すると知りながら、牡丹に眠っていた斬り合いの才に不殺の枷を嵌め、抑え込める範疇に留めて育てた。

鬼兵は剣を通じて牡丹の全てを知っていた。

内に潜む獣性も苛烈な攻撃性も知っていた。

それらを理念で囲み牡丹自身へと仕向けさせ清廉な乙女の皮を被らせて誤魔化した。

故に、真に解き放つ者を待っていた。

この祖父からだけは、牡丹は本当の意味で大事にされていたのだなと気付いた。

同じ視点を持ってなかった両親や友人には上辺しか見えなかったのだろう。

「底に眠る獣を放つか」

「敵は強けりや強いだけ楽しい。でしょ？」

「数奇者め」

「お互い様じゃん」

「かかっ……。牡丹は良き剣士と成ろう。幼い日から聡い子だった」
してやったりという心地良きで厳しい顔を緩め、久方振りに笑った。

この男ならば愛孫を託せる。

手足が冷えていく侘しさの中で鬼兵は確信した。

息子夫婦にも語らなかつた孫への愛を生涯でただ一人明かされた雪音は、傍らに座して旧知の仲のように朗らかに語り合つた。

「なんでえ、結局は孫自慢かよ」

「半死の老いぼれの戯れだ。もう暫し付き合え」

「へいへい、分かつた分かつた。ついでにこないだやつり合つた時の話もくたばらねえで聴けよ？」

「見縊るでないわ」

それから牡丹のあれは良い、ここが凄いと二人して褒めそやし合つた。

孤独な狂戦士と凡百より多少ましな剣士のどちらが幸福かを考え、心を鬼にした。

心を鬼にして教えなかつた。

己が猛獣ならあれは怪獣だ。

それでもめきめきと腕を上げ、雪音の話の中では教えなかつた一門の秘剣にすら独力で漕ぎ着けたと。

聞くだに恐ろしい。

しかしこれからは雪音が居てくれる。

孤独でさえなければ冥府魔道に堕ちず人のままでいさせてやれる

だろう。

それが若き死という形の終わり方であるとしても。

腹の中を打ち明けられた無謬の安心に鬼兵は安らぎ、目を閉じる。

「そろそろ逝くとしよう。土産話を地獄で楽しもうぞ」

それきり鬼兵が口を開くことはなくなつた。

牡丹は任せた。

先に逝く。

剣士として、孫を想う祖父として最期の答え。

活人剣にうつつを抜かすには惜しいほどに備えた牡丹の空前の才覚が真実視えていた。

生来の激しい気性を受け止める男が現れた今、枷の役目は終わるだ。

雄飛の時が来た。

後を継ぐと告げられた出義鬼兵は満足げに事切れた。

「あんたとなら地獄でもまたやりたいな」

鬼兵の手にはまだ剣が在つた。

責務を解かれ、きつと獄卒の鬼共と嬉々として斬り合いを演じるのだろう。

もし天国に行かれてはまた会えないので手は合わせずにおく。

それにしても、たつたの二手で得た充足感は素晴らしい味わい深さを残していた。

弟子は揃いも揃って腑抜け共だったが、この老人だけは真の剣客だったと認めよう。

あの牡丹にして鬼兵あり。

神納流の裏の顔、存外に悪くはなかつた。

名も知らぬ死体の裾で風丸の血を拭い納める。

型破りな太刀筋をしたが肉厚の刀身は素直に仕舞われた。

折れて捨てた木刀の破片も拾って物的証拠を消し去つた。

絶頂後の余韻にも似た緩い快感に浸りつつも後始末を忘れない。

雪音は無音になつた道場を去つた。

帰つたら愛刀の手入れをしつかりする予定だ。

「あとは仕上げ♪」

まだ家には帰らない。

ご機嫌な足取りで電車を乗り継ぎ街から街へ移動する。袋に入れた剣を帯びていても、こんななにこやかな青年が武門を滅ぼした直後の剣士だとは他の乗客は夢にも思わない。

色合いが奇妙になったズボンの血痕も見つからず、夕方にはまた闇市まで帰って来た。

闇市の浅層で営業するいつもの肉屋でお気に入りのコロツケを買う。

遅めの昼食と午後のおやつを兼ねてだ。

「ありがとよ、いつものも付けてやる。そういや兄さんを探してる女の剣持ちが居たぜ？　ありやあ仇討ちかなんかか？」

「たぶんそうなる。いじめて怒らせてみる所だなんだよね」

「……聞かなきゃ良かった」

手を振り去った雪音から漂う濃厚な血の匂いからして、虐める度合いが軽い訳が無いと店主は閉口した。

牡丹の澆刺とした美貌が包帯に包まれた痛ましい姿を思い起こす。

翩った雪音はやはり剣兇なのだ。

「別嬪さんだったのに、勿体ねえなあ」

剣兇に狙われるだけで間違いない死が迫るのに、更に自分から会いに行くのは正気とは思えない。

絶対に殺されると店主は確信した目を雪音の背に向ける。

背中を見られながら歩く雪音が旨そうに頬張るミートコロツケは、入っている謎の挽肉が旨さを引き立てる傑作だ。

小遣いの範疇での買い食いは夜鹿も怒らない。

立地的にも通いやすく、この店は雪音のお気に入りだった。

店主も当初は剣兇に目をつけられたと戦々恐々としていたが、立ち合いや怒らせでもしない限りは非常に温厚な雪音の人柄を知ってからは慣れたもの。

旨そうに食べるのもあつて多少可愛がっている。

しかも最近はおまけでメンチカツをくれたりするので雪音として

は悪人ではないと懐いていた。

好物を楽しく歩き食いしながら肌を刺す西陽の中を河原まで歩いた。

土手で上下流を見回して橋桁の袂で今朝と変わらぬそれを見つけて安堵する。

「ふふ、まーだやってんだから偉いんだかバカなんだかわかんねえや」

呆れながら嬉しそうに土手を下り、河川敷公園の屑籠にコロツケの包み紙を捨てた。

PART 21 デイ・バイ・デイ

身体が熱い。

呼吸が酸素より排熱を求めた行為になるまで出義牡丹は素振りを繰り返していた。

胸には憤り。

敵の言葉を信じて励む奇妙な構造で鼻息を荒らげている滑稽な有様が腹立たしかった。

どうしてももっともっと稽古をしていなかったのか。

祖父に誓って手を抜いた事はない。

ただ、足りなかった。

同世代である雪音が一朝一夕で身に付く筈の無い技術を駆使する様を目の当たりにしてそれを思い知らされた。

夜な夜な出掛け満身創痍で帰宅した愛娘を両親は心配して問い質されたが、何も言えなかった。

言えるわけがない。

勝って来るぞと勇ましく出たはいいものの身の程知らずの軽挙だったと、どの面を下げて言えようか。

志も背負う物も無さそうな狂人に負けたのが悔しくて悔しくて仕方なかった。

だから今までの遅れを少しでも取り戻せるよう指紋が擦り切れるまで朝な夕なと刀を振る。

息が詰まるまで振って振って肉刺^マも潰^メし、柄巻を血で濡らして雪音の背中を追う。

昨年まで安穏と通っていたとは高校と別世界の苦い焦燥だ。

「逆島雪音……」

備えず安穏と生きていた過去の自分を口汚く罵りたかった。

なぜ祖父に教えを乞わなかったのか、募る後悔は汗となって胴着に染みを増やす。

牡丹は現在苦境に立たされている。

刃傷沙汰全盛の時代に机上の空論と馬鹿にされる神納流の道場は

門下生が集まらず家計は火の車。

借金で資金繰りをしてきたが、債権は不貞な輩に回り嫌がらせのよ
うな催促を受けるも返す金もない。

両親が共働きで仕事をして元本が膨らみ返せる見込みは無い。

このままでは差し押さえられて道場の歴史に幕が下りる。

そうはさせない。

祖父の興した神納流を潰えさせたくない。

その一心から普段なら近寄るのも憚られる悪党の巣窟、闇市に向
いた。

参加するのは他道場での出稽古で耳に挟んだ命懸けの地下大会。

家族にも秘密で金を掴みに行き順当に勝ち上ったが、未来は剣兇の
手で閉ざされた。

豪快かつ緻密な剣技に加えて仔細に種を明かして尚も猛威を振る

う《魔剣 渚》。

あれを初見で迎え打てる者など居ないだろう。

大きく動いて躲せれば御の字だが体勢を崩せばすかさず続く二刀
目で斬られる。

受けに回ってもあの居合を出し抜く反撃の術がない。

人というものは動作の前に少なからず意を発する。

神経系から漏れた生体電流か、はたまた体の強張りの偏りか、その
正体は明らかでないが間違い無くそれらは実在する。

見切りを極めつつある雪音は勿論、優れた剣士や武術家は相手の漏
らした意を読み、一瞬の交錯を制する

その意を徹底して隠す方向へ突き詰めたのが《魔剣 渚》の極意。
相手に読ませずして自らだけは利を得る。

都合の良い無敵の代償にその難度は人の身に有り得べからざるも
の。

人格を分離して評価するなら、実現した雪音の努力と執念と才能に
は驚嘆すら抱く。

読んで字の如き兇^{まが}き剣。

二つ名の由来を表す恐ろしきものだった。

完敗だ。

自身に勝ち目は無かった。

その事実がより苛立たせる。

己は勝たねばならない。

道場を立て直す為に勝って金を得る。

そして受け継いだ沽券も守る。

あの魔剣士を相手にどうやって？

堅実に積まれた基礎を支点にした《魔剣 渚》は奇策無しでは崩せない。

本来の居合という技術自体は不意打ちや咄嗟の護身が主眼にあり、正面からの切った張ったで最速を求めたものではない。

重力加速度を使える振り下ろしの方が物理的に速いのは科学的根拠に証明された事実だ。

しかし現代では居合に拘る使い手が一定数居る。

それは、初対面時に生死を分ける間合いの読み合いで刀身を手元や背後に隠せる利点が余りに大きい。

どこまで肉薄してよいか探るにあたり、間合いは非常に重要な位置を占めている。

手札を増やしただけの藤間とはそこが決定的に違う。

実際に《魔剣》を受けた牡丹が生きているのも雪音の気まぐれな手加減があったからこそだ。

これまでの犠牲者は術理の影すら踏めず死んだ。

慢心か寂しさか、雪音は《魔剣》の種を懇切丁寧に明かして相当の有利を捨てた。

それである様だ。

まだ怒りは収まらない。

自分の愚かさに向けた怒りが燃え盛る。

伸びた雑草を半狂乱で刀で殴り付ける姿に通行人は遠く怯えた。

決闘と仇討ちが流行る荒んだ剣士の都でまた一人何かの不幸を背負った女だ。

目を血走らせてはぶつぶつと独り言を繰り返して刀を振り回す。

容姿が優れていても、お近付きにはなりたくはあるまい。
下手に関わって不幸を貰っても仕方無い。

触らぬ神に祟りなしと事情すらを誰も聞こうとしなかった。

「どうして……っ！」

不意に気持ちを昂ぶらせて刀を無軌道に振り回して草を刻む。

盛大に負かされた胸中は穏やかでなかった。

恐怖は少ない。

多いのはからかいや雪音の無法への怒り、そして自責の念だ。

同じように死ねたらどれだけ清々したか。

生き延びた達成感など忘れた。

力及ばず殺される覚悟はしてきたが、殺人剣に手加減されて鬨り者にされる覚悟はしていなかった。

それがお株も奪われて、あのにたにた顔で帰り道ではまた何人も斬り捨てたと聞いて完膚なきまでの負けを実感した。

剣術家の誇りや思想が薄くとも相応に背負ってきた看板を穢してしまった悲しみは深い。

視点を翻し建設的に物事を見れば生きて情報を得ることに成功し次回に勝負を預けた。

尋常な決闘で倒した相手を生かす割合は非常に低いにも関わらず。通常、剣士は通り魔でなければ近い実力の持ち主と戦うもので、悠長な手加減などまずしてられない。

故に禍根を残し手の内を晒して何度も見逃される事象は少ない。

雪音の驕りでもあり自信や孤独感の表れでもあろうか。

雪音が語る才幹が真実牡丹に備わっているなら、いつか彼を倒せる力が宿るだろう。

それでも今は無理だ。

握りはこれで良いのか、足運びは間違っていないか、剣筋が狂ってないかと確かめて絶望する。

今更と言いたくなる重箱の隅をつつけば微小な向上は見られる。

振りは速くなりより効率的な立ち回りが見える。
しかしだ。

短く見積もって十数年の着実な稽古を短期の集中で上回るほど人間は優れていない。

雪音の期待は重すぎた。

答えが無い問題に直面すれば牡丹の決意も軋む。

「出来る出来ないじゃない。やるのよ」

だが緩んだ握りを強固に歯を食い縛る。

まだ指と眼差しには生気が在った。

牡丹は規則に厳格で真面目に通学し、優れた容姿で言い寄られる事も有ったが実家の事情を知ると男は逃げた。

喧嘩の一つもせず躰在化しなかった故に、剣士の本能である反骨心を鬼兵だけが知る。

力量差を分からされ鋼の刀身で滅多打ちにされようと、悲劇の主人公を装ったりなどしない。

雪音は不殺の剣を馬鹿にした。

難しい顔で口数も少ないがじつと様子を見てくれていた鬼兵が大好きだった。

行き詰まって考え込んでいると言いにくそうに解決の糸口を与えてくれる男だった。

その祖父を笑った。

単純な話だ。

素性の怪しい狂人に大切なものを貶された。

牡丹の怒りを買うには十分だ。

目をつけられたそれ自体の不幸を無視すれば、雪音は理解不能な理由で手を抜き、こちらを殺すつもりは無いらしい。

であれば体当たりで試行回数を増やして《魔剣》を使われるまでになんとかかすればいい。

樂觀視という処方で過剰に働く鼓動を緩ませる。

屈辱よりも実利。

生娘としてその程度の打算は立った。

賞金を携えた雪音が来るのを今か今かと待ち侘びて滾る思いを鎮めた。

袴の裾から滴る汗を風いだ河原にどれだけ吸わせたか、気が付けば夕暮れだ。

帰宅して食事をしたら夜稽古が待っている。

今から帰っても着く頃にはそこそこ遅い時刻だ。

休学以上の親不孝は心苦しい。

ここには橋の振動と川のせせらぎと虫の音だけしかない。

昨日も一昨日もその前も。

今日も雪音は来なかった。

明日は？

来ようが来るまいがそんな事は関係ない。

気分を害するだけの無意味な想像を振り払う。

諦めてなるものか。

現状で大金を得られる唯一の方策だ。

冷静に帰り支度を始める牡丹が内に秘した執念は神に届いた。

気配を感じて見上げるとそれはそこに居る。

「おはよう牡丹、俺とあーそぼ？」

希望の影、絶望の化身が夕陽に浮かんでいる。

無垢なる笑顔の裏に爛々とした欲望を引っ提げて。

祈りが届いたとしても救いには遠く、また神は神でも崇り神の手合

い。
牡丹の心臓が無秩序に沸き立った。

PART 22 ファーリング・フォー・ザ・ファースト・タイム

雪音は瑞々しい微笑みで土手を下る。

足取りは軽く、無邪気な暗黒の愉悅を滲ませる。

絶望に飲まれまいと我武者羅に打ち込む様子は実に美しく、味見をしなくなった。

「おはよう牡丹。俺とあーそぼ？」

牡丹に呼びかけ、間合いが交わる手前で立ち止まる。

河原の野花から摘み上げた天道虫に指の上を歩かせぶらぶらと立っている。

「……逆島、雪音……！」

ここで会ったが百年目とでも言いたげに唸り、辛辣な眼差しで雪音を睨んだ。

牡丹から見れば支離滅裂であり、そもそも社会通念上の正常な感情を持つているかもわからない。

揺るぎない意志に導かれる動作に昆虫的な不気味さを抱かされている。

風上に立つ雪音から血と汗の混ざる仄かな死臭を感じ、また誰かを斬ったのだろうと牡丹は歯噛みする。

理不尽な《魔剣》の術理を崩す策は未だ無いが戦意の高揚は著しい。

その意気や良しと雪音はまた微笑む。

闘争本能が旺盛で大いに結構。

しかし鬼兵の薫陶の賜物か真面目が過ぎる。

善悪に囚われた賢しらかな知恵など壊してしまう方が良い。

「また遊ぶって約束したろ？ ちゃんと来たよ」

「……」

牡丹は歯を食いしばり、聞くに堪えない罵詈雑言を飲み込んだ。

「……なんか怒ってる？ お金持って来てないから？ あー、多分違

うよね。ごめん」

雪音の表情は賽の目のようにころころと変わる。

怒鳴り付けられた記憶から少し警戒して顔色を探るや、誤魔化せないと知るとすぐに軽く頭を下げた。

怒られるのは嫌いだ。

共感し得ない理屈で叱られても嫌悪しか残らない。

これが牡丹でなければ即座に叩きのめしている。

中指の先から天道虫が飛翔する。

牡丹は刀を握り直し雪音を睨む。

家族と仲間の居場所を守る為なら多少の悪事は働く覚悟だった。

どう見ても金は持っておらず今日戦う意味が無いと知っていても、今すぐに斬りつきたい欲求は実在した。

薄羽で不規則な軌道を舞う虫に気を取られず闘志を漲らせる。

仕向けられる気迫に免じて手本を見せてやろう。

狂える時代が生む特異点に咲いた徒花は妖しく笑い。

崩れ落ちるような脱力。

脳天を吊る糸を断たれ倒れる操り人形を彷彿とさせる自然さで、雪音は前方へ出た。

同時に腰を切って右腕が唸る。

数多の命を啜った凧丸は刀身を玲瓏な朱に染める夕陽の中を奔った。

牡丹の首の高さへ飛び上った天道虫が真つ二つに両断され視界から消し飛ぶ。

凧丸の切先は喉の柔肌まで十数センチの空間を通り過ぎた。

これはただ無拍子で打っただけの芸に過ぎない。

牡丹なら反応して飛び退いてもおかしくなかったが、弾けた天道虫の体液が頬に跳ねてやっとなにに返った。

鞆口に切先を戻した雪音は顔を顰める。

渚であれば首が飛んでいる。

「あれ、今日調子悪い？ 深呼吸してみたら？」

些か残念に思った。

体が完調でない事をではなく、心に乱れがある事である。

娑婆つ気の裏に隠れがちながら、あの押しの強さからして牡丹の秘めた気性はかなり激しい。

濃厚な雪音に無い強味だがそれを使いこなせていない。

アドレナリン等の賦活作用を起こす脳内物質に慣れていないで過度な興奮に飲まれている。

過集中で体は強張り視野も狭くなる。

実戦の如何なる場合も乱さない心はそれに臨む者として必須。

生命や矜持を賭した本当に後が無い戦いをしてこなかったツケを牡丹は払っている。

しかし未熟も当然。

本来は鉄火場に染まらぬ生涯を送らせるつもりだったのだ。

剣は人を斬る道具。

本当に生きた相手を斬ってこそ真に使い方を理解出来る。

傍目にはそう見えなくても、雪音にも手当り次第通行人に襲い掛からない分別はある。

しかし全力の対人戦でのみ得られる知見がある。

ならば斬る。

だから斬る。

探求に行き詰まった者が互いに納得して立ち合って何が悪いのか。肉親すら斬った生き方を批判されれば気の良い雪音も不愉快さを覚える。

才能を育み見守れる師は牡丹を取り巻く環境には居なかった。

呪いたいほど口惜しい。

可憐な容姿をして、出義牡丹は真正の怪物である。

直感のみで必殺の《魔剣》を防いだ異次元の傑物だ。

難しい目標だが本物の剣兇に刺激され数日の間に急速に実力を高めている牡丹なら十分に成せた。

神納流の高弟を殺め、手の内を知り尽くした剣兇が相手でなければ。

《魔剣 渚》の発動が無くば雪音とて三つに一つは危うい。

だがそれも昨日までの話。

良質な生きた教材を消費した雪音の實力は牡丹を置き去りにした。絶世の才覚を殆ど腐らせていた牡丹に対し、雪音は狂氣的な稽古を二十年、何万時間と積み重ねてきた。

努力は雪音に報いて力を与えた。

劍兇の二つ名は伊達ではない。

卓越した技量、戦術、胆力を有し、欠けていた情報という欠片を埋めた鬼才に並ぶのは如何に牡丹でも不可能だ。

教えるなんて柄でもないが、初めて会った日から一日たりとも忘れられないあの数分に詰め込まれた魅力がそうさせる。

牡丹に秘められた輝きを知った高揚を思い出すと心臓が震えてくる。

殺しはしない。

好感を持ち、それでいて冷徹に振る舞える思考構造が雪音を劍兇たらしめている。

「あーもったいねえ。ちゃんと鬼兵の爺さんに教つとけば良かったのになあ。あんな尖ったジジイ今どき見ないぜ?」

「……………なんで、あなたがおじいちゃんの名前を知ってるの?」

「さあねえ? 結構遠かったけど、もしかしてあそこからここ通ってるの?」

問いをはぐらかすと、かたりにかたりと鏢を揺らして固着した血の粉を落としてみせた。

服の染みと良く比べ、酸化した血液の黒さだと分からされる。

注目すれば一人二人で済まない返り血の飛沫を浴びている。

そんな馬鹿など否定しても、目の前に揃っている状況証拠が牡丹の中で点と点を結ぶ。

この劍兇ならやりかねない。

やってしまうだろう。

悪しき確信が湧いてしまった。

「そんな……………嘘……………嘘よ、そんなの!!」

「へへ、手強い爺さんだったよ。でも俺にかかったら年寄りだろうが女だろうが、ずんばらりだ。あそこに居たのはどいつもこいつも斬つ

ちまったね。あはっ！」

不殺を掲げておきながら、いざとなれば寄つてたかつて得物を抜いた戯けた半端者だ。

雪音は彼等を軽蔑する。

理想を貫く力もなく、感情で理想を曲げた。

鬼兵も呆れてしまうのは無理もない。

死を覚悟したあの老いぼれだけが本当の剣士でいた。

そうでなければ赤の他人の名前など雪音が覚えるものか。

「でも復讐はしないんだろ。教えに逆らえない良い子ちゃんの牡丹は。活人剣つてのはご立派だねえ？ ついでに親父さんとお袋さんにもよく挨拶しといたよ。そしたら娘をよろしくだつてよ？」

造り物のにやけ面であの夫妻の末路を揶揄した。

「黙れ！」

「俺の親父を思い出したね。ご丁寧に色んな技も見せてもらっちゃつてさ」

「黙れええっ!!」

雪音の凶行は牡丹の中の教示の一線を優に超えた。

憤怒に駆られ刃を返すことも忘れて抜き打ちで斬りかかった。

今朝も何気なく会話した家族や友人はもう居ない。

話すことも稽古を共にすることも二度と出来ない。

夢か現か、暑気に当てられた幻覚であつて欲しかった。

感情に支配され過ぎた剣は精彩を欠き、軌道を見切るのは雪音の眼には容易い。

隙だらけの腹に容赦無く拳を叩き込む。

「うっ、げえ……い！」

「どうせ昼も食つてないだろ？ 飯はちゃんと食わないと身体が弱る」

吐き散らした透明な胃液を見て空っぽの胃袋を見透かした。

悶える牡丹の喉を掴み、その体を片手のみの腕力で吊り上げる。

「力が出ないなんて寝言は聞きたくないぜ。俺が憎くて憎くてしょうがないんだらう？ 殺したくて殺したくて堪らないんじゃないのか

よ」

哄笑から一転し、冷淡に首を締め上げた。

刀を離さない右腕も抑え、橋脚に押し付ける。

「くっ、かはあっ……い！」

「なんだ今の腑抜けた剣は。目を掛けてた孫がこんなザマじゃ、爺さんが地獄で泣いてらあ」

完調の戦いを望むのは間抜けだ。

連戦の果てに強敵と出くわすのはままあること。

疲れているから、具合が悪いからと温情の手抜きを相手に求めるのはあり得ない。

ただし、雪音の目的が牡丹の成長という酔狂をしている今は例外だ。

すぐに斬るつもりはない。

厚く覆い隠した天与の攻撃性を引っ張り出し、洗いざらい丸裸にしてやりたいのだ。

それを喰らってこそ立ち合う意味がある。

「素振りだけでやった気になってのうのうと過ごしてさあ、それで俺に勝てるよと本気で思ってたの？　目を覚ませよ。温い馴れ合いやつてた癖に剣を抜くからお仲間と家族は死んだ。じゃあ何が必要か分かんだろ」

嘲りとも落胆とも取れる悪態をつき牡丹を河原の砂利に投げ捨てた。

受け身もままならないで全身を強かに打ち付けたが、それでも剣を離さない。

苦痛に負けじとすぐに体を起こしてこちらを睨む。

それが嬉しくて、もう一段速度を上げる。

「あはっ！　今度は避けなきや死んじやうぜ！」

足の指まで気を巡らせた細かな三步の踏み込み。

そして渚は放たれる。

肉体も精神も疲弊した牡丹には、我流秘剣渚の何も見えなかった。予兆を感じられもしなかった。

それでも飛び跳ねて、死の間合いから最善の瞬間に逃れた。
執念だ。

悲しみに勝る怒りが成し遂げさせた。

「ほら、やりやあ出来んじゃない」

汗に砂埃をまぶした姿で這いつくばる牡丹を直接的に褒める。

薄汚れた中に神々しい美しさを見た。

彼女はあやふやな根性論で殺意を持って振るった剣を避けたのではない。

山を張るなら跳ばせてから半歩遅らせた抜刀で悠々と斬るだけの事。

無意識的に牡丹は恐怖を捻じ伏せて引き付け、雪音が抜刀するに先んじて発される意を逆に読み、見事に躲したのだ。

素人目には分からない桁違いの芸当を土壇場で披露した。

意の極み、読んで字の如し極意。

最早常人には理解し難い眉唾の領域。

雪音とて至るまで狂気の猛稽古を十余年も要した階梯へ、超特急で飛躍する天賦の才覚には武者震いを禁じ得ない。

なんと美しい化け物め。

興奮とも快感ともつかない愉悦が雪音の瞳を潤ます。

「殺す………お前だけは殺す！ 逆島雪音え!! 腸はらわたを抉って、首を落として、必ずお前を殺してやる!!」

胃液で酸い口から吐かれる、殺意を沸き立たせ呪う怒声は蟬時雨を掻き消した。

牡丹とて涙を流し、弱音を吐き、さめざめと嘆いてしまいたい感情は当然備える。

しかし目には目を歯には歯を、暴虐には暴虐を尽くせと心が吼える。

汚辱と怒りと悲しみを雪ぐ事に執念を燃やす、復讐鬼の気炎が見えて雪音は恍惚とした。

限界に挑む猛々しい形相は以前の澄ました顔より余程魅力的だ。

先刻とは見違えるような良い顔立ちに変わった。

視線だけで、殺気だけで、首筋に突きつけられた白刃を想起させる。雪音は造っていた偽りの表情を捨て、ありのままの逆島雪音として穏やかな声音で想いを伝える。

「そうだよ、だからお前が良いんだ」

雪音は悲しくも自身の才能の頭打ちを自覚している。

死地だけが次の段階への糸口を与えてくれるが、《魔剣》の完成と共に危険な戦いを享受する事は至難となっていた。

《魔剣》を破り得て、命を脅かし得た獅子吼と鬼兵の二人は死んでいく。

もう斬ってしまっている。

齡二十三の自分と同程度の技量しかない年嵩の剣士を訪ねて歩いた所で、失望が降り積もるばかりだった。

皮肉なものだ。

勝利し練達を望んで編み出した《魔剣》は展望を狭めてしまった。知る中で最も期待できる生者は牡丹だけだ。

今となつては心は申し分無い。

素質がある巨大な原石ならば磨くまで。

その結果墓穴を掘ろうと一目見られればそれで良い。

勝ち残ったどちらかはより高みへ至る。

己にはこの剣士が不可欠だ。

もっと見ていたい。

この気持ちは何で有るのか、雪音自身には分からない。

「今日はおしまい。続きはまた明日。いつか殺せるといいね？」

まるで草野球の約束のように殺害予告を受け入れる。

凧丸を鞘に納めて一撫でし、会釈して立ち去る。

足取りは軽い。

剣客同士の決闘の合意を恋と例えるのもあながち間違っていない。

牡丹は雪音を忘れたくても忘れられず。

雪音は牡丹に好意を持って期待する。

正邪を捨て置けば両片想いの恋とも呼べよう。

はしやく雪音の一方、牡丹の心に残ったのは果てしない怒りだ。

捨て台詞も出やしない。

あらん限りの呪詛を吐いた所で崇り殺せるでもなく、牡丹は薄汚れた格好で惨めに蹲った。

食後、夜鹿はソファで酒盃を傾けていた。

かなり飲める口だが肴も無しに呑んで顔を火照らせ、考えに耽る。神納流道場で大量斬殺事件の報せを署内で受けた時は血の気が引いた。

いつか予見した日が来てしまった。

これまで目を瞑り庇護してきたのは、その筋の構成員か人斬りの剣士だけを斬っていたからだ。

だから夜鹿は自分に言い聞かせて来れた。

それもこれまでなのか。

神納流は裏の無い活人剣で善良な市民だった。

四肢が欠けた死体が十数人分も血の海に沈んでいる凄惨な現場を夜鹿は自分の眼で見た。

熟練刑事も鼻白らんだ残酷さは、愛しい雪音の側面にしっかりと刻まれていたと再確認した。

暴力団絡みの闇金業者と違い、なんら瑕疵の無い市民の剣術道場を襲撃するのは言い逃れ不可能。

犯罪史に刻まれるとんでもない惨殺劇を起こしてしまった。

後悔も然ることながら、焦点は捜査状況。

道場に残した素足の足紋は剣兇の新たな証拠として克明に記録されてしまっている。

後手に回ってばかりでも警察は無能ではない。

現時点でもかなりの情報が割り出されている。

体格が良く背も高い男。

右利き。

凶器は通常の刃渡りより異常に長く鋭利な刀。

靴の種類。

足跡の皮脂と汗から採取した遺伝子。

今日の行動が派手過ぎて手掛かりはほとんど摘み取れなかった。捜査の手は着実に迫っている。

次の現場で決定的な証拠が見つからないとも限らない。

街中の監視カメラが暴徒に破壊されたままではなかったら既に逮捕されていただろう。

経済が停滞し予算不足の自治体はその気にならなかつたのはただの幸運に過ぎない。

向かう先が破滅しかない間抜けなその場凌ぎ。

考えれば考える程に詰んでいる。

凶行を繰り返すなら、いずれ司法は剣兇を捕らえる。

知る限りでも百人を斬った雪音を処刑台から遠ざけるにはどうしたものかと悩んでも、出せる答えは毒を食らわば机まで、だ。

腐敗、汚職、偏愛、妄執。

無関係な第三者なら夜鹿が犯したただならぬ悪事をなんとも罵れよう。

確かに、およそ理路整然としている夜鹿に似合わぬ浅慮だ。

それでも。

「仕方無いじゃない……………」

好いてしまったのだ。

酒で濁せても消えはしない迷いを散らしたくて、膝枕に載る頭を手慰みに指を漉き呟く。

過去、夜鹿は天秤に掛けた。

義か雪音か。

選んだ時に腹は括った。

括った筈なのに。

この男は弟であり、息子であり、病める若者だ。

愛情は彼にこそ必要なのだ。

しかしそれは過酷な職務に荒み倦んでいる夜鹿も同じだった。

出自の不遇さを匂わせる事なく元気一杯に接してくれる雪音の温かな心に触れ合ってしまった。

優しさは飢えた脳に深く染み込んで溶け合い、情愛へと変わった。

私は彼を愛している。

従兄弟どころか直系の弟でも良い。

世界に仇為す人殺しの怪物でも良い。

この恥知らずで仁義なき感情を捨てられない。

誰にも打ち明けられない嘆きを無言で独白する。

色々あってもお前を爪先から頭の芯まで愛している、お前は私をどう思ってるのか、と教えてしまうなら事は簡単だ。

雪音が回答出来ず口籠るのは方が一にもあり得ないとしてもしかし、夜鹿は臆病だった。

雪音との関係の破綻に耐えられない。

鉄仮面に脆い心を隠し、また夢の延命を選ぶのだ。

膝に目を落とすと雪音が無防備な姿で首を置いていた。

筧夜鹿は警察官だ。

生来の真面目でしっかり者は職場での評価も高く、天地神明に誓って職務に励んできた。

ただ、周囲が思う程に強くはなかった。

「もう、そんなに触られてるとちゃんと観れないよ。今いいトコなんだから」

くつついて居眠りしていただけた雪音はどこへやら。

煮え切らない主人公になんだかんだと文句を付けても放送時間には必ず居間で待機している。

夜鹿を差し置いてすっかり番組の虜になっていた。

主人公の二股交際は双方の女にほぼ露呈した。

繁華街を腕を組む現場に鉢合わせになり、かなり苦しい言い訳を逃げるのがやつとだ。

領域の違いから直接の闘争には発展しないものの、女の意地で独占欲は燃え上がる。

職場、外出先、家と場所を問わず、誘惑を駆使した奪い合いは悪化の一途を辿る。

女一人に破滅しかける程に運も悪く流されやすい主人公だが、あの手この手で立ち回り均衡は危うく保たれている。

代償に私生活や仕事が壊れ始める。

妬み奪う愛憎入り交じった混沌の図だ。

愛欲の暴走特急と化した二人の鞘当て合戦が果てしなく続く訳もない。

同棲する恋人は妊娠を告げ、不意に王手をかけた。そこで番組は終わる。

少し気になる続きは翌月に持ち越しらしい。

「さつき何か言った？」

「……髪、伸びたわねって言ったの」

「ずっと放つといたからね。前髪も邪魔だしそろそろ切ろうかな」

「折角綺麗な髪なんだから適当にしたら勿体ないわよ。整えてあげる」

「姉さんが切ってくれるの？」

「ええ。週末に切りましょ」

「へへ、やったあ！ ありがとう！」

夜鹿の腹に顔を押し付けて喜びを表した。

無垢なる好意に胸が疼く。

雪音の顔を浅く触り、憂いを悟られまいと平常に振る舞う。

自分の懊悩に救いが在るとするのなら、この慕情が終わる日まで愛を

蓄えられる事だ。

暫し見つめ合うと障子も破れぬ優しきで雪音から口付けた。

酒の味が移った唇を舐めてはにかむ。

「ふふ、ビール味だ」

浅く触れるだけ。

優しい瞳に吸い込まれて目が逸らせなくなってしまふ。

妖艶な深みのある漆黒の虹彩に。

この男が人殺しを働くなど嘘のようだ。

だが死体は幻ではない。

幼少期から見せる残酷さはその内に健在なのだ。

「……する？ 生理終わったの？」

空気が破れた。

「デリカシーが足りないのがあなたの残念な所よ」
溜め息が出た。

やや冷めた眼で体を離し、頬を挟んで捏ねる。

「ふ、ふいまへん」

「しゃんとしていれば女なら放つとかないくらい格好いいんだから。いつか………出来る彼女の練習と思いなさい」

冗談めかして言おうとして言葉に詰まる。

少し本音を漏らし、自分でも驚いた。

表情はなんとか取り繕えたがなんたる失態か。

平静を保つ振りを職場で求められ続けて数年、もう誰にも見破れないと自負していた。

自宅で油断もしていたし、雪音が妙なことを口走るものだからつい動揺したせいだ。

近縁の血がそうさせるのか、内面では似たり寄ったりでも出力が苦手な似た者同士であった。

「今みたいな事は私にしか言っちゃ駄目よ?」

「誰に言うの?」

目を丸くして頭上に疑問符を浮かべる。

「それは……彼女とか、恋人とか……」

「彼女なんか要らなくない? 俺には姉さんがいるじゃん」

「おっほ………こほん」

不健全な嗚咽が出た。

ほぼ自分好みに育った男からの一段上の扱いが夜鹿には嬉し過ぎた。

女冥利に尽きる。

生理中でなかったら派手に押し倒していたところだ。

「姉さんは彼氏要らないの?」

雪音からそう言われるのは少々意外だった。

今までを思えばもつと独占的な執着を見せるかと思っていた。

欲を言えば雪音に嫉妬して貰いたかった。

「あなたが居るじゃない。もう満たされてるわ。仕事とあなたに一筋よ」

「それじゃ二筋でしょ」

「ふふっ、細かい事はいいじゃない」

二人で歯を磨いて横になると夜鹿が先に寝息を立てた。

右腕を抱き枕として貸し出したまま雪音は軽く瞑想を始める。

夜鹿は一つ勘違いをしている。

雪音は根拠なく斬り伏せて回ってはいない。

《魔剣 渚》が有罪判決を受けるには重大な要点が足りない。

警察が物的証拠と目撃情報を固めて法廷に引きずり出し、その罪を弾劾したとしよう。

説明される殺害の絵図はこうなる。

途方も無い大太刀か折り畳んで隠せる長柄の刃物を使い、足跡の位置からは遠すぎる間合いで一刀。

野太い腕で腕力に物を言わせた力技。

そうでなければ魔剣の説明が付かない。

付かない限りは立証されない。

三尺余りの長い凧丸でも、どう体を伸ばしても届かない。

届かないなら殺せない。

真つ当な捜査と推測では必ず破綻する。

我流秘剣渚を実演出来るものなど雪音の他に誰が居よう。

指紋が残っているように近くの間人に見られていようが、物理的に不可能な犯行の図を描いても裁判官から有罪は下らない。

現実に現れない《魔剣》をどうして裁けようか。

仮に他の人類のアリバイが有り九十九%雪音が犯人の状況であっても、その一点だけは絶対に不落なのだ。

見えず、読めず、躲せず、裁けず。

《魔剣》の脅威は揺るがない。

一部始終を目撃される事は唯一の急所といえ、雪音は十代で獅子吼より皆伝を授かっている。

汎ゆる瞬間、眠りの中でさえ素人の気配を探るのは訳もない。

コンマ一秒未満の抜刀を素人が見た所で、いつ抜いていつ斬ったかも分かるまいが。

この理屈を夜鹿に明かせないのが残念だが、秘密は守られてこそ意

味がある。

手管が残らず白日の下に晒されたとして、効果は減じない。
究極の不能犯は闇の中で笑っていた。

PART 23

何時まで打ちひしがれていたか、立ち上がって動けるまで感情を熟するには長い時間を要した。

夜空の中天に上っていた月の下を亀の歩みで帰路に就いた。

手の中には稽古中に気を散らさないよう電源を切っていた携帯がある。

電源を灯すと待ち受け画面は両親と祖父と少し前に道場で撮った、何でもない家族写真だ。

牡丹は両親に挟まれ微笑み、鬼兵は仏頂面で写っている。

雪音の暴行と転倒で液晶ガラスは罅割れているが機能は問題無さそうだった。

数秒の操作で真偽ははっきりする。

電話を掛けて、応答があれば善し。

無ければ……。

道を外れた人間性を再確認して真実味を帯びる。

尾鰭が付いた都市伝説と疑わなかったその実態は噂以上。

誇張抜きの剣の凶徒。

巷を騒がす剣士殺し。

正体不明にして常勝不敗の剣豪。

あれは確かに、戦ったが最後、命はない。

悪名を馳せる剣兇に寡黙な祖父は覚悟を決めた。

少なくとも牡丹は二十年の生涯で一度も目撃したことが無い、きつとあの口ぶりでは相対したのだろう。

かつて手合わせした誰よりも鋭く冴えた殺人剣の使い手と。

身命を賭して戦ったのだろう。

きつと閃光のような駆け引きで、そして結果は考えたくもない。

神納流合戦兵法は峰打ちを多用し軽傷に留めて制圧するのを本旨とする。

対して雪音の武蔵一刀流は骨を断たせて命を潰すような剣術だ。

突かれても斬られても、どこからでも致命の一太刀を浴びせる死兵

を倒す道理はない。

むべなるかな、鬼兵に逃れ得ぬ死を齎した。

暴行を受けている最中は惑わす為の戯言であれと脆く願っていた。重い足で帰った家は人だかりと警察車両の赤色灯に包まれていた。

一握りの願いは儂く散る。

規制線を張られた生家を目の当たりにした牡丹の中で、何かが割れた。

鼻に纏わり付く饅えた血の臭いを濃く感じる。

人だかりを抜けて警官に名乗ると車両に乗せられ近場の警察署で事情聴取と状況説明がなされた。

熟練した扱いの刃物に切断された何かが転がるか或いは弾け飛び、壁や天井まで血の海だったと云う。

熟練の刑事は刺激の強くないよう選んだ断片的な屋内の写真で状況を説明した。

激昂するでもなく、冷たく腑に落ちた。

なるほど、言に違えず斬っていたか、と。

生存者は居ない。

師範の祖父を始め、両親と主な門弟十数名は塵殺されていた。

亡骸の傍にはそれぞれの愛刀があり、一人目の撲殺を皮切りに乱戦に持ち込むも残らず敗死したと見られている。

当主の出義鬼兵は、最後に斬られた。

鬼兵は相当な手練れだった。

剣術にそこそ詳しい鑑識の人間は活人剣の出義鬼兵は高名な剣術家だと教えた。

後の先の達人だと。

だからより恐ろしい。

しかも剣士達の傍らに転がった刀の刃は血飛沫を除いて綺麗なまま。

写真を撮った鑑識も唸らされる。

「全員が一太刀でやられています。奴の無傷記録、また更新ですよ」「化け物め……」

圧倒的な強さが剣兇の仕業と証明する。

包囲をもつともせず撫で斬り、疲労の不利を負って完勝した剣兇の恐ろしさを克明にする。

闇金業者を襲撃したのも剣兇だ。

戦国時代でもなくこんな馬鹿げた猟奇犯が東京に何人も居てたまるか。

人斬りが多発して交番まで襲撃されてはいるが流石に日本もそこまで堕ちてない。

牡丹と話した熟練の刑事は傷心を案じた。

家族も友も師も一遍に失った、その尋常ならざる胸中や如何に。

変わらぬ明日が来るといふ漠然とした幸せは根底から破壊された。

だといふのに淡々と受け答えに応じる様は精神に異常を来して爆発する寸前の収縮にも見られた。

自暴自棄や自殺の強い前兆だ。

後日にふつと命を絶つ恐れがある。

そんなふうには。

今年で勤続二十年となる木場十蔵警部補は過剰な心配という意味で牡丹を見誤っていた。

それもやむを得ない。

家族と仲間を殺されるという窮状に眈々と逆撃を狙う女の思考は脳を逆様にしても出るまい。

しかも実際はその下手人から暴行まで受けているのだ。

酷いショック状態でまともな思考力は残されていない。

しかし、である。

汎ゆる事柄、生物、物体は常識から外れた例外が必ず存在する。

出義牡丹はそれだ。

表面上の感情の処理はどうあれ、たった数日で二度も痛めつけられた雪音への闘志を未だ燃やしている。

雪辱戦に勝ったとて誰も戻らない。

活人剣を捨てた仇討ちで得られる誇りもない。

それでも殺す。

警察になど縋らない。

何をしてでも技を磨き、命に換えても剣兇を殺す。

泣き寝入りもしない。

贖いは剣兇に倣うべし。

あのつるりとしたにやけ顔に吠え面をかかせ、泣き喚き、許しを請わせる。

刀を踏み躪り碎いて、八つ裂きにした死体を海に撒いてやる。

そう決めた。

飽く無き闘争心は愚かを超えて、まさに超人的精神としか言い様が無い。

長らく続く社会は共存を前提にした枷を人間に与える。

汝、殺すなかれと。

その刷り込みの結果として大半の人間はどんなに怒り狂おうが殺さない、殺せない。

引き金を引くだけで済むとしても拒否する。

生々しい記憶が残ることを恐れて。

ところが雪音に斬りかかり確実に命を絶つ軌道で剣を振った。

煮詰まった憎悪の剣は雪音には良いものだった。

目論見通り迷いは消えて、ただの人斬りが残る。

しかし近年までお淑やかな学生生活を満喫していた牡丹に修羅の素養が有ると、天の他に知るのは雪音ただ一人。

よもや、うら若く眉目秀麗な乙女が斯くも真つ黒な一物を腹に抱えているとは刑事さえ夢にも思うまい。

警察の事情聴取を全て上の空で聞き流した牡丹の心に、地獄の門は開かれた。

「出義さん。我々は必ず剣兇を裁きます。だから一人で仇討ちなんて無茶はしないで下さい。いいですね？」

「ええ、はい」

「お心細ければ、婦警を置くか我々が保護という形も有りますが……」
「いえ、お構いなく」

「………そうですか。奴は現場に戻る事は有りませんが、念の為にしば

らく武装した警官に警戒に当たらせませす」

妙齡の乙女に似合わぬ硬さを木場警部補は心配した。

職業柄、多様な犯罪者を見る。

冷たい後悔のない殺人者の顔だった。

一夜の事情聴取の間、雪音の存在には触れなかった。

現場と自宅が隣接する牡丹を気遣い刑事が申し出た保護を固辞し、

まだ朝日が届かない玄関を潜る。

牡丹は灯りも点けず座り込む。

刀を抱き、無言で、その眼は闇を見ていた。

「大いなる一歩、か」

そう書いた付箋紙を貼られた鑑識の纏めた資料に目を通す。

道場内に靴跡は無かった。

素足で戦った訳だ。

剣兇が人間であるなら汗も皮脂も必ず存在する。

純金より価値のある情報を得た木場は沸々と燃えていた。

足掛け三年も警察が血眼になって追う剣兇は闇市と関係が深いと

捜査関係者は考えている。

あの悪所は広大だ。

球場を楽に納められる。

バブル期に自治体の目玉となる複合商業施設にする予定で開業し

たが治安と景気の悪化で閉鎖され、所有権も二転三転。

管理不行届で悪党や移民が住み着き、無許可の改築工事を繰り返し

て生まれた巨城。

住居、商店、倉庫、事務所、市場、賭場、それらの要素を雑多に混

ざった複雑怪奇な内部構造。

隠し部屋が無数に仕込まれ、何人屯しているのかも不明瞭。

施設の規模からして千か二千は出て来てもおかしくない。

破落戸が増え、犯罪者が隠れ、いつからか組織が統括する鉄筋造り

の城。

そこにはある種の伝説がある。

入る人数より出る人数が明らかに少ない。

情報通曰く、不正解。

出てはいる。

何人かの人間は解体されて捨てやすくして運び出されるだけで。勿論売れる部位は無駄なく売られる。

そんな凶悪で鳴らした闇市に正面から強制捜査に踏み切れないのはひとえに危険だからだ。

闇市の入り組んだ狭い通路で腕利きの剣士と立ち合うなら散弾銃を装備してようやく同等。

化生共と切った張ったの大立ち回り前提では捜査員が何十人居ても死体袋を増やしてしまう。

法改正で警察の武装は強化されてもそれを使うのは凡人に過ぎないのだ。

撃つても当たらなければ無意味。

当たっても反撃で警官は死ぬ。

一昔前にそう分からされた。

抑止力の低下を恐れて誰も口にはしないが、これが警察組織の得た知見だ。

害虫の巣窟め。

いつか焼き払ってやる。

木場はもう何度目の苦い思いを飲み込み、資料を頭に入力していた。